

# 続・戦後世代からの発言

—— 真正なる日本人を目指して ——

国文研叢書

No. 29

社団法人 国民文化研究会

続・戦後世代からの発言——真正なる日本人を目指して——

## 『続・戦後世代からの発言』の刊行に寄せて

(社)国民文化研究会理事長  
元・亜細亜大学教授

小田村寅二郎

(数へ、七十四歳)

本書は、本年(昭和六十二年)三月に、若い社会人の本会会員たちが既往に発表した文を編して、「国文研叢書 No.28」として出版した『戦後世代からの発言―真正なる日本人を指して―』の、「続編」ともいふべきもので、同じ表題に「続」の一字を冠して「同叢書 No.29」として刊行するものである。

前書は、昭和三十年代から昭和六十年代にかけて発表された「小論文」四十編を集録したのに対して、本書は昭和四十年代以降に発表された、いはば「少壯社会人としての社会生活から湧き出た体験談」を中心に、二十五編(内、女性執筆五編)を集録したものである。その内容はいづれも、両書に副題として添へた「―真正なる日本人を指して―」の趣旨を体した若い人たちが、戦後日本の社会各層での生活を送る中で、時に記し、また時に語った、生きた「ことば」であることに変わりはない。私のごとき老齢の者も、こ

れら二十歳台、三十歳台の体験発表者・執筆者たちの眞摯な生活姿勢には、全く頭が下がる思ひである。そしてこれらの文の行間に、わが日本の貴い歴史と傳統とを自己の日常生活の中に継承し実現しようとする意志が、力強く息づいてゐるのが感じられ、つくづく「日本は亡びず!!」との感を深くした。本書を、前書と合せて世に送る次第である。

私も国民文化研究会が毎年夏に営んできた「合宿教室」は、すでに三十二回を数へ、その参加者総数も今年で九、三〇〇名を越すこととなった。願れば、ささやかな歩みではあったが、三分の一世紀も続いたのが有難く回想されるところである。同時にこの歩みは、常に“MAN TO MAN”の運動であつたし、“一人の眞正なる日本人出よ!!”の訴へでもあつた。本書に集録された二十一編の男女の「体験発表」は、いづれも右の「合宿教室」でのものであり、全国六十前後の大学から集つて来た三〇〇名前後の男女大学生たちに向つて語られ、また、それらの大学生が耳を澄ませて聴き入つてゐたものであつた。

我々のいふ“MAN TO MAN 運動”とは、全心身を傾けて語るかうした内なる心の告白が、“誠心”となつてあらはれ、それが聴く人の“誠心”に感応していくことを目指

してゐるものである。本書はその客証の一つでもあると思ふ。

私は本書の成るを見て、『眞心が流露し合ひ交流し合ふ人間関係』——それは、記紀万葉時代からわが日本の国内くわにに縦横に往き来きしてゐた人間関係であつたはずだが、その美しい人間関係を、これからの日本に再び甦へらせねばならない、と改めて強く思ったことである。

最後に、本書は内容の選択をはじめ、編集作業の一切を、前書と同じく三十歳台の方々に一任した。その人々の現職と人名は、「あとがき」の中に記載されたのでここでは省略するが、いづれも多忙な勤務生活の余暇をさいての度たびかさなる集會や、また、校正刷りを交互に交換しつつ入念な作業を続けてくださり、その間には、お互ひの友情もさらに深められていったに違ひない。それは私にとつても喜ばしい限りであり、多大の労苦に深甚の謝意を表しつつ、本書の上梓を共に欣び合ひたい、と思ふ。

昭和六十二年十一月二十日

## 目次

『続・戦後世代からの発言』の刊行に寄せて——小田村寅二郎——

### 第一編 社会生活の中で——「青年体験発表」から——

合宿教室の中から見つけた私の生き方（昭和四十七年）	奥富修一	3
太平洋上で定めた私の生き方（昭和四十八年）	小野吉宣	15
学生生活と社会生活をむすぶもの（昭和四十九年）	久々宮 章	24
私の社会人生活を支へてゐるもの（昭和五十一年）	高岡正人	35
心を見つめることの大切さについて（昭和五十一年）	太田さよ子（旧姓小山）	46
ありのままのところで感じること（昭和五十二年）	林田景子（旧姓味酒）	56
心のつながりを求めて（昭和五十三年）	小原民子（旧姓大久保）	66

混乱した教育現場で感じたこと（昭和五十四年）	坂口秀俊	74
いのちを見つめて（昭和五十四年）	久米由美子（旧姓前園）	82
動乱の生（昭和五十四年）	大町憲朗	90
心をはたらかせて（昭和五十五年）	小原敏子（旧姓谷口）	97
瀬上安正先生のこと（昭和五十五年）	松田信一郎	106
教員生活における一つの体験（昭和五十六年）	小林 至	114
臨床実習の中で思ったこと（昭和五十七年）	笠 普一朗	122
新任校での体験から（昭和五十七年）	竹下鉄郎	130
戦後の国語改革について（昭和五十八年）	藤井 貢	137
桑原暁一先生のこと（昭和五十九年）	絹田洋一	144
硫黄島で思ったこと（昭和五十九年）	山根 清	154
母の手紙（昭和六十年）	内海勝彦	161
ロンドン留学より帰りて（昭和六十年）	山口秀範	169
心に残る言葉（昭和六十一年）	西山八郎	182

第二編 青年講義

祖国と慰霊と——現代日本に失はれたもの——(昭和五十一年)……………	志賀建一郎……………	191
詩と哲學の恢復を——現代青年の課題として——(昭和五十八年)……………	占部賢志……………	204
戦後を考へる——精神の自立のために——(昭和六十年)……………	今林賢郁……………	231
学問の再生のために(昭和六十一年)……………	長澤一成……………	255
あとがき……………	青山直幸……………	276



第一編

社会生活の中で——「青年体験発表から」——



## 合宿教室の中から見つけた私の生き方 昭和47年第17回「合宿教室」

奥富修一（東急建設（株）勤務建設技師・27歳・東京工業大昭44卒）

東急建設の奥富でございます。私もただいまお話しなさいました今林さんと共に国民文化研究会の会員でございます。今林さんは学生のころより毎回この合宿教室に参加なされ、引き続き卒業後もこの会に力を注がれてをられますが、私の場合は多少それと異なりまして、初めてこの合宿教室に参加いたしましたのは社会に出た年の夏でございます。当時私は多少社会と言ひますか、職業生活といふものに疑問を持ってをりましたが、ちやうどさういふときにこの合宿教室のあることを知りまして休暇をとるのに非常に困難な時期ではありましたが思ひ切つて参加いたしました。以来毎回この合宿に参加してをります。

私が初めて参加いたしましたときに、いろいろ貴重な経験、日頃得られないやうな経験をたくさんいたしました。その中でも私にとって非常に大きな経験は和歌を作る、和歌

といふものを創作するといふことをごさいました。さきほどみなさんが和歌の導入講義を聞かれ、そしてバスに乗って草千里に行き、それから中岳に登山して帰ってこられました。が、私も同じやうに三年前、合宿教室がこの阿蘇で行なはれましたが、そのとき初めて参加いたしました。みなさまと同じやうに阿蘇へ登ったことを覚えてをります。しかしながらその当時の私にとって和歌を作るといふことがどういふ意味を持つのかといふことをまだよく知りませんでしたので、ただなんとなく重荷になるやうな、さういふ気持で登山をしたことを覚えてをります。明日の晩にはけふみなさんがさきほど提出されました和歌の作品について全体批評および班別の相互批評といふなかで、一字一句について細かい点に至るまで検討されることだらうと考へます。私も初めて作りました和歌を班員のみなさんに見ていただき、ともすれば、観念的に、あるひは概念的になりがちな自分の和歌を非常に鋭く厳しく指摘されたことを覚えてをります。

さういふやうな経験をこの合宿教室でいたしましたして、私は山を降りていったわけでありませんが、会社へ帰りましてからもこの和歌を作るといふ経験は私にとって非常に大きな力を与へてくれました。ともすれば日頃どうしても散漫になりがちな自分の考へを一つに集

中して、そして自分の身の周りに起る事柄を正確に見つめ、的確に捉へて、それを相互に伝へていかうとする努力をつみ重ねることが、私には非常に大きな力となりました。私は和歌といふものが決して言葉をもてあそぶやうなものではないことを知りました。同時に私はそれまで和歌と言へばただ単に専門の歌人の方たちがお作りになるのであって、自分とは無縁のものだと思つてをりましたが、合宿教室で和歌を作ることを経験いたしましたから、いやさうではないんだ、和歌といふものは、自分に非常に身近かなところにあるのだと思ふやうになりました。身近かなところにあると言ふよりは、むしろ自分自身の問題となつたわけです。三十一文字の中に自分の気持を、感じたままを歌ひ上げればいいと教はりしましたが、しかしそれを実際に実行するといふことは実にむづかしいことです。和歌を作るといふことは自分の心の内容を捉へるといふことではないかと思ひます。言葉と心といふものが一つでなければならぬといふやうにきのお話でもおっしゃいました。和歌といふものは自分の心の状態を否認なしにはっきりと映し出してしまふ。さういふものであると私は思ひます。当時私はさきほど御紹介にもありましたやうに、建築の現場に勤務してをりまして、東京にお住ひの方はご存じと思ひますが、品川の駅の前に立つ

超高層ホテルを建築中でございましたが、その中で私はヘルメットを被りながら現場の中を毎日のやうに駆けづりまはつてをりました。私がただいまヘルメットと言ひましたのは、いはゆる赤軍派や過激派学生たちが被るやうな赤ヘルとか白ヘルといふやうな類のものではなく、建築の現場でいろいろな危険から自分の身を守るために被つてをります、私にとりましては非常に神聖な、また誇り高きヘルメットでございます。さういふものを被りながら私は毎日のやうに現場で仕事をしてをりましたが、時にはさういふ現場の中でヘルメットの下で汗をぬぐひながら真夏の入道雲を見上げ、そして働く喜びといふものを和歌を通して表現したりしてをりました。

しかしながらさういふ生活を続けてゐるうちに、自分はさういふ非常に忙しい仕事に紛れてしまつて自分を見失つてはゐないだらうかと非常に気になるやうになりました。かうしてほんたうに自分の問題、人間とはいかに生くべきものなのか、あるひは学問にはどのやうに取り組んでゆくべきなのか、あるひは日本の国の将来は一体どうなつてゆくのだらうか、さういふことを決して自分の生活と切り離して考へることはできなくなりました。私はさういふ中で非常に少い時間しかありませんでしたが、その制約を受けた時間の範囲

内で勉強を続けてまゐりました。さういふ中で私が非常に心をひかれて読みましたものの中に、私のやうに現場の技術屋が読むものとしてはみなさんとしては意外と思はれるかも知れませんが、文芸評論家であります小林秀雄先生のお書きになった本がございました。私がいま先生と申し上げましたのは、ちょうどいまから二年前のこの合宿教室に小林秀雄先生がお出でになりました、そしてそこで私が直接に先生から教へを受けたといふ意味で先生といふ言葉を使はせていただいてをります。その小林先生がお書きになりました中で、「私の人生観」といふ書物がございますが、その中で職業といふものに触れられた一節がございます。その中で小林先生は「職業には天職といふものがある」と言はれてをります。「職業といふものが人にとってほんたうに自分の喜びや悲しみといふものを託しても悔なければ、それこそ天職である」と言はれたそのお言葉が当時の私の生活、昼間は現場の中を駆けづりまはり、夜は夜で現場の机の前に坐り、そして図面のドローイングをしてをりました、それらの生活そのものが小林先生の言はれる「職業としての天職」としてよみがへってまゐりました。いはゆる世の中の一般の風潮としては職業あるひは会社といふものは、単に時間から時間、定時から定時の間を勤め上げさへすればそれで十分

なんだといふやうな考へが非常に多いかも知れませんが、決してそのやうな態度では職業そのものの喜びを得ることはできない、としみじみさう思ふやうになりました。

私はまた小林先生の本といっしょに古典も読んでまゐりました。古典といひますのは、単に古い時代の書物といふだけではなく、われわれの先輩が心を込めて書き綴られた文章といふ意味だと思ひます。私は理工系の単科大学を出ましたので古典に取り組むのは容易なことではございませんでした。しかしそれでも漢和辞典などと首っぴきで読んでをりましたが、そのうちにその古典の中に書かれてゐる言葉一つひとつが、自分にとって非常に魅力のあるものとなってきました。それは古典の中の言葉一つひとつにそれを書かれた著者のお心、真剣な生き方といふものが込められてゐる、そしてその情熱がその行間を通して直接に私の心を打つ、さういふことであつたからです。私は古典の中でも特に吉田松陰のお書きになつたものには強く心をひかれました。吉田松陰といふ方は幕末の志士の多くの方々を教育された方として有名でございますけれども、私はその吉田松陰のお書きになつたものを読むうちに次第に強くひかれてゆくのを覚えました。私はいまここで吉田松陰と呼びすてにしてをりますが、自分の心の中では松陰先生と呼ばせていただいてをりま



す。それはこの世の中で私自身が直接にあひまみえる機会のある方ではございませんが、しかし私にとってはこの世に生きてゐる方々以上に身近かに感じられますし、また先生の言葉を讀むことによつて常に勇氣づけられてゐるからでございます。

二年前の合宿に、さきほどご紹介いたしました小林秀雄先生がおみえになりましたが、そのときの小林先生のお言葉がいまやうやくわかりかけてきたやうな思ひであります。そのお言葉と言ひますのは、「歴史とは上手に思ひ出すことであり、古への人々の身振り、手振りといふものがまざまざと自分の心によみがへつてくるといふことである」といふ言葉であります。私は古典を讀むことを通して歴史の渦の真只中に自ら飛び込んでゆき、直接に古人と胸を開いて語りあひ肌で触れ合ふことの出来るさういふ世界が現実に存在するといふことを、身をもつて感じました。私はいま二年前の小林先生のお言葉がやうやくわかりかけてきたやうな気がすると申し上げましたが、しかしそれは小林秀雄先生だけに限ることではなく、この合宿教室に來られてゐる多くの講師の先生方、今回もいままで何人かの先生方のお話ございましたが、その講師の先生方のお話は、決してその場で消えてしまふものではありません。そのときには先生のお話がわからなくても何年かのちの私た

たちの生活に必ずその先生のお言葉がよみがへってくるはずだと私は思ってをります。さういふ気持で私は今回四回目の参加になりますが、講師の先生方のお話を初参加の方にも決して負けないつもりで一言一句も聞きもらさないつもりで聞いてをります。

この合宿教室の持つてゐる一つの特徴は、私はそのやうなところにあるのではないかと思つてをりますが、さらに申し上げますと、世の中一般に行はれてゐる研修会の形式といひますのは、多くがいはゆる指導者と被指導者、教へるものと教へられるものとが非常に明確に區別されてをりますが、さういふものに比べて、この合宿教室の運営は同学同行と申しますか、教へるものと教へられるものとが一つに溶け合つて、そしてお互ひに負けないうやうに切磋琢磨して勉強し合つてゐる、さういふものがこの合宿教室に具体的に存在してゐると私は思ふのです。そしてそれはいまの世の中では非常に稀なことではないでせうか。

私はただいま「同学同行」と申し上げました。同じく学び同じく行なふといふことです。が、その同学同行といふ根本的な姿勢を真に支へてゐるものは何だらうか。それについて一言申し上げたいと思ひます。それは他でもなく昨晚、みなさまが輪読なさいました聖徳

太子がお書き残しになられましたものの中に「十七条憲法」といふものがございます。そしてその中の第十条に次のやうな言葉がございます。私はその言葉がこの合宿の根本的な姿勢を支へてゐるものではないかと思つてをります。それは十条の中の最後の方にある言葉でございますが、「彼是とする時は即ち我は非とす。我是とする時は即ち彼は非とす。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ」といふ言葉です。この「共に是れ凡夫」といふ言葉、このお言葉に私は非常に心を打たれてをりますが、この「共に是れ凡夫」といふ意味は、人には社会的な地位の差、あるひは能力の差、そしてまた財産の違ひとかいふやうにいろいろの差はありませうが、つきつめて考へてゆけば人といふものは煩惱に満ち満ちた、あまりにも欠点の多い、まったくの凡夫ではないのかといふ言葉だらうと思ひます。私はこの「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉を自分で噛みしめますと、ただ単に欠点だらけの弱い人間同士がなれなれしく肩を抱き合つてゆかうではないかといふやうな消極的な気持ではなく、自ら凡夫であるといふ自覚に立つときに、それから凡夫として限りある生命を精一杯に生きてゆかうではないか、お互ひに励し合ひながら生きてゆかうではないかといふ、さういふ気持が私には非常に強くわきあがってまゐりま

す。

私は現在、会社生活をしてをりますが、その会社の中での一番関心事はいはゆる昇進といふことでございます。具体的に申しますと係長から課長になり、課長から部長、重役になつてゆきたいといふやうなことでございますが、私自身もそのやうな上の地位に憧れるといふ気持を全く捨てようとは思ひません。しかしそのやうなことだけに自分の全人生をひきずりまはされてしまふやうな、さういふ惨めな生き方だけは決してしたくないと思つてをります。さきほど申し上げました聖徳太子は、そのご生涯を通じて人としての道は何かといふことを求められた方であります。人としていかに生くべきか、あるひは人としてこれでいいのだらうかといふことを常にお求めになられた方であらうと私は思つてをります。私自身もまた人として踏み行なふべき道といふものを常に自分の心の中に求めてゆきたいと思つてをります。

私は最近、ここ数か月間学生の方々とお付き合ひする機会が沢山ございましたが、その間、現代の学生の中には自ら顧るといふことを忘れて、いたづらに他ばかりを非難するといふ姿勢が実に強いといふことを感じました。それは非常に残念なことであつてそれがき

っと高じてくれば「共に是れ凡夫」として生きる生き方、さきほど川井先生からお話がございましたが、瑞々しい情感をたたへ、常に心豊かにして生きてゆかうといふ悲痛な願ひを無惨にも打ち砕くやうな生き方につながってくる。かうして人間らしい生き方を真向うから否定するやうな共産革命を理想とし、はげしい破壊思想をいだいて学園の中を駆けつりまはるといふことになるのです。ただいま私がここ数か月の間、多くの学生の方々とお話しする機会がありましたと申し上げましたが、それは他でもなく、この合宿教室への参加の薦めのためでございました。私はここ数か月間の社会人生活の中のほとんどすべての時間をこの合宿への勧誘に費してまわりました。一日の勤務が終りますと毎日のやうに学生の方とお会ひしました。その中には自分の学校の後輩もありましたし、また友だちから紹介された方もございました。とにかく一人でも多くの方にこの合宿のあることを知っていただきたい、そしてできるならこの合宿に参加して勉強していつてもらひたい、さういふ気持ちに支へられやってみりました。私が初参加のときに経験いたしました湧き上がるやうな喜び、そして生きてゆくことの充実感、それを一人でも多くの方に知らせてあげなければいけない、それこそ自分の義務ではないかといふ気持ちにいつも支へられてをりまし

た。しかしながら私の無力のゆゑに今日この場には私が勧誘いたしました方々は学生の方で四人、そして自分の会社の後輩一人きりしか参加していただくことはできませんでしたが、私の行なひました勧誘はただ単なる勧誘ではございません。それは自分の、限りある生命、その中でほんたうに自分とともに学んでゆける友だちが欲しい。一人でも多くの友を探してゆきたい、限りある生命を尽くして悔いない友、さういふ友を一人でも欲しいといふ気持、その一念があるがゆゑに行なつたものでございました。私が初参加して以来三年経ちました。これまでお話ししてまゐりましたやうに、私は職業の中から古典を学び、職業にたづさはる生活を通して和歌といふものを作つてまゐりましたが、いまやうやく人生といふものがいかに生きていったらいいものなのか、あるひは学問といふものはどのやうに取り組んでいったらいいのかといふことがわかつてまゐりました。しかし、ここでみなさんにはつきり申し上げておきたいことは、それは決して私自身の力でやれたのではないといふことです。

いままで申し上げてまゐりましたやうな方々、小林秀雄先生、あるひは吉田松陰、そして聖徳太子、さういふ方々がご努力、ご精進なされたあとを学ばせていただいたことによ

って開かれてきたものでございます。私は日本といふ歴史のある国に生れた自分の幸せをほんたうにありがたいと思つてをります。いま申し上げました方々以外にも日本の長い歴史を支へてこられた方々、營々として日本の国を築いてこられた方々もたくさんあらうかと思ひます。そして、さういふ方々のたゆみないご努力のあとを自分が知ることによつて、明日からの自分の生き方を正してゆき、さういふ方々に負けないやう精一杯に生きてゆきたい、さういふ気持が自づと湧いてくるのであります。

われわれもいづれは死ぬときがまゐります。後世のわれわれの子孫からほんたうに尊敬されるに価する、決して恥ぢることのない自分でありたいと思つてをります。

## 太平洋上で定めた私の生き方

昭和48年第18回「合宿教室」

小野吉宣（福岡県立嘉穂高校教諭・27歳・西南学院大昭45卒）

私がこの合宿教室に初めて参加しましたのは、福岡の西南学院大学の二年生のときでし

た。私はそのとき非常に多くのことに目を開かれました。それらの詳細については省かせていただきますが、さまざまな問題について私は文字通りに目の覚めるやうな思ひがいたしました。そこで教はったことはその後の私の生き方の根本をなしてきてをります。

合宿教室で出会ひました先生方や先輩方とはその後、福岡の地区での小合宿や、古典の輪読、和歌の創作などを一緒にやらせていただくお陰で、ますます親密なお付き合いをさせていただくやうになりましたが、先生方が書かれた文、或ひは先生方から紹介していただいた本などを私は文字通りなめ尽くすやうに読んでまゐりました。そして先生方や友達と話しをするときは一言も聞き漏らすまいといったやうな気持で、いままででない真剣さで、向ふやうになりました。渴いた砂地に潤ひの雨が降るやうに、私の心に古典の文章、先生方のお言葉、友達の言葉がしみ込んでまゐりました。いまはつきりと私に言へますことは、この合宿教室で出会った先生方、友達との付き合いが深くなればなるほど、私なりに学びの道を深めてゆくことができたといふことです。

このやうにして、勉強してゐたわけですが、昭和四十三年の合宿教室が終つた後に、国民文化研究会主催による東南アジア研修旅行団が編成されました。団長は昨日ご講義なき



いました国民文化研究会副理事長の川井先生、副団長は現在農林省にお勤めの行武さんでした。そして八名の団員に、私も加へていただくことになりました。この旅行には、二つの目的がありました。第一には訪れた国々をつぶさに見てそこに潜んでゐる問題を追求する。次にこの旅行を通じて人としての生き方を練り、真の学問に対する姿勢を鍛へてゆくといふことでした。従つて物見遊山の旅行でなく、綿密なスケジュールのもとに、規則正しい生活を送つてきたわけであります。私達の乗り込んだ船は「春光丸」といふ貨客船で、それには船室が十ありましたが、その船室全部を借り受け、いはば、そこを合宿場として一カ月余の長期研修旅行を展開していったわけです。

ここでは私が訪れた国の中で一番私の心に残り、私の生き方に強い影響を与へたフィリピンの事情についてお話したいと思ひます。フィリピンで強く感じましたことは植民地支配を受けてゐたために歴史に断絶があること、それに公用語がないといふ二点でした。フィリピンは現在では、東南アジアでは最も安定した独立国と思はれますが、国家的統一がなされる前に、すでに十六世紀のころから、スペインの支配を受け、引き続きアメリカの占領を受けてきました。その間四百年にわたつて植民地支配による悲しい歴史を刻んでき

たわけです。ですから独立後の現在と本当の自分たちの国の歴史とをつながうとしても、そこには四百年の断絶があるわけです。仮に四百年前につないだにしても、そこには非常に原始的な部族社会の歴史しかないのです。実はそのやうなものの上に、危っかしく建っているのがフィリピンの姿なのです。

次に公用語のことですが、フィリピンは独立後四十幾つあった土語の中から、比較的心部に於て用ひられてゐたタガログ語といふのを公用語に定めてをります。しかし現実には英語が公用語としてまかり通つてをります。なぜなら、タガログ語は植民地支配を受けてゐた四百年の間言語としての発達をしてゐなかつた。従つて現代の高度な文明の生み出したもの、或は人間の複雑な心理を表はすには語彙が乏しすぎるのです。ですからフィリピン国民がお互ひに意志を疎通しようとしても、独立後の現代でありながら植民地支配を受けてゐた時代の言語—英語—の力に頼らざるを得ないので。特に高度な学問研究を行なふ大学に於ては尚更のこと、殆どすべてが英語でなされてをります。私たちはフィリピン大学を訪れて日本研究会の学生達と会談をしましたが、そのうちの一人の学生は「日本は第二次大戦後数年にわたつてアメリカの支配を受けましたが、現在は何語で授業がな

されてゐますか。」と質問するのです。これは私たちにとっては驚くべき質問ですが、彼らは物理にせよ歴史にせよ全ての学問を英語でやってゐるわけですから、彼らにとっては当然な質問なのでせう。

私達が日本では大学であらうとどこであらうと学問の研究はすべて日本語でしてをりますと答へますと、彼らは我々をうらやましさうな目で見たものでした。彼らは言論活動をするにせよ、学問研究をするにせよ、全て英語に頼らざるを得ないのです。このことは私にフィリピンにゐて、遠く想ひを祖国日本に馳せる大きなきっかけとなりました。

日本と云ふ国は今日村松先生も言はれたやうに、一言語一民族にまともってをります。私たちはこのことを、当然のこととしてみすごしがちですが、フィリピンの現状を見てそれがどんなに大切なことであるかといふことが今さらのやうに身に沁みました。そしてどうして同じアジア地域の中で日本だけが早くから独立を保ち続けることが出来たのだらうかといふ疑問が湧いてきました。その疑問に答へてくれたのが船の中で皆で読んでゐた「国史より観たる皇室」といふ徳富蘇峰翁の書かれた本でした。それには「日本は皇室による国家的統一がなされるまでは混合民族の寄り集まりで、それは、ちやうどギリシャのポリ

スのやうに群雄割拠してゐた。それを武力だけでなく文化的にも統一されたのが皇室である。」といふやうに書かれてをりました。私は、ここを読んで思ったことは、万一、皇室による統一がなかったならば、日本はフィリピンのやうに国家的統一がなされる前に他民族の支配を受けなければならなかつたのではなからうかといふことでした。それを裏付けるかのやうに、フィリピン大使館の熊田といふ方が次のやうな話しをされました。私達が熊田氏に大使館でお会ひしたとき、現在フィリピンは国家建設の為には力をつくしてゐるが、丁度日本の明治維新の頃にあたるのではないでせうかと尋ねますと、熊田氏は「フィリピンは明治維新どころではない。まだ本当には国家的統一がなされてゐない、いふならば奈良以前の状態ではないでせうか。」といはれ更に、「奈良以前のやうな時代に高層ビルを建設してゐるのがフィリピンの現状なのです。いはば原始的な部族社会の上にアメリカの文明を移植してゐるやうなものなのです。」といはれました。熊田氏は奈良以前といふ言葉を使はれましたけれども、さういひますと、フィリピンにはいまだに自国語で書かれた万葉集のやうな国民的な詩集はありません。それに国家を統一した方々の系譜を書くにしても独立後二十年ばかりの歴史しか書けないわけです。それにひき比べ万葉集をみてみます

と、日本では千二百年も前からあらゆる階層の者が心の躍動を三十一文字の中に微妙な心のさゆらぎものがさず表現してをります。さきの大東亜戦争で日本は敗北しましたけれども、日本語はあらゆるところで生きてをりますし、文化の中心として天皇が肇国以来存続してあつしやることに変わりがありません。歴史の長い断絶をうめる術もなく、公用語が普及しないで苦しんであるフィリピンにあつて、私たちは祖国日本に対する深い感激のおもひと強い確信をいだしめられたのです。

私達が訪れるところには大東亜戦争の激戦地が並んでをります。まづ戦艦大和が沈められた沖繩沖、カナダ軍と戦ったホンコン島それから大海戦が行なはれたレイテ沖、シブヤン海等です。私達はそれらの戦跡を通過する度毎に慰霊追悼を行つてまゐりました。船上で行ふときは甲板に整列し、黙禱をささげます。君が代を斉唱し、川井先生の慰霊追悼の言葉をいただきます。そして一人づつ海に向つて花を捧げ持ち、海の底に眠つてをられる方々の御霊安かれと祈りつつ花を捧げました。最後に「海ゆかば」を歌ひます。「海ゆかば」を歌つてゐると私達の目の前に、遠く祖国を離れ、海戦で海の底にまだ眠つてをられる方々の顔が浮んで来るやうで涙なしに歌ひ終へることができませんでした。私達が海

に捧げた花は船のずっと後方に流されてゆく。それを見てをりますと、海の底に眠ってをられる戦死した方々を残してゆくやうな後髪を引かれるやうな思ひがいたしました。平和な日々を私達は送ってゐますけれども、このやうに祖国の為に命を捧げた方々の死を無駄にしないためにはどのやうに生きてらいいのだらうかと、私達は慰霊追悼が終つたあとの古典輪読では本当に祈るやうなおもひで古典を読みました。

船旅も終りに近づき、日本を離れて一月あまりもたつと、今、日本はどのやうになつてゐるのだらうかといふ思ひがしきりに湧いてきます。その思ひは船に送られて来る電送新聞で満たすことができました。その頃は大学紛争が最も激しいときでしたが、ある日東大では学生達が安田講堂にたてこもり遺書まで残して徹底して戦つてゐると云ふ報告がでてゐました。ところがその翌々日、学生達が機動隊に排除されたといふ活字が目に入りました。私は新聞の見出しを見た一瞬彼らは、警官に射殺されたか、或は自殺したのではないだらうかと思ひました。ところが新聞を読みすすんでゆきますと、彼らはいままで敵として戦つてゐた機動隊の前に全員白旗を掲げ出てきてゐたのでした。彼らは「日本は駄目だから、マルクス・レーニン主義による革命を起こさなければならぬ」と言つて、遺書ま

で残して戦つてゐたはずで。ところが戦力尽きるや自分達のやつたことに少しのつくな  
ひもせずのこのこと出て来る。全く甘えきつた態度ではないでせうか。彼らは「日本は  
駄目だ」と言つてゐるが、本当に日本の良さを知るために一度でも情熱を注いだことがあ  
つたのでせうか。どうも彼らは的はづれなところで若い情熱を爆発させてゐるやうで、彼  
らの姿があはれな操り人形のやうにみえて仕方がありませんでした。

私は非常に腹立たしい思ひで一人甲板に駆け上つて行きました。最後の訪問地のフィリ  
ピンの島々も既に視界から遠く去り、ただ見えるものといへば船の近く静かな波間に躍り  
出て、胸ビレを十字に広げ快げに飛んでゐるトビウヲだけでした。私はしばし全てを打忘  
れてそれを眺めてをりました。その日は鏡のやうに海は凧いでゐました。ふと船尾の方を  
みると、白い航跡が力強く泡立ってゐました。はるかかなたから続いてゐる航跡が船に近  
づくにつれぐつと力強く盛り上つてゐるのを見てみると、私にはそれが永遠の昔からずつ  
と一筋に続いてきた日本の命そのもののやうに思へてきました。そのとき私は古き御代に  
強く引き寄せられる感じがしました。日本には文字通り深い深い歴史がある。先人は私達  
に無限とも言へるほどの文化を残して下さつてゐる。そして豊かな生き方を示して下さつ

てゐる。海の底に沈み眠ってをられる戦死者の方々や異国の地に眠ってをられる戦死者の方々もこの日本の命を守って下さってゐるのだと思ひました。そして私は日本に生れて来て本当に良かったといふ気持が胸の底から止めどなく湧き起ってきました。そのときでした、私の心の中で日本の歴史が一筋につながり息づいてきたのは。

船は日本へ向けて力強く走ってをります。私は紺碧の大海原にたちつづけてやまぬ白い一条の航跡をみながら、一筋に続いてきた日本の命を守る為に一生を捧げ、そこに帰ってゆくのが永久に自分を活かす道だと思ひました。この思ひを私は一路日本へ帰る船の上で深く胸内に刻み込みました。

## 学生生活と社会生活をむすぶもの

昭和49年第19回「合宿教室」

久々宮 章（東洋工業㈱発動機部勤務・26歳・九州大昭48卒）

只今御紹介戴きました久々宮です。昭和四十八年九州大学の機械科を卒業して、現在広



島の東洋工業に勤務致してをります。私の会社は自動車・工作機械・さく岩機のメーカーですが、その中でロータリーエンジン組立現場の技術員として働いてをります。毎日続々と新しいエンジンが組み立てられてをり、その完成されたエンジンの耐久性の調査と向上に資するのが私に課せられてゐる仕事であります。ですから、上からの命を受けあるひは自発的に実験項目を立案し、実施し、その結果を報告することが主な役目なのです。エンジンの分解組立も自分達の手で行なひますし、それに必要な部品も工場内のあちこち駆けづり回って調達します。作業服は、ひどい時は一日で油に塗れ、又手や顔も油だらけになってしまひます。かうして毎日があはただしく、経験もまだ浅いのですから、仕事に追はれがちで一日を終はり寮にたどり着くとホッとします。そんな中で休日を利用して大学時代の友人や広島 학생数名が寄り集って読書会を開いてをりますが、私にとりましてはそれは日々の生活の中でのかけがへのない刺激と励みになってをります。

今日ここに皆様の前でお話しするのは私のこれまで辿ってきた道、特に学生時代のことであります。これは私にとりまして過去のできごとといふよりも、今の私を支へ、今も私の心の中に生き続けてゐることなのであります。

私が大学へ入学した頃は丁度、大学管理法案の是非をめぐるって学内は騒然としてをりました。連日のやうにアジ演説が繰り返され、講義の最中でさへがんとマイクの声が鳴り響いてくることも少なくありませんでした。革命、人民、圧殺、闘争勝利、支配階級、さういった言葉が前後の脈絡もなく次々と飛び出して執拗に繰り返されるのでした。活動家達の眼は異様なまでに血走って焦点のない漠然とした空間に向けられてゐました。前にはヘルメットをかぶった学生達が、無感動な表情で下を俯いたまま話を聞いてをり、話の区切りが付くたびに紋切型の「異議なし」といふ相槌や野次をとばすのです。それは虚しい光景でした。学内の掲示板は、赤や黒のペンキで書かれた大学に対する要求や政治スローガンで埋め尽くされ、また講義室の窓にもステッカーがベタベタと貼りめぐらされてをりました。このやうな事態は益々ひどくなり教養部本館のロックアウトにまで発展しました。これは学内の重要な建物を占拠して外部よりの出入りを遮断し、大学の正常な機能を麻痺させて自らの要求を無理矢理押し通さうとするものでありました。ですから、建物の入口には机、ロッカー、椅子が雑然と山のやうに積まれ、講義を受けようとする者は「スト破り」として中傷罵倒され、力で阻止されたのです。憤りと口惜しさで一杯でしたが、

私にはどうすることもできませんでした。機動隊の導入後、ロックアウトは解除されましたが、建物の中は滅茶滅茶に荒らされてゐました。壁が崩され、廊下と部屋とを仕切る板壁が破られてゐる。床に固定された机や椅子は根こそぎ取られ、廊下のタイルや階段の敷石は投石用として至る所剝がされ、壁には汚ならしく政治スローガンや落書きが書きながら、廊下を覆はしめるやうな惨澹たる有様でした。教官室の書類もかき回され、持ち出されたものもあると聞きました。私はこのやうな現状を目のあたりにして、仮りに主義、主張が正しいとしても、このやうな行為は絶対に間違ひであり、結局これらの行為が生れるのは、その行為を正当化する彼らの主義、主張の根底を為す人生観、国家観そのものが誤まってゐるからに他ならないのだと確信したのであります。この私の思ひに心から共感してくれる人はクラスにも、又それまで親しくしてゐた友人の中にもありませんでした。私は自分の思ひを受け止めてくれる友を求めるやうになりました。

さうしたある日、ふと一枚の案内文が私の目に止まったのです。それは古典の読書会の案内文でした。西洋紙半枚のガリ刷で友に呼びかける思ひが素直にしかも簡潔に記されてゐました。そして、その最後には書いた人の名前がはっきりと書かれてをりました。私は

それ迄学内で配られてゐたピラにはうんざりしてゐました。殺伐として、一方的で先づ何よりも自分自身にとって身近な問題として感じられなかつたからでした。ですから、私はこのピラを見た時、荒涼とした砂漠の中に渴を癒すべき泉を発見したやうな喜びと安らぎを覚えたのです。どうしてもこの文を書いた人々に会ひたいといふ気持で矢も楯もたまらず案内の場所へ赴いたのです。信和会といふ名がその会に付けられた名称でした。部屋の前に立つとさすがに躊躇しましたが、思ひ切つて戸を叩きました。中に入ると三名ばかりの学生が机を囲んで坐つてをり、その後の棚には数十冊の本が並べられてゐました。けばけばしいポスターもステッカーもなく私はホッと胸をなでおろしました。早速案内文を見てやつて来たことを告げますと、先輩方にはにこやかに自己紹介されました。それは快い、きびきびとした挨拶でした。続いて私も名前と学部を申しました。お互ひの素性を明らかにするのは、話を始める場合、自分の発言に責任を持つといふ点において最も基本的なことであると思つてゐますが、学内ではそんなことにはお構ひなしに議論のやりとりが始められることが極めて多いのです。私にとって今でもこの出会ひは印象深く残つてゐます。この時、私の言葉に親身に耳を傾け同感して貰へたことほどうれしかつたことはありません。

ん。語りかつ耳を傾けるうちに当初の力んだ気持も次第に和んでゆき、それとともに先輩方の言葉や物腰にぐいぐいと引き寄せられてゆきました。それまで探し求めてゐたものを遂に見つけたといふ嬉しさで有頂天でした。かうしてある時は先輩の家や下宿を尋ね、あるひは呼ばれて語り合ひ、ある時は共に酒を酌み交はしながらの語りひとなり、深夜に及ぶこともしばしばでした。さういふ中で、今自分は何を学ぶべきか、ひいては、人生、学問、祖国についてどのやうに取り組めばよいのかといふ自分の生きてゆく上での根本的な問題へと導かれ、目を開かされていったのでした。やがて読書会に参加するやうになり、他大学の学生にも触れる機会が生まれました。と申しますのは、この読書会は毎週一回、福岡にあるいくつかの大学の学生と社会人及び先生方が寄り集って開かれてゐたからです。この集まりのことを私達は「輪読会」と申してをりましたが、所謂読後感想を互ひに述べあふといふものではなく、一冊の本を皆で少しづつじっくりと読み味はってゆくのです。この一冊の本は、黒上正一郎といふ方がお書きになつた「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」といふ本であります。この輪読では、文章の曖昧な把握による一人よがりな感想、あるひは単なる知的興味に基づく論議のやりとりを極力排しつつ作者の思ひを正しく

把握し、受けとめようと努めたのであります。私には初めての経験でただついてゆくだけで精一杯でした。素直な気持でとり組めるやうになったのは、しばらく後になってからのことでした。先輩そして友人の教へを受け、皆で言葉の意味を一つひとつ明らかにしてゆき、内容について互ひに論じあふうちに聖徳太子の言葉が自づと心に響くやうになり、私達の身近かな日々の生活に深く関連してゐることに気づくやうになったのであります。そして、これらの言葉を折にふれて仰ぐことによつて自分の生きるべき道が次第に定められてまゐりました。

これからお話しする箇所はこの書の第二編「聖徳太子の信仰思想と国民精神」といふ章に出できます。

仏教の經典「勝鬘經」の「攝受正法章」の中に菩薩が人々を教へ導く精神を示して、「不請の友となり（中略）世の法母と為る」と書かれてをります。その言葉を聖徳太子は自らお書きになられた「勝鬘經義疏」の中で次のやうに説かれます。

「友は是れ相救ふを義となす。然れども請ひて後に救ふは眞の友に非ず。故に『不請の友と作る』と云ふ。菩薩の物を化するのは慈母の嬰兒たいじに就くが如し。故に『世の法母とな

る』と云ふ。」

日頃より親しく交はる友人、それは互ひに助けあふものであるけれども、助けを求められて初めて救ふのでは真の友とは呼べない。それ故に菩薩はただ単に友とは言はないで「不請の友」となるとおっしゃるのです。菩薩とは大勢の人々が救はれる迄は自分も救はれたことにならないと考へる人々のこと、物とは生きとし生けるもののもので、ここでは人々を指します。菩薩が人々を教へ導く接し方は母親が赤子に対するやうなものである。

だから經典には「菩薩は世の法母と為る」と説かれてゐるのだといふことなのです。このやうに聖徳太子は国民教化の基となるべきものとして「不請の友となり、世の法母と為る」といふ經典の言葉をひかれ、私達一人ひとりの最も身近かな友人、あるひは親と日々の生活における細やかな心の通ひ合ひ、さういふ人生の身近かな体験事実に照らして述べられるのです。私はそこに先づ親しみを感じたのであります。

私達は日々の生活において多くの人々との交はりの中に生きてゐます。その中でも自分のことをよく知ってくれ、様々に心を配ってくれる友に対し、より一層親しみと信頼の念を抱き、ありがたく思ふのではないでせうか。そしてさう感じてそれに応へていかう、

共に励まし合ひ鍛へあひつつ学んでいかう、今度は自ら進んで友の力にならうとするところから心の通ひあひが始まるのだと思ひます。母親と子供の場合は最も深い絆で結ばれてゐます。母親が吾が子を身を顧みず一心に慈しみ育むのは、決して利害や得失があるからではないでせう。子供が重い病にかかればただひたすら病の癒えることを念じながら、子供の苦しみを少しでも減らしてあげたい、あるひは自分の身と引きかへにしても救はうとさへ思ふのであります。これは、私達自身が身近かに経験するごくありふれた事実です。このやうな思ひを自づと抱くやうになるが故に私達には母親を慕ふ念がいつまでも変はらないのであります。聖徳太子はこのやうな友との交はり、慈母と子の心の通ひあひの中に人々が共に生きてゆく上での最も基本的な原理を見出され、さらに太子御自身この菩薩の精神を心に湛へながら、世のために身をもって国政に携はられたのであります。聖徳太子が生きられたのは、日本の固有民族文化と大陸の文化が交流接触した時代であり、国内的には、氏族制度の積弊に基づく内政の紛乱にさらされてゐました。冠位十二階、憲法十七条の制定はこのやうな中で行なはれましたが、太子は常に實際政治の革新は、国民精神生活の内的改革に基くべきことを確信され、さらに先づ内的改革を御自分の心の中に具



現しなければ、国民を救ふことはできないと信じられたが故に、先づ率先して菩薩の精神を仰ぎつつ国政にあたられたのであります。私はかうして黒上先生の文章を通して聖徳太子の御精神を学ぶうちに、自分が本当に美しいと感ずることを自らの日々の生活に一つ一つ実現してゆくことが先づ自分になし得る最も身近なそして大切なことではないかと教へられ、又確信するやうになつたのであります。翻つて考へてみますと、私達が心を通はせあつて生きてゆく共通の基盤は一体何でありませうか。イデオロギーでせうか。さうではないはずであります。つきつめてゆけば、結局私達がこの日本に生まれ、共通の歴史と文化と伝統を有してゐるといふ点であります。具体的には、その日本の歴史を貫いて先人達が最も大切にし守り育ててきた心の姿勢を実感し、それを美しいと感じ、さらに共に仰ぎつつ生きてゆくところに、お互ひの信を深め、心を通はせてゆくことができるのではないでせうか。

その後、先生方の御助力を得て数名の友や先輩と一軒家をお借りして寮生活を始めましたが、それは互ひの交流研鑽をさらに深めることになりました。今考へるとこの時の寮生活が私にとって大きなプラスとなつてゐますが、当時は、あれこれと悩みました。たとへ

ば心を通はせるといふ言葉にとらはれてしまつて、かへつてぎこちなく固くるしい生活に陥つてしまひがちになつたこともありました。自づと心通はさうとするのでなく、どうしても大上段にふりかぶつてしまひ無理が生じたのです。それは私自身が、心を通はせあはうとする自分の心を、暖かく大切に育んでいくことを忘れてしまつてゐたからだと思ひます。自分がなし得ることから着実に一段一段高きに登るといふことは実に難かしいことでもあります。はじめからすぐ二段飛び三段飛びをしようとしてしまふ。しかし本当に大切なことは赤子を育てるやうに懐にあたため、十分に乳をのませ、病気をせぬやうに様々に心を配る、さういふ自分の心の養ひ方だと思ひます。寮生活で体験したことは数へ上げればきりがありませんが、私にとって大きな一つの試練であつたと思つてをります。

私は今まで学生時代の体験を話してまゐりましたが、学生時代に取り組んだことは、その時かぎりのものではなく今も私にとって一刻もゆるがせにできない課題であります。大を卒業し、広島に赴任して会社の仕事にとりくんでゐる現在、私はいまなほそのことを益々痛感しながら日々をすごしてをります。そのことを思へば思ふほどみなさんが直面してをられる問題を決してかりそめにすることなく、真剣にとりくんでいただきたい。その

ことを是非お話し上げたいと思つて壇に立つたのです。

御清聴有難うございました。

## 私の社会人生活を支へてゐるもの

昭和51年第21回「合宿教室」

高岡正人（日立造船株式会社勤務・26歳・熊本大学昭49卒）

御紹介にあづかりました日立造船に勤務してをります高岡でございます。昭和四十九年に大学を卒業して、はや、三年目を迎へようとしてをりますが、私の社会人生活を支へてゐるものは、やはり大学四年間の友達との付き合ひ、そしてこの国民文化研究会の合宿で学んだものであります。私の社会人生活は、それらのものを切り離しては考へられませ

ん。  
私が大学に入学したのは昭和四十五年で学園内には、まだ学園紛争の余波が残つてをりまして、毎日のやうに安保粉砕、大学法案粉砕といふスローガンのもとに、ストライキや

学生集会等が行なはれてをりました。入学当時、私の心の中にありましたのは、四年間の大学生活の内に、自分の生き方を見つける事であり、心ゆくまで実のある学問をしたいといふことでした。さういふ私にとって、目の前で展開されてゐる学園紛争は、避けては通れない問題となりました。私は大学に入ったばかりで紛争に対してどう考へ、又どう対処して行つたらよいのか解りませんでした。周りの友達や先輩に尋ねても、はっきりと反対するでもなく、又賛成するでもなく、只、「彼らの考へは解るけれども行動には賛成できない。」あるひは、「俺には余り興味がない。」といふ言葉だけが返つて来ました。そして私は麻雀やパチンコにうつつを抜かし、勝手気ままな学園生活をしてゐる学生の中にあつて、真剣に何かを考へ、そして行動してゐる人々を見るにつけ、彼らの前を素通り出来なくなつていったのです。その頃の私は、何かに自分を賭けて一生懸命にやつてゐる彼らの姿を見て、何の思想もなく、又理想もなく過ごして来た私自身が堪らなく惨めになった事を覚えてゐます。しかし、その反面、私にいくら考へても彼らの行動が正しいのか、それとも誤つてゐるのか、結論は出て来ませんでした。だからと言って充分理解出来るまで手をこまねいてゐても、結局は何も出来ぬままで終つてしまふといふあせりにも似た気持ち

で、その善し悪しも解らないまま、私は学生運動の渦の中に飛び込んで行きました。さうして機動隊の盾の間に挟まれ、シュプレヒコールを喉が枯れる程繰り返してデモをやつてゐる時、初めて社会の中に自分といふ存在があるんだといふ実感が湧いて来たものです。

しかし、デモが終り集会が終つた後、三々五々仲間と別れて行く時、何か無性に空しさだけが残りました。周りの友達にストライキに参加するやうに誘ふ時、別に反対する訳ではないのですが、皆避けてしまひます。そのうち私の周りから次第に友達は遠ざかつて行き、私にはどうしようもない淋しさと、苛立ちが立ち込めて行きました。彼らは大学から処分されるのが恐いのだ。警察に捕まるのが恐いのだ。何の為に大学に入って来たのだから。日本の将来の事を考へ、社会の役に立つ為に学問をするのが大学生の使命ではなかったか。多くの我々と同じ年頃の人々がすでに社会に出て働いてゐるといふのに、学生といふ立場に甘えて自分勝手な事ばかりしてゐて良いのだらうか。さう思ふ反面、私はどうしようもない、このやうな孤独感から抜け出して、周りの友達と楽しく学園生活を過ごさうかと何度も思ひました。そして自分の思ひをじっくりと語り合へる友達もゐないまま、次第に書物が私の話し相手となつて行つたのです。

そんなある日、名も知らぬ人から一通の手紙を受け取りました。実は学内で文化講演会があった時、アンケートを出したのがきっかけで手紙が来たのです。私は早速授業が終了後、手紙の地図を頼りにその人の下宿に行きました。そこには二、三人の学生の方と社会の方が、一生懸命一冊の本を交互に読んでをられました。本棚には書物がぎっしり並べてありました。それまで下宿といへば教科書以外には週刊誌とか漫画しか置いてない、さういふ生活に馴れてしまつてゐた私は、真剣に何かを勉強してをられる姿を見て非常に驚きました。最初私は、これらの人々が一体何をしてをられるのか解りませんでした。そして学生の方と一緒に勉強してをられる社会人の二人の方を見るにつけ、ますます不思議に思ひました。実はその方々は週に一回書物を共に読んだり、和歌を作ったり、研究発表等の営みを続けてをられてゐたのです。そして社会人の方は、二人共学校の先生で、毎週、車で一時間もかかる所からここまで来られてゐたのです。そこで私は、いろいろと話し合つたのですが、最後には随分言ひ合ひになり、酷く叱られました。その時、私は次のやうな事を言はれたのを覚えてゐます。「友達が一人や二人遠ざかつて行つたからと言つてメソメソするな。男が一旦かうと思つたら足を一步踏み出さない。そこから道は自然

に開けて行く。もし、その道が間違つてゐると気付いたら、そこから引き返せば良いぢやないか。それは絶対、無駄になりはしない。我々の一生は机の上で設計図を書いて、そしてその通りに進んで行けるやうなものではない。すべては試行錯誤の繰り返しだよ。さうしてゐるうちに千人の内一人か、あるひは万人の内一人かわからないが、自分の志が解つて付いて来てくれる人がきつとゐる。その事を信じてやうて行かうぢやないか」。それまで友達や先輩と言ひ合つた時は、いつも理屈のやり取りとなり、空しさだけが残つてゐましたが、その言葉を聞いた時は、相手の人が自分の事を心の底から心配してくれてゐるやうに思はれ、心に力が充滿して、「やるぞ」といふ気持ち湧き起こつて来たのを覚えてゐます。かうして私は、学生運動をやつてゐる人々以外にも、何かに向つて一生懸命やつてゐる人々を発見する事が出来たのです。

初めて参加した七年前の夏の合宿も、その先輩に勧められたのがきっかけでした。合宿では今まで私が経験した事もなかつたやうな事ばかりで非常に当惑してしまひました。ただ、そこで多くの事が私の心の中に残りました。その一つに皆さんのお手許の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」といふ御本の中に、「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉があ

ります。私はそれまで口先ばかりで一向に行動が出来ない人々を蔑み、自分は正しい生き方をしてゐるのだ、大学の殆どの学生は間違つてゐると一人うぬ惚れてゐましたが、この言葉に触れた時、今までの自分が恥づかしくなった事を覚えてゐます。そして合宿を開催された学生の方や、社会人の方が学生運動をやつてゐる人々以上に真剣であるといふ事、しかも、そのやうな人々がこんなにも全国各地にをられるといふ事が非常な喜びでした。今まで国といふものを政治体制や経済体制からばかり考へ、又共産主義をイデオロギーの上からばかり考へ、天皇といふお方についても制度上から統治者といふ形でばかり考へて来てゐたのですが、それらすべてが私達の現実生活の体験と切り離せない関係の中で論じられてゐる事に非常な驚きを感じました。

例へばある先生が、「共産主義に打ち勝つ為には、乱れた靴や下駄を並びかへるやうな優しい瑞々しい情緒があれば充分だ。」と言はれた事など本当に驚きました。又初めて天皇の作られた御歌に接した事も新鮮な感動でした。今まで天皇といふお方の在りの儘の姿に接した事の無かつた私は、次の御歌を読んだ時、天皇といふお方の存在が非常に身近に感じられました。それは江戸時代の桃園天皇の御歌でした。



身の恥も忘れて人になにくれと問ひ聞くことぞさらにうれしき  
新まくら待ちえてかはす今宵より世を隔てじと契るうれしき

一首目は、天皇といふ地位にありながら自分の知らない事を人々に聞くといふ事は、こんなにも嬉しい事かと歌はれてをります。そして二首目は、長い間待ってをられた最愛の人とやっと今夜から共に生活をやって行かうと契りを交はした事が、大変嬉しいと歌はれてをります。この歌で私は初めて天皇の真の姿を見たやうな気がしました。このことをはじめ、合宿での経験は私にとって一つ一つの事が大きな驚きでした。そして何よりも私の力となったのは、真に語り合ふ事の出来る数多くの友達が出来たといふ事です。

さらに合宿が終り大学に帰った私にとって、一つの転機となるやうな事が起こったのです。それは水俣病裁判の時の事です。その裁判には、水俣病患者の方も出席されてゐました。(私は合宿が終つてもまだ学生運動家たちと一緒に行動することもあったのです。)私達は各々「裁判勝利」等と書いたプラカードを持ち、ステッカーを貼り、マイクでシュプレヒコールを繰り返してゐました。裁判官が来られ、「プラカードを納め静かにして下さい

い。静かにしなければ裁判はしません。」と言はれました。人々を裁く神聖な場所は、静かに蔽爾であるべきです。然しながら仲間のかえってヤジを飛ばしたり、シュプレヒコールを繰り返しましたので、裁判は何時になっても始まりませんでした。つひに患者の方の中から「我々は疲れてゐるのです。早く裁判を受けたいのです。プラカードを納めて静かにして下さい。」との声が上がりました。しかし、彼らは依然としてやめません。私はその時、彼らは何をしようとしてゐるのかさっぱり解らなくなりました。水俣病患者の方々が裁判に勝つやう応援に来てゐるのに、患者さん達が何度頼んでも耳に入れようとしなないとはい。私はその時、彼らと一緒にやって来た事が何であつたのか初めて解つたやうな気がして来たのです。自分達の主義主張を通す為に、最初から水俣病裁判を利用しようとしてゐたのか、あるひは最初は素直な優しい気持ちだつたのだが、いつしかそれを忘れて自分達の主義主張を通す事だけに躍起となり、終には他人の忠告にも耳を貸さなくなつてしまつたのか、私はそれまで彼らと行動を共にしながら常に抱いてゐた多くの疑問が、その時解けたやうな気がしました。授業の最中にマイクで演説をやってゐた事、平気で校舎のガラスを割つたり、ビラを壁一面に糊付けしたりした事、そして仲間同士で内ゲバ事件を

繰り返した事などが次々に心に浮んで来ました。そこでは大勢の人で構成されたグループ組織の中に自分を埋没させてしまひ、逆に組織を自分の隠れ蓑に使って生きてきたのではないか、私はそこで、彼らをしてそのやうにやらせてゐる思想といふ物が初めて解つたやうな気がしました。私はその後二度と彼らと行動を共にしなくなったのです。

私はその後、私を合宿に誘つてくれた人々と週一回集まっては共に勉強をし、講演会を開いたりピラを配つたりして新しい活動にはいりましたが、それまでの左翼の学生運動とは、本質的に異なる所がありました。「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の御本の中にもありますが、万葉の歌人であります山上憶良が

父母を 見れば尊し 妻子<sup>めこ</sup>見れば めぐしうつくし 世の中は かくぞことわり……

と歌つてをりますやうに、お父さんお母さんを見れば大事にしなければいけないあと思ひ、又妻や子供を見ればいとほしく可愛いと思ふやうな人間の素朴な気持ち、それが社会生活を形造つてゐる根本だといふ事がしみじみ解つて来ました。どうして人を愛する

事が出来ない人が国を愛する事が出来ませうか。そして左翼の人達がよく言ふ小市民的とか、ブルジョアとかプロレタリアとか、人を不自然に規定して行動を進めて行くことの中からは、真に国を動かす力は生まれない筈だと思ふやうになつたのです。

さうしてイデオロギーに捕はれる事なく集団の力を頼りとしなくて自分自身で考へ、そして行動して行く。集団の力で主張を通して行くのではなく、一対一の真剣な付き合ひの中から相手と心を通じ合はせ、又お互ひに研鑽を高めて行く。そして心の通じ合った人が、更に他の人と心を通じ合はせて行く。しかも人間としての健全な営みをしながら国事を考へ、又一人でも多くの志ある人を求めて行く。かうして「共に是れ凡夫のみ」といふ自覚の下に「和」を広げて行く、これこそが日本といふ国そのものの姿ではないか。一人一人がかういふ気持を心にたたへてお互ひに「同胞」<sup>はちやう</sup>であるといふ実感をも日本人全部が持つやうにして行きたい。それは地味な活動であり、遅々として進まない歩みかも知れない。しかし、そこには確かな足跡が残つて行く筈です。私はこれこそが私の踏み行なつて行くべき道だと確信したのです。

かうして大学を卒業し、日立造船といふ会社に入つて早や三年目を迎へようとしてゐま

す。造船所といふところは多くの種類の作業を統一する為に、あらゆる物がシステム化されてゐます。しかし、物はシステム化された中を動いて行きますが、人間の心はシステムでは動きません。立派な仕事、やはりそれは朝会った時の気持ち良い挨拶の交はし合ひであり、信じ合ひ、助け合ふ中からしか生まれて来ない。私はさう信じながら毎日毎日働いてゐます。

私は去年初めて世界でトップの油運送会社エッソスタンダードオイル社向けの、四十万トンタンカーの現場主任技師補佐を命ぜられました。有明工場が出来て初めての新設計船である事や、船主の予想以上の激しい注文の為、何度も何度もやり直しを命ぜられ、他の工場からの応援も借りて、やっと一年半の月日をかけて完成させました。それは正しく、やってもやってもゴールの無いマラソンのやうな感じでした。四十万トンタンカーと言へばドラム缶三百万本を呑み込むのです。その一番船を有明海に浮かべた時の感激は、言葉にはつくせぬものがありました。船主への引き渡しを遅らせてしまった我々に対して、監督さんから、「遅生まれの赤ちゃんは生まれた後では、より健やかに育つ。」といふ励ましの言葉を受けた時、巨体を支へてゐる一本一本の柱が、あたかも日本といふ国を支へてゐ

る人々のやうに思はれ、有明海に浮かんだ巨体は、多くの人々の魂が一つの堂々たる形をとってそこに浮かんでゐるやうな気がしてなりません。かうしてその船影は有明海の水平線に消えて行つたのですが、その姿がまだ心に焼きついてゐる今再び、次の船の建造に携はつてゐます。それはやはり自分との闘ひであります。大学時代に培つた貴重な経験を元に、今後とも世界に誇れる巨大船を建造して行きたいと思つてをります。

## 心を見つめることの大切さについて 昭和51年第21回「合宿教室」

太田さよ子（旧姓小山）

（鹿児島市立河頭中学校教諭・25歳・鹿児島大昭49卒）

只今、御紹介いただきました小山でございます。一昨年、鹿児島大学を卒業いたしました。今年で教職三年目を迎へてをります。

私は大学二年の時、初めて、霧島で開かれたこの合宿教室に参加させていただきました

が、その時の班別討論の折、私の発言に対して、「あなたはそれについてどう思ふのですか。それは本当にあなた自身の言葉ですか。」「あなた自身の言葉で話してごらん。」と何度も問ひ返してくれた友達のことばが忘れられません。霧島の山を下りても、その友達の言葉が毎日の生活の中で想ひ出され、事あるごとに考へさせられることでした。

私は、学生時代のサークル活動や古典の輪読会、そしてこの合宿教室などで、何回となくかういふ経験を重ねながら、自分自身の考へを持つことがいかに大切であるかといふことを感じるやうになりました。

「自分自身の考へを持つ」といふことは、所謂、自己流の考へをするといふことではありません。周囲の人と交はりながらも、環境や人々に左右されたり付和雷同していくのではなく、そのやうな人々とのつながりの中で、「自分の本当の心を見極めていく」ことなのです。私にも次第にそのことがわかってきました。

自分自身の心なので、誰に頼るわけにも誰の責任にするわけにもいきません。この心を繰り返し繰り返し見つめていく中から、自分がどう生きていかなければいけないかが定まってくるのだと思ふのです。

私は、現在中学二年生を担任してゐるのですが、その中で末吉真理子さんといふ生徒を受け持ったことにより、改めて、「自分の本当の心を見極め、その心に従って生きていく」ことの大切さを痛感しました。今日はそのことを中心にお話してみたいと思ひます。

この真理子さんの家庭は、酒乱の父親が原因で本当にみじめな状態だったのです。真理子さんが四才、弟が二才の時、母親は家を出て十年間といふものは、二人の姉弟は、全くこの父親の犠牲になつてゐたと言へるでせう。父親は酒を口にしたら数日は止まらないのださうです。二人は来る日も来る日も、仕事にも行かず別人のやうになつた父の相手や介抱をさせられるといふのです。夜は二人で、隣の家の馬屋や床下に寝ることさへあるのです。家の中は暗くみすばらしく、親戚の者も全く見放してゐるといふ有様でした。

私が案じてゐた通り、この真理子さんは、五月になると学校に姿を見せなくなったのです。

前の担任の先生の話では、家庭がこんな状態だから、どこか施設に入れるか、早く卒業させてしまつて、父親と切り離してしまふしか仕方がないだらうといふことでした。

しかし、私はそんな考へ方で事を処していいのだらうかと思ひました。父と子が、お互



ひの心をかち合ひ睦み合つてこそ、本当に幸せな家庭であり、人としての道ではないのかと思ひました。たとへこのままで施設に入れても、あるひは卒業させても、本当の意味では問題の解決にはならないのではないかと思ひました。

人間は誰しも、よくなりたいといふ気持ちを持ってをります。真理子さんであっても、父親であっても、今までのやうな生活でけっしていいとは思つていない筈だと思ひました。私はこの子とそして父親に直接ぶつかつて、何とかしてその心をまともな道に引き戻してみようと決心しました。また、それが私に課せられた教師としての、否、人間としての使命だと思ひました。

学校が終はると、クラスの一人の生徒に案内させて真理子さんに会ひに出かけました。その日は父親の酒癖が悪いためか、家の中は酒の臭ひが残つてゐるやうな空気でした。私は家の外に二人を連れ出して話しました。私が話し始めると、真理子さんはポロポロと涙を流しながら、じつと何かを耐へてゐるかのやうに聞いてゐるのです。その日は彼女の手をとり、ともかく学校に来ることを固く約束させました。

しかしそれでも、明るる日も、また明るる日も、彼女の姿は見えないのでした。父親が

働きに出てゐるのに学校に来ない日もあるのです。

やはり予想してゐたやうに父親だけではなく、この子自身の心にも大きな問題がある。

私にはそのことがだんだんはつきりしてくるやうになりました。

一度、二度、三度……。私の訪問も続きました。「先生は、あなたがハイと約束したことは、きつと守ってくれると信じて待つてゐますよ。バス代が無かったら、歩いて来なさい。授業は何時間目からでもいいのだから、とにかく来るのですよ。あなたは全てをお父さんの責任にしてゐるけれど、その気持ちを乗り越えないうちは、今のあなたも弟もどうにもならないのよ。お父さんがどうあらうと、学校に来ようと思へば、家を抜け出せるぢやないの。あなたの怠け心もあるんでせう。」と私が言ふのに対して、真理子さんは、ただ、頷くばかりなのです。

欠席の日が重なっていくにつれて、あんなに精魂尽きるまで語り、あれほど約束したところが、次々に空しく裏切られていくやうに思へ、何とも言ひやうのない気持ちでいっぱいでした。私はもうどうする術もなくなつてしまひました。

教育って何だらう。両親も揃つた自分とは異つて、不運な星の下に生まれ、あの子はあ

の子なりに、人には言はれぬ悩みを抱き悲しみに耐へてきただらうに。結局、私の力ではどうすることもできないのではないだらうか…。

五月十三日、木曜日でした。これが最後と心に決め、今度は父親に話しに出かけました。正気の時の父親は、やはりわが子の身の上を案じ気づかふ一人の、子の親でした。「お父さん。このままでは、真理子さんも弟さんも、大変なことになりますよ。あんなに明るく素直ないい子なのに、こんな調子では、不良になってしまふでせう。さうなると学校も落第ですよ。お父さんも仕事をなされば、本当は腕利きの職人さんなのださうですから、何とかあの子がまともに学校に通へるやうにしてあげてください。」父親は頷きながら話を聞いてくれ、二人を学校にやらせるやうに約束したのでした。

ところがどうしたこととせう。その翌日もたうたう彼女の登校はなかったのです。

これで私の気持ちは、はっきり決まりました。やっぱり前の担任の先生のはれるやうに、この子たちは父親と引き離して施設に入れるしかないのかもしれない。明日は校長先生に相談してみよう。悲しいけれども、この子たちにとって、これが最善の道なのだと自分の心に言ひきかせました。

ところが翌朝、驚きました。もうこれで最後とと思ってゐた彼女の白いブラウス姿が、ク  
ラスメイトの中にあるではありませんか。もうすっかり諦めてゐた彼女がここにゐる。私  
はびっくりして、自分の目を疑ひました。もう、嬉しいなどといふ気持ちを通り越してゐ  
ました。ただただ、彼女と切っても切れない不思議なめぐり合はせに、驚くばかりでした。  
この子にとつても、私にとつても、この問題はどうしても今のうちに解決しなければなら  
ないことなのだなあと思ひました。本当に途中で投げ出さなくてよかつたと思ひました。  
その日は二人でお茶を飲みながら語りました。もう説教じみたことは口に出しませんでし  
た。今まで無口だった彼女も、学校を休んでゐた時の様子や、家の金を持ち出したこと、  
父親のことなどをあからさまに語ってくれました。

どうしたことか、その日から真理子さんの生活は変はりました。本当に強くなりまし  
た。たった一度も学校を休まなくなつたのです。朝はみんなより一足早く登校して、朝の  
掃除をやつたり、昼休みは合唱部で練習する姿も見られるやうになりました。家に帰る  
と、きつと母親代はりの炊事や洗濯、父親や弟の世話もあるでせう。「真理子さん変はつ  
たね。大人になつたね。」と言ひますと、「賢くなつたでせう。」などと云つて笑つてゐる

のです。

なぜ諦めてゐた彼女が突然強くなったのか、その詳しい理由は、私には知る由もないことですが、きっと彼女自身の心の中に、このままの自分ではいけない。何とかしなければといふ心の底から湧き上がるものがあつたのではないでせうか。今の自分の状態を環境のせゐにしたり、父親のせゐにしてゐる間は、決してその状態を克服できないのでせうが、すべてを自分自身の心に問ひ、自分の心を見極めていった時、初めて逆境から立ち上がる力が湧いてきたのではないでせうか。

真理子さんは、私が想像してゐた以上にしっかりとした足どりで毎日を歩み始めたのです。

真理子さんのこの姿を見て、私もつくづく自分の心の弱さに気付かされました。本当は彼女が自分の力で逆境から立ち上がるのが願ひであり、さうさせることが私自身の使命だと思つてゐたのに、いつの間にか、仕方がないといふ理由をつけて、施設に預つてもらふといふ行政的手段に委ねようとしてゐたのです。しかし彼女が見事に立ち直つてくれたことによつて、逆に私自身が、この人生で最も大切なこと、つまり初めに申しましたやう

に、「自分の本当の心を見極め、その心に従って生きていく」ことの大切さを、この真理子さんのおつき合ひの中から教へていただいたと思ふのです。

ところで最近の社会風潮は、この一番大切な人間の心を見つめることを差し置いて、社会制度とか、施設・設備などの外的要因ばかりに目が向いてゐるやうに思ひます。社会制度を整へ、施設や設備を立派にすることも、無論必要でせうが、肝心なことは、そのやうな制度や施設・設備の中で営まれる人間生活そのものであって、温かい人と人との思ひやりや、お互ひに慰め合ひ励まし合ふ心が失はれてしまへば、却って逆効果になつてしまひます。例へば近頃の労働組合の行き方などはその典型でせう。スト権をよこせとか、賃金を上げよとか、さまざまな制度上の要求を掲げて、まるで年中行事のやうに国民一般の迷惑をよそに職場放棄をやるのが通例になつてゐます。

私たちの職場でも、日教組の先生方は主任制度反対や賃金闘争と称して、昨年は幾度かストライキをやりました。その都度生徒たちは自習を強ひられてゐるのです。教室に残された生徒たちは、このやうな先生方の態度をどんな気持ちで受けとめてゐるのだらうと思ふと、本当にゐたたまれない気持ちになります。たとへ、組合の主張する制度上の要求が

通ったとしても、自分たちの要求を通すためならどんな手段も辞さないといふあの一方的な考へ方ややり方が、幼ない子どもたちにさまざまな形で影響していくことを思へば、これほど恐ろしいことはありません。かうした害悪が積み重なっていくと、将来の日本はどうなるのだらうと憂へられるのです。

私たち日本人は、本来何よりも人間の内面的な心のあり方を大切にしてきた民族ではなかったでせうか。最近の社会風潮は、日本人の何たるかを忘れさせ、足もとを見失ひつつあるやうに思はれます。しかし、周囲がかくあればあるほど、しっかりと自分の心に問ひ、心を見極めていく人の存在は大切なのではないでせうか。

私が初めて参加した合宿教室で、「あなた自身の考へはどうなのですか。」と繰り返し問はれたあの言葉の持つ意味の重大さを、今にして気付かずにはをれません。学生時代にこのやうな修練の場を踏むことが是非とも必要であると痛感いたします。

私自身も一人の人間として、日本人として、誠に微力ではありますが、子どもたちと共に、人間としての本当の生き方を、そして日本人としての本当の生き方を自分自身の心に問ひつつ求めていきたいと思ひます。

ありのままのこころで感じることに

昭和52年第22回「合宿教室」

林田景子（旧姓味酒）

（福岡県大刀洗町立本郷小学校分校教諭・24歳・福岡教育大昭51卒）

只今、御紹介いただきました味酒でございます。昨年、福岡教育大学を卒業いたしました。現在、現在教職二年目を迎へてをります。

私の職場は精神薄弱児施設の子どもたちを対象とした特殊学級だけでできてゐる学校です。赴任したばかりの頃はたいへんはりきつてをりました私も、日が経つにつれてそれぞれに動きの異なる子ども達を前に、何をどのやうにすればよいのかわからず、おろおろする事が多くなりました。毎日が先生方に励まされる事ばかりですが、心の奥底でしっかりと私を支へてゐたものは、学生時代に参加させていただいたこの合宿教室での体験や、サークルでの輪読、短歌の勉強の折の先生方や友達の間で話した。私に話した。

私は大学一年の頃、サークルでのレポート発表の後、お互ひに話しあふやうな時には、



よく箇条書きに整理するやうな話し方をしてみました。「日本は国全体が一つの家で、天皇を父親のやうに慕ってきた。……私達は祖先の考へを大切にしなければならぬ。……だから、私達も天皇を慕はねばならない。……うん、わかった。わかった。」といふ様な調子でした。ところが、ある時、そんな私に一人の先輩が、「それは理屈でわかった事だ。さういふわかり方ではだめだ」と厳しい口調で注意されました。私はその指摘に対して、その時は「理論なしで何が信じられるものか」と反発の気もちで一杯でしたが、年が経つにつれてこの御言葉が大切な事のやうに思はれてきました。「理屈でわかるのではなく、自分のありのままの心で感じなければならぬ」さう思ふやうになりました。たしかにありのままの心で感じるといふ事は難しい事ですが、今日は、その事について二つの体験を通して考へていきたいと思ひます。

一つは現在担任してをります泉ちゃんといふ女の子の事です。泉ちゃんは現在五年生ですが、昨年担任した折は、些細な事にも感情を爆発させ、椅子を投げては体も裂けんばかりの声で泣き叫ぶ子でした。泉ちゃんが生まれてすぐに、両親が離婚し、二年前まで母方のおばあさんのもとでお母さんと共に暮してをりましたが、そのおばあさんが急死され

母親も養育態度に欠ける、本人自身精神薄弱といふことで親元を離れ施設に入っているの  
でした。泉ちゃんのいらだちもこのやうな家庭的な不幸からきてゐるやうにも思へまし  
た。普通の子ならば全身で両親の愛情を受けられるのに何故この子だけがこのやうなめ  
に合ふのだらう」とかはいさうに思ひますが、その反対に、他の子ども達に危害を加へさ  
うになつたり、ありつたけの悪口を叫んだりする時には私の方が感情のままに叱りつけ  
て、泉ちゃんを腹立たしく思ふ事も多かったです。

ところが、翌年の三月、皆で講堂に集つて遊んでゐたとき、ひなまつりの時皆でお供へ  
して食べようと思つて、私を買つて置いたお菓子を泉ちゃんが「お菓子／＼」と言つても  
つてきた事がありました。得意気に先生方にも見せて今にも講堂中にお菓子をばらまきさ  
うです。いくら指導上必要だといへ学校で菓子を与へる事は望ましくないといふ事もあ  
つて、咄嗟に私は恥しい思ひがいつぱいになって「いかん／＼」と大声で制止してしまひ  
ました。その時は幸ひに泉ちゃんも怒らずにお菓子を持つてかへったやうでした。ところ  
が少し時間が経つて教室でクラスの子ども達と遊んでゐる時、泉ちゃんが後ろの方から、  
オルガンの上に体をかがめるやうにして、恥しさうに「さっき、ご・め・ん・ね」と言ふ

のです。思はず聞きかへす私に「さっき、ご・め・ん・ね」と泉ちゃんは言葉を重ねて言ひました。私はびっくりして「どうしたあ」と聞きました。「あそこで・あけて・ごめんね」と泉ちゃんは一音一音切るやうに言ふのです。私は全身がじーンとして、咄嗟にほめてやる事も忘れてゐました。「あの子がこんなやさしい言葉を持ってゐたんだ」と思ひました。そのあとで棚の方を見てみると菓子箱はあわてて投げ入れたらしく棚の中に斜めにちよんとのつてゐました。「あつ、いけないー」と思って走ってもどしにきたのだらうか。その菓子箱を見ながら泉ちゃんの顔や言葉を思ひ出しました。「泉ちゃん、怒ってばかりゐてごめんね。」と心の底から突き上げてくるものがありました。

その日はちょうど国文研で一緒に勉強してゐる女子学生の輪読会の日で、友達が女子合宿で意見発表をする、そのリハーサルの日でした。私達は皆でその友達の話聞きそのことばをめぐっていろいろと語り合ひました。私はその話し合ひの中で、友達がどのやうに輪読会での勉強を大切に思つてゐるかを知り共に学ぶ喜びのやうなものをひし／＼と感じました。帰りのバスの中では、まるで心の波がふるへるやうにその日一日の出来事が浮んできました。泉ちゃんのこと、輪読会のこと、さうしてゐるうちに以前には気にもとめな

かった子どもたちの言葉が思ひ出されてきました。特にあの泉ちゃんとの距離が急に近くなったやうで、言葉では表はせないけれども、全身にあの子の思ひが伝はってくるやうな気がしました。「せいっぱいお父さんやお母さんにかはいがってもらひたい、甘えたいんだ」「難しいからしたくないと思ってる勉強を私が押しつけるから怒るんだ」私はさう思ひました。

このやうな事を通して泉ちゃんをよく見ると実にやさしい心を持っています。友達が休むと、「○○ちゃんが来とらんけ、さびしかー」と言ひ、時にはワンワン泣きます。おひなさまを作って「着物を着せようね」と言ふと、「寒か／＼て言よらっしゃるね（おひなさまは、寒い／＼と言ってるのの意）」……。やさしい言葉がホロツと出てくるのです。その度に私は、「ほんたうはこんなにやさしい子なんだ」と自分に言ひきかせるやうになりました。

もう一つの体験は滋賀県にあります精神薄弱児施設「近江学園」を創設された糸賀一雄先生の文章を読んだ時の体験です。先生は講演をなさってゐる壇上で「この子らを世の光に……」と絶句して倒れられるまで五十四年の御生涯を精神薄弱児のために捧げられた方

です。自伝「この子らを世の光に」、講和集「愛と共感の教育」の二冊の御本の中にはい  
ろ／＼感銘深いお話が記されてあますが特に私の心をうったのは昭和二十六年十一月十五  
日、今上陛下が戦災地御巡幸の一環として近江学園においでになった折の事でした。糸賀  
先生は行幸の前日になって、学園の子どもたちの中の重い精神薄弱の忠ちゃん達に楽団を  
つくって演奏させたい、その演奏で陛下をお迎へさせてはと思ひつかれます。かうして早  
速その思ひつきは実現するのですが、当日陛下がおみえになって中庭までおでましになっ  
た時、得意になって楽団の指揮をしてゐた忠ちゃんが、突然楽団をストップさせ、陛下の  
方を向いて「デーイ（礼）」と号令をかけたのださうです。この時の様子を先生の御講話  
の記録である「愛と共感の教育」の中からそのまま引用させていただきます。

「そしたら、突然、忠ちゃんがストップさせたのです。みんなの楽団にね。白痴楽団と  
いうわけです。（笑）。それから陛下の方、私たちの方をスッと向きまして、そして非常に  
大きなはりのある声で『デーイ！』って号令かけたのです。ラリルレロのラ行がダメなの  
で、ダ行になって『デーイ！』とって大きな声で号令かけたのです。七〇人くらい  
た報道の人たちみんながびっくりいたしまして、そこところで全員いっせいに最敬礼を

してしまったのです。おじいさん、あばあさんたちはもう手を合わせて拜んじゃってるわけなんです。私もリハーサルにないもんですから、(笑)びっくりしまして、どういうことになるんだろうと思ったのです。そうしたら、陛下が窓ぎわまで体をのり出すようになさいまして、みんなに答礼をなさってました。それからもう一度マイクのところまでお帰りになったのです。『なおれ』がかからないからね。(笑)このままではどうなるかしらんとお思って、私はちょっと内心ハラハラしてました。ところが忠ちゃんがまた楽団の方に向いて手をあげたのです。タクトをね。それから最初からまた始まった。もう何ともいえないものが中庭いっぱいにあふれたムードがありました。ものすごいさわやかな、新鮮なね。ほんとうに天皇陛下をお迎えしているというような気分がその中にサッと流れてきました。それで、私が陛下の方を向いて、何かいってもらわないと困るものですか——NHKの人から頼まれたものですから——何か説明してご下問をいただこうとおって『ここにおります子どもたちはみんな、落穂寮におります白痴の子どもたちなんでございます』と申しあげたのです。そしてふっと陛下の方をふり向きますと、陛下は上を向いておしまいになってね。度のきついメガネをおかけになっていらっしやるのですが、目をパチパチなさ

っている。そこであふれてくるうよなものをいっしょうけんめいでご辛抱なさっていらっしやるようなんです。私が申しあげても、こうやって首をふりながら、目をしばたいていらっしやる。私はそれを見ました瞬間に、このお方には白痴がどうの、精薄がどうのなんていうことを説明を申しあげる必要のないお方だなあと思いました。ほんとうに純粹なものを、ほんとうに純粹なお方が純粹に受けとめてくださったんだなあと感じがしました。『これが教育のコツだぞ！』と思いました。もう言葉を必要としない世界なんです。あの白痴の忠ちゃんと天皇様の間に、あの白痴楽団と天皇様との間に通っているものがある。そのまま全然お言葉がないのです。私も説明をやめましたし、陛下も黙ってつつ立って、あおむいておられました、楽団だけがその中にメロディーといっしょにリズムを流しているのです。しばらくは立っていました。」

この文章を読んで私の心の中に、陛下は子どもたちの外見や能力といふやうなものをすべて包み込んで大切な心と心で子どもたちに触れてあいらっしやるのだといふ事が少しづつ、そしてすっかりと伝はってくるやうな気がいたしました。

この二つの体験を通して感じました事は、このやうに素直に自分の心で物事を感じる事

のすばらしさです。考へてみますと泉ちゃんの「ごめんね」といふ言葉に触れて感動した時は泉ちゃんが精薄児であるとか、知能指数がどれだけだとか、情緒不安定で……といふやうな診断も消えてゐます。泉ちゃんといふ子どもと私といふ人間のかかはりといふ事だけです。このやうな子ども達を専門用語で整理するやうな話をしたり、子ども達の障害を冗談のやうに口にしては笑ふやうな会話をよく耳にしますが、そのやうな理屈を並べていくらこの子どもたちの事を「わかった／＼」と思つてゐてもほんたうの子どもたちの心とさういふ人達の心とはかけ離れてゐるやうに思ひます。陛下が近江学園で感じられたやうに、ふるへるやうに相手と心を通はす事……そのやうな心の迫り方こそ、今私が学ばなければならぬ事のやうな気がいたします。障害児の問題を社会制度や体制の問題のみに押しつける前に、それに関はつてゐる自分達の心の至らなさ、接する態度の無神経さを常に反省しなければならぬと思ひます。自分の勉強不足や心の至らなさを棚に上げて子どもを叱る事の多い私ですが、言葉に表はせないである子ども達の気もちを少しでも感じたいと願つてをります。

最後に大変拙いものですが、泉ちゃんのやさしい言葉に触れた時よみました歌を御紹介



させていただきます。

買ひ置きし六角の菓子箱とりいだし「お菓子／＼」と皆に見せきぬ

「あけていいね」と言ひかけたるに恥かしく「いかん／＼」と大声でしかりぬ

子どもらと話してをれば泉ちゃんは小さき声で話しかける

体まげ「あそこであけてごめんね」といとどすなほに子はかたりかく

泉ちゃんはかくまでやさしきことのはを心のなかにもちてをりたり

我にむかひ悪口をいひむづかりし子はかくまでにやさしかりしか

子のことば思ひ出しました思ひ出して目のあつくなるこちするなり

御清聴ありがたうございました。

## 心のつながりを求めて

昭和53年第23回「合宿教室」

小原民子（旧姓大久保）

（鹿児島県熊毛郡上屋久町立小瀬田中学校講師・25歳・鹿児島大昭52卒）

只今、御紹介いただきました大久保でございます。昨年、鹿児島大学を卒業いたしました。現在、屋久島の中学校に勤めてをります。

私は、大学時代、読んだ本の中に見つけた「なつかしい心持ちで語る」といふ言葉が強く心に残り、それ以来、人と話すときはさういふ気持で話すやうにつとめてきました。特に初めての人と話すときなど、自分自身が、この「なつかしい」といふ気持に帰りますと、すんなり相手の心の中にはひっついていけるのです。まづ、その体験を少し話してみたいと思ひます。

私が大学三年の初め、汽車通学をしてゐた頃のことです。満員で、通路に立ち並ぶ人が多いのに、一ヶ所だけあいてゐる席がありました。見ると、その前に坐つてゐるのは、男

の高校生でした。その人は、シャツをズボンの上に出し、かかとをつぶした靴を履いて、足は前の座席に人が坐れない程投げ出してゐました。そのため、その前の座席に座らうとする人もなさうなので私は思ひきって「ここ、あいてゐますか。」と、声をかけてみました。しかし、相変らず別の方を向いたまま、ひと言も答へてくれませんでした。

ところが、下に目をやると、前に投げ出されてゐた足が、二、三十センチほど引かれてゐるのです。これは座っていいといふことだなと思つて私はそこに腰をおろしましたが、そこにほんの僅かながら相手をおもふ心が感じられて、私は汽車から降りるまでにはぜひ、この高校生と話したいと思つて坐つてゐました。

列車がある駅に止まつたときでした。窓のすぐ近くに、黄色い花をいくつかつけたサボテンが見えました。朝露にぬれて光つてゐるのが何とも言へずすばらしかったので、私は、しばらく見つめてゐましたが、ふと前の高校生の方を見ると、何とこの人も同じサボテンを見てゐるではありませんか。とつさに、「あのサボテン、きれいなね。」と言ひましたら、つぶやくやうに「あのサボテンも三年目だ。」と言ふのです。「それじゃ、あなたは高校三年生なの。」と聞きますと、初めて私の顔を見て「さうだ。」と言ふのです。その後

は、次から次へと私の問ひかけにも、素直に答へてくれましたが、最後には笑顔さへ見せるやうになったのです。

二度目に、この高校生の中村さんに会ったのは、それからしばらくたった日の、やはり汽車の中でした。ところが、中村君はその二、三日前に列車で同級生とタバコを吸ったことが原因で退学になってゐたのです。それで今日は、クラスのみんなにお別れをしに行くところだと言ふのです。就職したら、きつと連絡をすると約束してくれました。約束通り大阪の就職先から、すぐに便りが来ました。その便りの中には、会社は自分が思つてゐた以上に厳しく、どうしても高校を卒業しないと一人前に扱ってもらへないから、もう一度高校に戻りたいといふことが書かれてゐました。あの中村さんに、こんなにもたくましい氣力があつたのかと、私は大変嬉しく思ひ、ぜひ復学するやうに勧めました。そのうち中村さんの切なる願ひが、もとの高校の先生方に通じて、たうとう昨年四月、高校三年生として復学できたのでした。高校の先生方も、中村さんの態度がまじめになった、もう昔の君ではない、といつて喜んで下さつたさうです。

私は、中村さんとのつきあひを通して、前読んだ本にあつたやうに、なつかしい気持ち

を持って互ひに心を開いてつきあってゆけば誰でも本来持つてゐる素直な心で接してくれるやうになるといふ確信をつよめることができました。

ところが、教職の場でおこる問題は、私が大学時代思つてゐた程、簡単ではありませんでした。自分の思ひが、すぐには相手にわかつてもらへないことがほとんどで、何度か悲しい気持ちになりました。中でも最も苦い経験をしたのが、勤めて一年にもならない、今年二月のことです。

そのころ職員会議で卒業式の時に歌ふ歌として、何がふさはしいかといふことが、議題にのぼりました。

そこで私は、以前から考へてゐた「仰げば尊し」を提案しました。他のどの歌よりも趣深く、お互ひに別れゆくときの心情を、これほど清らかに表現した歌は、他にないと思はれたからです。

ところが、何とほとんどの先生方が反対で、すぐさまその場で否決されたのでした。主な理由は、「歌詞が古くて歌ひにくい」「卒業式といふ、門出を祝ふ歌としては悲しすぎる」「自分は仰がれるやうな先生ではない」といふことでした。

しかたなくその日は帰って、もう一度歌詞をよく検討してみることにしました。

はじめに、「歌詞が古くて歌にくい」といふ反対意見ですが、私は音楽の時間には昔から歌ひ親生まれ、日本人としてぜひ覚えてほしい歌を、少しでも多く歌はせることにします。たとへむづかしくても、何度か歌ふうちに、生徒は歌詞をすっかり覚えてしまひます。流行歌にしか関心を示さないと思つてゐた生徒たちにも、このやうな面があることを前々から知つてゐましたので、「歌詞が古くて歌にくい」といふ理由は、あてはまらないと思ひました。

次に、「卒業式は人生の門出を祝ふのだから、悲しい歌はふさはしくない」といふ意見、これは、理屈からいへばなるほどさうです。けれども、卒業式の当日となつて、やうやくわかつたのですが、そこでは門出を祝福することを考へる余裕は全くありませんでした。卒業していつてしまふことが、ただもう、無性に悲しいのです。しかし、生徒にとつても教師にとつても、別れの悲しみは、十分味はひ尽くすと、自づからそれを乗り越えて生きていく力がわいてくるものです。このやうな人の心の動きを大切にして、歌の選択がなされねばならないと思ふのです。

もう一つ、「自分は仰がれるやうな先生ではないから歌ってほしくない」といふ意見です。私自身、未熟で至らないことばかりなのですけれども、生徒はこんな私とも、真剣につきあってくれます。生徒のその気持に恥かしくないやう、私は努力しようと思ひます。それが教師と生徒の自然な姿ではないかと思ふのです。歌ってほしくないと主張することは、教育者が当然持つてゐなければならぬ誇りを、自ら捨てることになると思ふのです。

一晚考へてみましたが、やはり私がいちばん歌ってほしいのは「仰げば尊し」であると確信しましたので、翌朝、もう一度考へて下さるやう、お願ひしました。すると、「あれだけの人が反対したのだから、もうこれ以上審議する必要はない。『仰げば尊し』以外の歌を考へてきてもらはないと困る。」と言はれ、ゆふべあれだけ考へたはずだったのに、私は用意してゐた言葉の半分も言へず、その上「仰げば尊し」以外の歌の中から選ばざるをえなくなりました。思へば私は、大多数の、絶対にゆづらないといふ意見に、すっかりおびえてしまひ、自分の気持を十分相手に伝へられずに、たうとう同意してしまつたのです。この苦い経験は、再びくり返したくないと心に決めて、その日は帰りました。

その晩、「仰げば尊し」以外から、何曲かを検討しました。他に考へられるとすれば「蛍の光」以外にはありませんでしたので、翌日、この歌を提案しました。しかし、今度も前と同じやうな理由で反対されました。私は、今度はもう絶対にゆづる気持になれませんでした。

ところが、先生方のほとんどは、自分の言葉ではない一般論を話されたり、日教組集団に力を借りた横暴な意見を主張されたりするため、心をうちとけて語ることはできませんでしたし、会議の席での納得のいく討論は、たうていできさうにもありませんでした。

そこで私は、個人的に話して、私の提案に賛同してもらへるやうお願ひすることにした。学校で語れなかった先生とは、土曜、日曜に家庭を訪問して語りました。初めて一年にもならない若輩者が、キャリアのある先生を前にして語るのですから、随分、生意気だと思はれたことでせう。どの先生にも、快く賛同してはもらへませんでした。「そんなに先生が言ふのだったら、しかたがないねえ。」といふ言葉を聞くと、予想してはゐたものの、無性に悲しくなり、どうしてこんないやな思ひをしてまで語らねばならないのだからと思ひました。



それでも心から納得してもらへたといふわけではなかったやうですが、翌日の職員会議で何とか「蛍の光」を歌ふことに決定しました。

会議が終はると、その場にみたたまれなくなつて、二階の音楽室に駆け込むと、途端に涙がこみあげて来ました。一週間の張りつめた気持がゆるんでほっとしました。思へば私は、今まで先生方と心をわって話すことはなかなかできませんでした。先生方には十分納得してはもらへませんでした。思ひきって一人一人の先生と語っていったことは、私にとって貴重な体験でした。

学生時代、私は中村さんを通して、なつかしい気持を持つて互ひに心を開いてつきあつていけば、必ず相手も素直な心で接してくれるやうになると信じてゐました。今でもその気持に変はりありませんが、互ひに心をうちとけて語ることが少ない職場において、自分の思ひを人に伝へ、納得してもらふことは、本当にむづかしいことです。そのむづかしい場にあつては、特に、相手の心に通じるやうに、自分の話す一言一言を大切に、心の限りを尽くしていくべきだと思ひます。

私はこれから、中村さんとのつきあひや、「仰げば尊し」の問題を通して学んだことを

大切にして生きていきたいと思ひます。

## 混乱した教育現場で感じたこと

昭和54年第24回「合宿教室」

坂口秀俊（福岡県立若松高校教諭・29歳・九州大昭49卒）

ただいまご紹介いただきました坂口でございます。私は昭和五十一年から福岡県北九州市の若松高校に勤めてをります。この私の学校で、今年三月一日に行はれました卒業式で、国歌斉唱が行はれた時、一音楽教師による妨害事件が起りましたことは、マスコミを通じて大きく報道されたことにより、大多数の方はご存知かと思ひます。しかし、その後のマスコミの報道には残念ながら著しい偏向がありました。例へば、その音楽教師の伴奏はジャズ風であったと報道されました。卒業式場で国歌をジャズ風に演奏したとすれば、そのこと自体大変な問題だと思ひますが、実はあの卒業式場にゐた者の感じではジャズ風といふよりも完全な妨害であり、ピアノの乱打でありました。また、その音楽教

師は服装等の問題により五月八日付けで分限免職になりましたが、日教組系の福岡県高等学校教職員組合、いはゆる高教組に属してをりましたため、日教組はマスコミと一体になりました。この教師に対する処分には右翼的な背景がある、として弁解にこれ努めました。実は私も、その攻撃の目標にされましたが、名前こそ出さないものの、私のことを約一ヶ月に亘り連日新聞に書かれました。そのことはここで改めてとりあげる必要もないと思ひますが、ともかく此の度の事件を通じて、私はマスコミの報道のいい加減なことを身にしみて感じました。

さて、私は昭和五十一年に若松高校に赴任したわけですが、福岡県の教育界は荒廃してゐることは聞いてをりましたが、想像してをりましたよりもはるかにひどく、生徒の遅刻や無断早退・欠課等、目をおほふばかりの状態でした。また日教組の年休闘争等により、一日の授業のうち半分が欠けるといふことも度々あり、若松高校だけではないと思ひますが、これでも学校かといふやうな状態でした。このやうな状況の中で、一体これからどうしたらいいか途方にくれるやうな思ひをいたしました。この合宿教室で教へていただいた諸先生方や、月に一度の輪読会での先輩や友人の叱咤激励により、やはり私は日本の歴

史を教へるために教師になったのだと考へ直し、授業にうち込むやう努めました。当り前のことではありますが、ともかく授業中に私語や内職をさせず、きちんと聞かせることから出発いたしました。半年ほどその努力をいたしまして、二学期の半ばくらゐ、十月くらゐから生徒もやつとまともに私の授業を聞いてくれるやうになりました。

そのころ授業で日露戦争の話をしました時、広瀬中佐のことにふれまして、広瀬中佐が柔道の達人であつたこと、ロシア留学後ロシア女性との恋愛の話、旅順に出陣する際の遺書等の話をしまして、その後で私は文部省唱歌「広瀬中佐」を皆の前で大声で歌ひました。すると生徒達は非常に喜びまして、教室が破れんばかりの拍手が起りました。その時は私も精一杯やったつもりでしたので、非常にうれしく思つたものです。同じやうに東郷元帥や佐久間艇長の話もしました。しかし、かういふこともあつて、そのころから坂口先生は右翼ではないかといふ声も起つてきました。確かに生徒達はすなほに広瀬中佐の話には感動するけれども、小中学校以来平和教育を受けてきた子供達の中には、私の話を戦争を礼讃する考へ方のやうにうけとめ、私を右翼であると思つたのも当然でせう。

二年目になりまして、わりに落ち着いて考へることができるようになりました。そのこ

る私は、去年私が右翼と呼ばれたのは無理もないことだった、あのころはあまりに感情が先走りすぎてゐた、また天皇の御製を紹介する際にも、自分としては精一杯やったつもりだったけれども、うはすべりに終り不十分な点が多かったと反省いたしました。

歴史上の人物に愛着をこめて語ることと、ファナティックになることとは違ふのだと思ひ、ともかくこの一年間つとめて実証的に冷静に、しかし父祖の足跡を偲びつつ語ることを肝に銘じて教壇に立ちました。

かうして二年目も終りまして学年末考査の折、一年間の授業の感想文を生徒に書かせてみました。その中の二人の文章を紹介しておきます。

「坂口先生は授業を受ける前はみんなから右翼であると聞かされていたし、何かいやだった。しかし、先生の授業を聞いてみると、今まであまりに日本の歴史を知らなかったことが恥ずかしくなった。これからは少しでも勉強したいと思います。」

「中学校の歴史の時間に、先生から天皇の悪口ばかりを聞かされていたので、坂口先生が天皇誕生日の前日に今上天皇御製のプリントを配布した時はイヤだった。しかし、日清戦争や日露戦争の話聞いていくうちに、だんだん日本史が好きになりました。やはり私

は日本人です。」

実を申しますと、生徒達の感想文を見るのはこはかったのです。しかし、この文章を読んでほっとしました。又、やれば出来るのだ、といふ自信みたいなものもわいてきました。

若松高校に来て三年目、五十三年になりまして、春休みに次のやうに考へました。歴史といふのはやはりきちんと史料を読むことから出発するわけだから、史料として高校生が理解しやすいやうな平易な文章で書かれた手紙を使って、偉人、英雄の心を偲んでゆかう。大体かういふやうに考へたわけです。いろいろな人の手紙を授業中に紹介しましたが、そのうち、ここでは野口英世のことをとりあげた時のことを述べてみます。

野口英世について語る場合、一人の生徒を指名して「野口英世について君が知ってゐることを何でもよいから話さない。」と言はせます。すると大体次のやうに申します。「福島県の会津若松の近くの貧農の家に生れ、小さい時にろりに左手を突っ込んで大火傷をし、左手が不自由になった。しかし、その後その不自由な左手を手術して貰ったことが契機となり、医者になる覚悟をして苦勞の末米國に渡り、梅毒や毒蛇の研究に偉大な功績を

あげた。その後アフリカで黄熱病の研究をしてゐるうちに、その黄熱病に感染して亡くなつた。」大体かういふやうなことを生徒は語ります。

そこで、丁度日露戦争の折、明治三十七年二月に、野口英世がデンマークのコペンハーゲンから故国日本の恩師血脇守之助に宛てて愛国の情あふれる手紙を送つたことを語り、その手紙の全文を紹介しました。その内容を少し申しますと、

「偕きて今回の日露戦争は二十七八年役の復讐をかね我國の積怒をはらす戦争なれば國民の一致協力すさまじき事と存候。二月八日より度々の旅順海戦常に我軍の全勝に歸し、氣強き事に候。」その後、ヨーロッパが日本を見下してゐることを述べまして、最後に「偏に我軍の全勝を祈り併せて皆々様の御健康を禱上候。」——すると、小学校以来科学者としての一面しか知らなかつた生徒達はびっくりしたやうな顔をします。日露戦争といふのは軍人だけが戦つた戦ひではない。外国にゐる日本人をも含めた全日本人が一丸となつて、大敵ロシアに立ち向つたのだとわかるわけです。

かういふやうなことを積み重ねていくうちに、少しづつではありますが、日本人としての自覚がよびさまされてきました。そのことが端的に表れましたのが昭和五十三年の九月

に行はれました、若松高校の体育祭の閉会式においてであります。

若松高校では入学式、卒業式には国歌を斉唱するといふやうなことはありませんでしたが、体育祭の折にはプラスバンドの演奏で国旗を掲揚、そして降納することが毎年行はれてをりました。閉会式も無事終りのほうになり、国旗を降納する段になりました。プラスバンドの「君が代」の演奏がはじまりましたが、その時、思ひもかけず三年生の一部から「君が代は千代に八千代にさざれ石の……」といふ声が出てまゐりまして、いつの間にか会場全体の大合唱になりました。私は感動のあまり胸が熱くなり、身体がぶるぶる震へました。誰が指揮したわけでもないのに、本当に極く自然に国歌斉唱はできたわけです。卒業式の時の国歌斉唱は実はこのことが契機になり、卒業式では是非国歌斉唱をしたいといふ声が三年生の中から出てきたのです。三年生を中心として、生徒独自で五十四年一月に署名運動が始まりました。またたく間に三年生の八割以上の署名が集まりまして、生徒会を経て学校に提出されました。

このやうな生徒の動きとは別に、体育祭のこともあるし、卒業式では是非国歌斉唱しなければならぬといふ私たち十数名の教師も学校長に強く働きかけ、PTA、同窓会の動



きも活発になり、二月の職員会議の結果、約二十年ぶりに国歌斉唱は実現したわけです。冒頭に申しましたやうに、心ない教師により国歌斉唱の妨害といふことがありましたけれども、立派に国歌は斉唱されました。

卒業式、入学式における国歌斉唱といふものは、山積してゐます戦後教育の問題の一つにすぎませんが、荒廃した教育界で国歌斉唱を実現させるといふことが、私にとっては実に険しいことでありました。しかしどんな険しい道でも精一杯やれば開くことができるといふことを、若松高校でのさまざまな経験から体得し、そのことを強く確信してをります。

ご静聴ありがとうございました。

## いのちを見つめて

昭和54年第24回「合宿教室」

久米由美子（旧姓前園）

（福岡県宗像郡玄海小学校教諭・26歳・鹿児島大昭52卒）

只今、ご紹介いただきました前園でございます。一昨年鹿児島大学を卒業し、現在、福岡県宗像郡で小学校の教師をしています。

学校のまはりには、田畑が広がり、近くには海や川もあり、大変自然に恵まれた所です。現在私は、四年生を担任してをりますが、この子供たちを三年生の時から受け持ちました。子供たちに接してゐますと、その素直な心に驚かされるのが度々あります。その一つをご紹介したいと思います。

三年生の時、理科の学習で、ヘチマの観察がありました。子供たちと大きなヘチマを育てようと、一センチほどのヘチマの種をまきました。夏休みに入るころになると、はじめ組んであった竹だけでは足りない程にヘチマが伸びてきました。そこで、子供たちは、二

階の六年生の教室のテラスから、太い針金を下ろして、それにへチマを伝はらせることにしました。夏休みの間に、へチマはぐんぐん伸びて、もう二階にとどきさうになったので、また、三階まで針金を伸ばしました。子供たちは、登校日毎に、大きく育つてゐるへチマを見上げては、驚き喜んでゐる様子でした。

このやうにして伸びたへチマを、九月になると根や茎の働きを調べるために茎を切るこ  
とになりました。そのことを子供たちに話すと、口々に「かはいさう。残酷だ。」と言ひ  
始めました。私は、はっといたしました。子供たちは、私が思つてゐた以上にはるかにへ  
チマの命を感じてゐたのです。へチマが切られるのが、まるで自分が切られることのやう  
に感じられたのでせう。私は、このやうな子供の素直な心に触れ、ほんたうに嬉しく思ひ  
ました。

その日の学級通信に載せた歌です。

口々にかはいさうよと言ひ出せる子らの心の清らなるかな

このやうな子供たちの清らかな心に接してゐますと、まるで私の心までも、やはらかに

清らかになっていくやうな気がするのです。科学する目も大切かもしれませんが、ヘチマ一本にも心を通はすことのできる心こそ、人として生きていく上で、より大切なことではないでせうか。

このやうな素直な心、やさしい心を大切にしたいと思ふやうになったのは、大学時代に読んだ岡潔先生の「日本の心」といふ本の中で、「人といふ存在の内容が心であり、心は幼いころに育てられる。」といふ言葉が心に残ってゐたからです。そしてもう一つ、岡先生の文章に次のやうなことがあります。

「人は、大自然の子であり、それを育てるのも大自然であつて、人をしてそれを手伝はしめてゐるのが教育なのである。」

とあり、「人づくりとか、人間形成とか言つて、まるで人造人間を造るやうに思ふことは、無知も甚だしい。」と述べてをられます。

子供本来には、成長したいといふ願ひがどの子にもあると思ふのです。さういふものは、何もまはりから強制されて湧いてきたものではなく、人間本来持つてゐるものやうです。さういふものを岡潔先生は、大自然といふ言葉で言はれたのではないでせうか。さ

う思ふと一人一人の子供が、本当にかげがへのない存在に思はれてまわります。

さて、最近この岡先生の言葉が一層しみじみと感じられましたことを話させていただきます。私の組にリエちゃんといふ子供がいます。この子は明るく無邪気なのですが、他の子と比較すると大変学力が低いのです。発音もダ行がラ行になってしまひます。ご両親は農業をされてをり、毎日、お忙しい生活で、子供の面倒を一から十まで見るわけにはいかないやうでした。

四年生に進級してから私は、一人一人の子供とより近づいていきたいと思ひ、子供たちに日記を書かせることにしました。さういふ中で、リエちゃんも日記を書いてきました。たどたどしい字で、ほとんど平仮名ばかりの日記です。リエちゃんの初めての日記を紹介します。

「きょう雨ふりだったので、さおりちゃんがかさに入れてくれました。びしょぬれで帰りました。手がぬくかったので、さおりちゃんがつめたいだったので、ぬくくしてあげました。かさがとんでいったので、わたしが、もってきてあげました。」

といふ文章でした。一生懸命書いた彼女の様子が思ひ浮かんで、私は、とても嬉しくなりました。そして、次を読んでみるとさおりちゃんの冷たい手を自分の手で温めてあげたといふのです。私は、かねて気がつかなかった彼女の心の世界に触れたやうな気がして、はっといたしました。このやうにしてリエちゃんは、休むことなく毎日日記を書いてくれるやうになりました。

ある日、教室ではうきが始末されてありませんでした。私が子供たちにたづねますと、皆、自分の責任ではないといふやうに顔を見まはしてゐます。その中から、すっと立ってはうきを取りに来た子がありました。リエちゃんでした。私は人が好んでやらない仕事でも進んでやるリエちゃんを褒めてあげました。そんなことが何回かあって、少しづつですが、みんなもリエちゃんを見直していくやうでした。リエちゃんは、だんだん自分から手をあげて発表するやうな子になってきてゐました。ずっと心の中に伸びたいといふ思ひがあったのだらうと思ひます。それからは、「今日はこんなにしたよ。先生これみて。」と持って来るのでした。

実は、リエちゃんにとってかけがへのない手助けをしてをられる方があるのです。お母

さんです。リエちゃんが日記を書き始めて二週間ほどしてから、お母さんが、五・七・五といふ俳句の形式で添へ書きをしてくださってゐるのです。私は、お母さんの添へ書きを見てびっくりいたしました。子供たちには、添へ書きについては、指示してありませんでしたので、まさかお忙しいリエちゃんのお母さんが書いてくださるなどとは思つてもめなかつたからです。しかもそれは、たどたどしいながらも、俳句の形式になつてゐるので、それは、日記が終る四十日余り毎日続けられました。ある日の日記を紹介します。

「今日、お母さんと二人で桃のふくろをかぶせに行きました。おかしやジュースを持って行きました。畑について桃のふくろとかねで作ったピンをこしにつけて、桃を一個ずつにいねにかぶせました。わたしは六十まいかぶせました。とてもきつかったです。」

このやうなリエちゃんの日記の後に、お母さんが、

「リエちゃん、とってもありがたい。お母さんは、ほんとうに嬉しかったよ。またしてね。」

休みなしいちご終れば桃つつみ」

と記してありました。いちごが終れば次は桃といふ忙しい農家の様子と共に、さうい

ふ中で、親子が心を通はせながら働いてゐる姿が浮んでまゐります。そして、リエちゃんのお母さんの子供へのやさしい心遣ひが感じられるのです。お母さんは、毎晩、疲れた体で鉛筆をもたれたことせう。

さて、ある日、次のやうな俳句が寄せてありました。

「わが子供自分の道を切り開け」

かねての俳句と違ひ、何かお母さんの心の奥底の思ひがでてゐるやうな気がいたしました。そして、その句の傍にお母さんの文章が添へてありました。

「今日、『自然の家』に行きました。どこから来たのか口のきけない子、自分の体が自由にならない子、でも一人一人私を見て何か言おうとしているその姿を見て作ったものです。みんな手を振って別れて行った子供たちを見た時、なんとも言えぬ涙がこぼれてきました。」

このお母さんの文章に触れた時、私も目頭が熱くなってまゐりました。高学年のキャンプが県立自然の家でありました時に、養護学校の子供たちが来てをり、どの子も障害を背負ひながら懸命に生きてゐる姿を目にしたばかりだったからです。お母さんは、その子た



ちに自分の子供を重ねて思はれたことでせう。「わが子供自分の道を切り開け」俳句といふにはつたないかもしれませんが、この句の中にお母さんの切なる願ひがこめられてゐるやうに思はれました。学力が人にはまだまだ及ばないとしても、障害を背負って生まれてきた子供たちであらうと、あなたたちは、自分の伸びようとする力で自分の道を切り開いて行かなくてはならないのですよ。そのやうなお母さんの思ひが伝はってまゐりました。

岡先生の「人は大自然の子であり、それを育てるのも大自然であつて、それを手伝はしめてゐるのが教育なのである。」といふ言葉が思ひ起こされてまゐります。リエちゃんが、自分から進んでものごとに取り組むやうになつたのは、彼女自身の成長したいといふ願ひと共に、子供の成長を祈り子供を励まし、自ら努められたお母さんがあつたからだと思はれるのです。

ここには、人造りとか人間形成とかいふやうな氣負つた姿は見られません。私はヘチマの観察やリエちゃんの記事から学んだことを大切に、子供たち本来の素直な心、伸びようとする心を尊び、その成長の手助けとなるべく自ら顧みて勤めていきたいと思ひます。リエちゃんの文章を読んだ時に作りました歌を読ませていただき、発表を終はらせていた

だきます。

わが子よと祈りをこめて見守れる母の姿に心打たるる

子供らの尊き命つくしみ心つくして育みゆかん

ご静聴ありがたうございました。

## 動乱の生

昭和54年第24回「合宿教室」

大町憲朗 (日本ユニバック(株)勤務・29歳・東京工業大昭52卒)

私は現在コンピューターの仕事に携はってをります。入社した当時は、慣れないコンピューターの仕事といふこともあり、研修の時などは徹夜が何日も続くことがありました。さらに、配属されてからは、その部署で新人が私一人といふこともあり、自分を何とか解ってほしいといふ気持ちから、会社の先輩と徹底して付き合ふことに致しました。ところ

が、そのうちしだいに、肉体的にも精神的にも疲れを感じて参りました。そのやうな時、私は自分を励ますやうに東京で月一度行なはれてゐるOB研究会（合宿教室参加経験を持つOBの研究会）に参加して、先輩の方々にいろいろと会社での悔しい思ひや、辛いことなどを話しては助言をいたゞいたり、励ましていたゞいたりしながらすごしてきましたが、或る時は先輩から、会社の先輩との付き合ひ方の間違ひを指摘されて目が醒めたやうな思ひがしたこともありました。しかしまた、忙しさが増してくると、学生時代に学んだことを続けて勉強してゆかうといふ意欲がなくなったり、さういふ時、学生主催の合宿に参加して再び力を得たり、そのやうな繰り返しを何度もしながら今日に至つてをります。さて、今年になりました、私も合宿教室に学生を連れてゆきたいと思ひ、休みの日に大学に行つては学生を誘つてをりました。しかし学生に話しかけてゆくとき、自分が一体何を伝へたのか、時に自分でもはつきりして来なくなるころがあるのです。さういふ時は、私は通勤の電車の中などで国文叢書「いのちささげて」を読んでは勇氣を与へられるのが常でした。この本は、戦中学徒であられた先輩方が遺された文章や歌を、国文研の先生方が編集された本であります。その本の中に、富山県立富山商業学校に入学され、「精神会」とい

ふ会で勉強されてゐた石田安治さんといふ方の遺文が収められてゐます。この方は、僅か十七歳にして御病気で亡くなられた方ですが、この方の文章を読んでをりますと、非常に心を動かされ、自づと体もひきしまるやうなおもひがいたしました。その方の数々の言葉にふれてゐると、十七歳といふ短かいのちを精一杯生きてこられたのだといふことを強く感じました。自分は病に臥してゐるけれども、なんとか体を治して国の為に役立ちたいといふ歌や、同信の先輩方が入營されて行く時、その先輩方を偲ぶ歌などがあり、病床にあつて精一杯生きてをられる姿が偲ばれて非常に心打たれたのであります。さらに、石田さんを紹介された文章の中に次の一節があります。

「彼は死ぬまで『明治天皇御集』『古事記』『萬葉集』の三冊を枕もとから離さず、三月一日遂に永眠。」

私は、亡くなられるまで枕許からはなさない三冊の本をお持ちだったといふことに、また非常に心動かされました。その中で古事記について、石田さんは次のやうに記してをられます。

「本日は晴天なる故、二階にて寝す。静かな所はいゝ。古事記を拝誦す。床に就いて居

ると色々な考へが浮んでくる。自分は辰年である。竜は海に千年、陸に千年、而して雲に乗りて空に登り雨を呼び風を呼ぶと言ふ。我今病床に在り、これ竜の在海千年ならん。我病を治し在陸千年の日が待たれる。空に登る時はこれ国の為<sup>に</sup>に死する時なり。」

また、次の文章があります。

「古事記は二回目を拝誦す。何度読みてもあくことを知らない強い調べである。又萬葉集もまた。休むなかれ常に勉めよ。」

病に臥しながらも、何か力強い生き方をされてゐるのを感じるのであります。石田さんの力強い生き方の源はこの古事記にあるのではないか、さういふ気がして参りまして、私ももう一度古事記を読み返してみようと思つたのであります。学生時代の輪読会の頃特に須佐之男命が八俣の大蛇を退治するまでの命の人生みことに感動したことを今も忘れないのですが、もう一度初めから読み返してみますと、また別のところに心動かされたのであります。それは天若日子あめのわかひこといふ神様のことであります。

天照大神が葦原の中つ国の荒ぶる神をお治めにならうとして、まづ天菩比神あめのほひのかみをお降ろしになります。三年経つても返事がない。そこで、天若日子をお降ろしになるが、天若日

子は大国主の神の娘を妻とし、国を自分のものにしようとして、八年経っても返事をしない。高天原では心配して雉子名鳴女きざしななめといふ使ひを遣はします。ところが、天若日子はその使ひを矢で射殺してしまふのです。その矢は雉子名鳴女を射通して高天原まで登り、つひに天照大神のもとに届きます。天照大神はその矢を再び葦原の中つ国へ射返へすと、天若日子はその矢に当たって亡くなってしまひます。ここまで読んできて、天若日子は何と悪い神様かと思ひましたが、次に古事記に書かれてゐるところを読んで古事記らしいなあと思つて強く心をうたれました。天若日子の父や妻子が天若日子の死を悲しむ姿でありました。そこでは悲しみにつつまれて泣きに泣き、何日にもわたって葬式が行なはれたことが書かれてゐます。

「かれ天若日子が妻下照る比賣の哭く聲、風のむた響きて天に到りき。ここに天なる天若日子が父天津國玉の神、またその妻子ども聞きて、降り来て哭き悲しみて、其處に喪屋もやを作りて、河鴈かはかりを岐佐理持きさりもちとし、鷺はぎもちを掃持はきもちとし、翠鳥そどりを御食人みけびととし、雀うすめを碓女うすめとし、雉子なまめを哭女なまめとし、かく行ひ定めて、日八日夜八夜遊びたりき。」

この肉親の情といひますか、天若日子の父や妻子の悲しむ姿がそのまま書かれてゐるの

であります。ところで天若日子の葬式のあとで、友人である阿遲志貴高日子根あじしきたかひこねの神が弔ひに参りますが、その神様の姿があまりに天若日子に似てゐたので、天若日子の父と妻は天若日子はまだ生きてゐると思ひ、その神様の手足に取りすがつて泣く場面があります。

「天より降り到れる天若日子が父、またその妻みな哭きて、『我が子は死なずてありけり』『我が君は死なずてましけり』といひて、手足に取り懸かりて、哭き悲しみき。」

私はこの天若日子のところを読んでをりまして、肉親の情といふものは千何百年経つても変はらないものであることを強く感じました。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の御本の中に黒上先生の次の御言葉があります。

「我らの祖先の描きし神々英雄はすべて隠遁超脱の聖者ではなく、動乱の生に随順せし情意的人格である。」

この御言葉がふと浮かんで参つたのであります。天若日子を亡くした家族たちはまさに、動乱のやうな生活を送られたのではないか。天若日子を亡くしたといふことはどうにもとりかへせないことですが、その時の家族の悲しみがそのまま書かれてあるところに私はひかれるのであります。さういふ古事記の物語を読みながら「動乱の生に随順せし情意的人

格」といふのが、その神様の姿を通して感じられたやうな気がするので。石田安治さんもきつとかういふところに心動かされ、力を得られたのではないかといふ気がして参り、何か嬉しい気持ちが出てくるのであります。

石田さん御自身も病で苦しい思ひで床に臥してゐなければならぬ、しかしまはりの同信の先輩方は続々と入營されてゆく、さういふ二つの苦しい気持ちがありながら、ご自分を元気づけられ精一杯生きてをられるその姿にもまた、動乱の生に随順せし情意的な人格といふものを拝見する思ひがしたのであります。

さて私は会社勤めでありませうけれども、時々母校や学生寮に行つて、合宿教室への参加を勧め学生と話することがあります。その話の中で、もっとかういふことについてしっかり話ができたら良かったのにと、自分の力不足を痛感することがありますが、一方学生から返つて来る言葉にも非常にがっかりすることが多いのです。「特に目的はないけれども大学にいけば何とかなる。」「打ち込むものがなくて悩んでゐる。」といふことです。私自身も学生時代さういふことを言つてゐたかもしれませぬ。しかし、石田さんの生きられた姿の中には、打ち込むものがないといふやうな悩みの入る余地は全く見つかかりませぬ。古事



記から石田安治さんに連なる力強い生き方、そこに日本人が昔から大切にしてきた人生がある。私は今後とも現在の目的を失った、氣迫の乏しい精神生活を打破して、生き生きとした精一杯な生き方を大学生の皆さんと共に、学んでゆきたいし、さういふ気持ちを養ってゆきたいと思っております。

## 心をはたらかせて

昭和55年第25回「合宿教室」

小原 敏子（旧姓谷口）

（福岡県中間市立南小学校教諭・25歳・福岡教育大昭54卒）

只今、ご紹介いただきました谷口でございます。昨年福岡教育大学を卒業し、現在、福岡県中間市で小学校の教師をしてをります。

私は、大学生の時にこの合宿教室に参加しまして、その折に「短歌の相互批評」といふのを経験いたしました。相互批評といふのは、今回の合宿でも後日ございますが、各自そ

れぞれが創った短歌を、「その時の気持ちはどうだったのか。」「歌を創られた時の様子はどのやうだったのか。」と、具体的に思ひを馳せながら、創った人の気持ちに近づくやうに吟味していくものです。

私は、初めての時は何と言っているかわからず黙ってをりましたが、先輩や友だちは、「その時は、こんな気持ちだったんじゃないの。」「この歌でかういふことを言ひたかったのじゃないの。」と、ていねいに考へ、歌を創った人の身になって一言一言、言はれるのでした。私は、相手の気持ちになるといふことは、こんなにも心をこめていくものなのだなあと、とても驚ろかされました。

その後も何度か、短歌の相互批評をいたしました。回を重ねる毎に、創った人の気持ちに近づくといふ事はとてもむづかしい事だけれども、少しでも近づけた時の喜びもまた、大きいものだといふ事が少しづつわかるやうになりました。そして、五七五七七といふ短い言葉ではありますが、心を働かせれば、そこにこめられてゐる創られた人の気持ちは、自分の心に響いて来るものだといふことがわかるやうになって来ました。

この学生時代の体験から、私は、心を働かせて、相手の気持ちを少しづつでも自分のも

のとして理解できるやうになりたいと思ってきました。教師になりましてから、この心を働かせることの大切さ”について、また、改めて考へさせられることがございましたので、今日はそのことを中心にお話しさせていただきたいと思ひます。

昨年教職につきまして、初めて担任いたしましたのは五年生でした。いざ担任してみますと、私が学生時代に本を読んだり、教育実習を通して抱いて来た子どもイメージとは違つて、口が達者で乱暴な子ども達が多いのにびっくりしました。しかし、そのやうな子ども達も、きつと心の底は素直で明るいのだと信じて、頑張らうと思ひました。

四月当初、一週間ぐらゐ経つた時でしたか、一人の女の子が近づいて来て、こんな事を言ひました。「先生、もつと叱りいよ。（叱りなさいよ）男子が言ふ事をきかんやうになるよ。前の先生なんか、ピシッと叩きよつたよ。」大きな目をますます大きくして、一所懸命に言ふのです。私が新任なのでとても心配してくれてゐるのだなあと思ひました。よく気がつく子だなあと感心しました。

その女の子の名前は正美まさみさんと言ひました。それから気をつけて見てゐると、決して

目立つ子ではありませんが、正義感のある明るい女の子のやうに思ひました。

五月には家庭訪問があり、その正美さんの家にも伺ひました。その時、お母さんのお話では、正美さんのお父さんは脊椎の病気だとかで入院されてゐるといふことでした。

正美さんにお父さんが病気だといふ事を聞いてはゐましたが、詳しくは聞いてをらず、ひどい病気なのかしらと心配しました。けれど、六月には退院され、動けない状態ではありましたが、家に帰って来られたといふ事で、正美さんはとても喜んでゐました。

その頃、正美さんは作文に、

「お父さんはとても頑張り屋です。ふつうの人ならゆっくり休むだろうに、早く会社に行きたいと言って起き上がる練習をします。けれどそんなふうは無理をするから、また悪くなって入院する。そのくり返しです。あせらないで、じっくりなおしてほしいと思います。」

といふ事を書いてゐました。

私は、たまたま私の父も倒れて、半身不随になつて寝ついてをりましたので、

「先生のお父さんも病気で寝ついています。正美さんのお父さんとどちらが早くよくなる

か競争ですね。またお父さんの事、教えてね。」と、返事を書きました。それから度々、お父さんの様子を教へてくれるやうになりました。

七月のある朝、正美さんが小さな声でそつと教へてくれました。「お父さん、また入院したんよ。そして、今日十時に手術があるんよ。」その日の二時間目、十時近くになると、正美さんがとても心配さうな顔をしました。私は、授業をしながらも、時々気になって正美さんを見てゐると、考へ込んでゐる様子でした。心配なんだらうな。勉強どころぢやないんだらうなと思ひました。休み時間になった時に近づいて、「大丈夫よ。絶対手術成功してゐるから。」と励ましましたが、力なくうなづくばかりでした。

次の日に聞きますと、何と手術は夜の八時ぐらゐまでかかり、お母さんは泊まり込みだったさうです。手術の結果は完全ではなかったらしく、三、四ヶ月入院され、途中、二度ほど手術がありました。家に戻つて来られたのは十月だったと思ひます。

正美さんが、お父さんの事を話す時に暗い顔をしましたのは、その頃からでした。じつと寝たままで動けないことなど、話を聞かされた時に、容態が普通でない事がわかってきます。また、「先生、お父さん耳が聞こえんやうになつて来たんよ。」と悲しさうに言ひま

す。「それならね、紙に書いてお話ししたらいいやらう。きっとお父さんも学校の事とかを知りたいと思っていらっしゃるよ。」と言ふと、「でも、目もあんまり見えんの。」と、ポツリと言つて黙つてしまふのです。私は返す言葉がなくて、一緒に黙りこくつてしまひました。

何もしてあげられる事がなくて、ただ話を聞いてあげるだけでした。

これまでが、入院、手術、退院の繰り返したたことや、退院後の様子から、私も、もしや……と不安な思ひにかられるやうになりました。

そんなある日、月曜日の朝、家を出ようとしてゐた時学校から電話がかかってきました。正美さんのお父さんが亡くなられたといふ知らせの電話でした。

午後、お葬式に参列しました。正美さんの気持ちを思ふと胸がつまりました。出棺の時お母さん、お兄さんの後に続いてうつむいて出て来た彼女の顔は、今も目に焼きついて離れません。真つ赤な顔をして悲しみをこらへてゐるのです。

私は、学級の子ども達に正美さんのお父さんが亡くなられた事を知らせました。「先生は、子どもの頃、おちいさんやおばあさんを亡くしたことがあります。何とも言はず悲しかつ

た。ましてや、正美さんはお父さんを亡くしました。どんなに悲しいか、辛いかな、正美さんの身になって考へてあげてください。」と話をしますと、どの子もみんな真剣に聞いてくれました。五日後、正美さんが学校に出て来た時は、話しかけて気持ちをはきたててやらうとしてゐる子が何人もありました。中には、正美さんと話す時は、しばらくは話題にお父さんの事が出ないやうにするのだと言つてゐる子もありました。さうした友達のお蔭か、しだいに前のやうに明るい女の子に戻つていきました。

けれど、私は、正美さんが明るい表情になつた事を喜ぶ反面、あまりにも立ち直るのが早かったので不思議にも思ひました。何か訳があるのではないかと思ひ、その理由が知りたくてなりません。そんな時、十二月に父兄との個人懇談があり、正美さんのお母さんと一対一でお話しする機会を得ました。

お母さんが言はれるには、「あの子は毎日、家に帰ると佛前にすわつてお父さんにお話をするのですよ。本当に口に出してブツブツしゃべつてゐるのですよ。」といふ事でした。そして、「あの子が、ねえ、お母さん、何でも話していいと。（いいの？）お父さん、何でも聞いてくれるやろか。と言ふので、うん聞いてくれるよ。といふと喜びましてねえ。」

と、話を続けられたのでした。

私は、ああさうだったのかと思ひました。正美さんのお父さんは、もう目には見えないけれども、生きてゐるんだなあと思つたのです。佛前で、毎日お父さんと話しをする正美さんの姿が目に見えなくなり、胸があつくなりました。

次に、正美さんの六年生になつてからの作文の始めの部分を讀ませていただきます。

「わたしのお父さん」

六年四組 加藤 正美

「私の父は、長い間病氣にかかつて苦しんでいた。でも今はちがう。病氣のない、苦しみのない、楽しい楽しい世界でくらしている。私は、そんな父のことをありったけにこの作文に書きたい。……」

これが、作文の書き出しです。彼女は、父親の魂がどこかで生きてゐると信じてゐます。それが彼女を支へてゐるのだと思ふのです。そして、現実にはゐない父親だけれども、心を働かせれば、話しをすることもできるのですね。私は、彼女から、心の働かせやうによつては目に見えない所までも、しっかりと受けとめる事ができるのでだといふ事を教



へられた気がします。

世の中では、表面だけを見て、あれこれと批判する事も多いと思ひます。例へば、私は今年、六年生に持ち上がり、社会科の歴史で子ども達に古事記の話をしましたが、先生方の中には、神話など作り話だから子ども達に話しても無駄だと言はれる方もられます。

けれども、それは、嘘か本当かといふ点ばかりに目を向けてゐるのであって、そこに昔の人のどんな気持ちが偲ばれるかを見てゐないやうな気がするのです。私は、遠い祖先の残した文章を心をこめて味はふことによつて、その時代に生きた人々の気持ちが生き生きと心を感じられるといふ、さういふ体験はとてもすばらしい事だと思ひます。

現実ではかうだ、事実としてはかうだと、合理的に考へようとしては、いつまで経つてもわからない事も、世の中にはたくさんあると思ひます。

私は、正美さんとの体験を通して、物事に対処する時、より深い所まで感じ取ることが出来るやう、今後さらにさらに心を働かせていきたいと思つてをります。

## 瀬上安正先生のこと

昭和55年第25回「合宿教室」

松田信一郎（㈱千代田コンサルタント設計部・34歳・熊本大昭48卒）

「東の空に雲仙の、気高き姿仰ぎ見て、北に千々石の灘広き、岡に立ちたる学び舎ぞ……」  
これは私の中学校の校歌の一節です。私の郷里はこの雲仙のすぐ近くにあります。子供の頃から慣れ親しんで来た雲仙の地で、この様な合宿教室が開催され、そこに自分も参加してゐると思ひますと感慨深いものがあります。

先程、御紹介戴きました様に、私は、熊本大学を卒業しまして、現在の会社に勤務して居ります。橋梁、道路、都市計画等の設計会社であります。勤務地が東京でありますし、仕事も、不規則な事が多いものですから、なかなか毎年は参加出来ないのですが、学生時代から今日に至る迄、合宿教室は私にとりまして、何よりも大切なものである事には変わりありません。私はここで多くの得難い友人に巡り合ひ、生き方の根本を学んで来ました。合宿第一日目の小田村先生の御話の中に、こゝでは、お互ひの平常心を鍛へ合ふのだと

いふ御言葉がございましたが、私は改めて、その事をしみじみと感じさせられました。毎日の仕事を支へてゐる私の平常心は、この合宿教室を通じて鍛へて貰つてゐると言へると思ふのです。

合宿教室に私が初めて参加したのは、昭和四十三年の霧島での合宿教室でした。東京の大学に行って居た従兄の誘ひによるものでした。熱心に勧めて呉れたものですから、断るのも申し訳ないやうな気がして、参加の申し込みをしたのが、きっかけでした。

さういふ訳で、気軽に参加したのですが、合宿教室では、先づ開会式の厳肅なことにびっくりました。それで随分、気持ち引き締まったのですが、連日の先生方の御講義や班別討論は気の重いものでした。講義の内容は、何とか解るやうな気がしたのですが、どのやうにそれを受け取めたら良いのか解らなかつたのです。合宿教室が深まるに連れ、気の重さは増していったのですが、他の班員の人達の真剣な態度に引きずられて、精一杯、日程には取り組んで居りました。班生活の御蔭で気持ちだけは、集中出来てゐたのでせう。

昨晚、小柳陽太郎先生が、合宿導入講義をされましたが、あの小柳先生が、霧島合宿の四日目に講義をされました。私はその御講義を御聞きするうち、何かしら、光明を見出し

たやうな気が致しました。そして、今までの重たい気分が、不思議に消えて居りました。その時の気持ちをも、合宿最後の感想文——これは皆さんも最後に書かれる訳ですが——で次のやうに書いて居ります。

「私は、この合宿教室によって、先ず心を定めよという言葉に強い感動を覚えました。色々なことを問題にする前に、先づ何よりも自分の信念を持たなければ道は開けないといふ小柳先生のお言葉にはただただ深く感動するだけでした。私はこの言葉を信じて、大学に帰ってからも人生を語り合える学問の場を目指して、ささやかながら力を尽して行きたいと思ひます。」

かうして私は、参加する時は思ひもしなかつた貴重な体験をして合宿を終へることが出来ました。帰りの汽車の窓から、外を眺めた時の景色の美しさは今もはっきり覚えてをります。自然がこんなに美しかつたのかとつくづく思ひました。合宿教室で心が浄められたために、かういふ風に見えるんだと思ひました。

この合宿での体験を、その後の学生生活の中で、確かめ、深めて行つたのですが、その事について話してみたいと思ひます。

夏休みが終らないうちに、大学へ戻った私は、同じ下宿の友達等に合宿教室での話を話したりしてゐるうちに、合宿での気持ちを持続させるには、環境を変へた方が良ささうだと思ふに至りました。大学の近くの下宿町に居て色々都合はよかったです、それだけ、脱皮するのも難かしい気がしたものですから、出来るだけ大学から離れてみようと思ひました。大学の厚生課に行ったら、丁度、さういふ所が在りましたので、とにかく、引越しました。気分一新位の積りだったので、此の引越しが私の転機となりました。

引越して間もなく、熊大から合宿に参加されてゐた方に、合宿の礼状を差し上げた所、すぐ、御返事があり、その中に、思ひがけない事が書いてありました。それは、私の新しい下宿の近くに、国民文化研究会の理事をしてをられる瀬上安正先生といふ方が住んで居られるので近々一緒に御訪ねしようといふ事でした。

私も、合宿での地区別懇談会で先生の御顔は拝見してをりましたが、偶然の成り行きに、驚くと共に、とても嬉しい気が致しました。

先生は、五高、東大を出られ、戦後は、熊本県庁に勤務されて居られる方でした。最初

は、紹介して戴いた大学の先輩の方と一緒に先生の御宅を御訪ね致しましたが、懇切に接して下さる先生の御人柄に強く魅かれました。なつかしさが感じられて、初めて、親しく御会ひするやうな気は、全くしませんでした。その時は、先生の学生時代の御話や、合宿の御話など色々話して下さいました。それから、私は先生の御宅を度々御訪ねするやうになりました。瀬上先生は、五高時代、当時東大生であられた、現在の国民文化研究会理事長の、小田村先生に巡り合はれたのが、機縁となられたといふ事でした。先生が当時の事を昨日の事のように話されたのが印象的で、先生の御話から、人と人との出会ひの大切さを知りました。吉田松陰の話もよく御聞きしました。自分の生き方を、定めてゆくべき年頃に、瀬上先生に、御会ひ出来た事は、有難い事でした。

やがて、全国的に大学紛争が起こり、熊大へも波及しました。教養部や、工学部もストライキになり、講義の代はりに、集会やデモが日常化してゆくことになったのですが、私は先生や友達、特に瀬上先生の御指導と励ましにより、この間にあって、学生として恥ぢる事のない生き方が出来たのだと思つてをります。

時習義塾といふのが、熊大にございます。この合宿に参加した者が、大学に戻ってから

一緒に寝食を共にしながら勉強して生活してゆく集りの場ではありますが、それは大学紛争の後、出来たものです。私たちはそこで、毎週、読書会をしたり、歌を詠んだりして、お互ひに鍛へ合ふのです。塾は、今も、後輩諸君が、引き継いで居りますが、塾が今日まで、成長出来たのも、瀬上先生の御蔭であります。

塾が出来てからは、私も、塾に入りましたが、塾での集りには、先生はいつも来て下さいました。塾生皆で、先生の御宅を、御訪ねする事もありました。私が卒業してからも、この事は同じでありました。私も、帰省した時は、必ず、後輩諸君と一緒に、先生の御宅に御伺ひするのが常でありました。このやうに御指導を仰いで参ったのですが、今は、もう、御会ひする事は出来ません。

先生は昨年の九月十九日突然の事故で他界されたのです。信じ難い事でした。

奥様の御話から、先生の御最期の安らかな御様子だけが、浮かんで参りました。先生は、奥様にいつもの如く懇ろに御別れを告げて逝かれたといふ事でしたが、奥様の御話を御聞きしてあるうち、私は、「死を観ること帰するが如し」といふ、以前岡潔先生に御伺ひした言葉を思ひ起こしてをりました。先生は、学生の頃から、志を同じくする方々と共

に、思想運動を展開してこられた方でもありました。この合宿教室も、その御志の継続で  
ありました。

この国民文化研究会につながる多くの同志の方々は、黒上先生を始めとしてすでに世を  
去つてをられますが、毎年、九月黒上先生の御命日の前後に、東京で慰霊祭が行はれて居  
ります。瀬上先生にとって、その慰霊祭は、亡き師友の方々に、直接に御会ひするやうな  
御気持ちでお迎へになる厳粛な行事でありました。先生は、遠い熊本の地から毎年歌を献  
詠されて、御霊を慰めて居られました。昨年も献詠されてゐましたが、それは先生が事故  
で亡くなられる数日前に詠まれた御歌だと存じます。それは次の三首です。

更くる夜の風つめたきに虫の音のさやかに鳴きて昔思ほゆ  
たらちねの母いますごと思はれてふるさとの庭偲はるるかな  
歌の道ふめと教へし母を思ひいまだ成らぬを悲しみて生く

先生は、昨年の慰霊祭が近づいた九月の或る夜、亡き師友の方々を偲んで居られたので



せうが、この御歌は、その時に、自づと出来上がったやうな調べが感じられます。しかし私には、先生が、我れ知らず、この世に別れを告げて居られる御歌のやうに感じられてならないのです。

九月二十二日、東京では慰霊祭が行はれました。それは先生の御葬式の日でもありません。私は先生の御霊が、東京の慰霊祭の場に天翔けてゆかれるやうな気が致しました。

先生は昭和五十年に県庁を御辞めになりましたが、その時、次の御歌を詠まれました。

二十有五年の月日過ぎゆきて我がそゝぎたる生命いのちいづくに

この御歌を詠んでをりますと、先生が私達に、どのやうな気持ちで接して下さったのか、しみじみ偲ばれ、そして、先生の優しい、澄んだ御眼ざしが目に浮かびます。私は仕事に従事しながら、一方で、私達を指導して下さいました先生方の生き方を、偲びながら、一層、平常心を鍛へ、先生の御恩に報いることの出来るやうな生き方をしたいと思つてをります。

最後に明治天皇の御製を拝誦させて戴き、終りと致します。

国を思ふ道にふたつはなかりけり軍いぐさの庭にたつもたたぬも

御清聴有難うございました。

## 教員生活における一つの体験

昭和56年第26回「合宿教室」

小林 至 (福岡県立福岡農業高校教諭・32歳・福岡教育大昭48卒)

只今ご紹介にあづかりました小林です。現在福岡県立福岡農業高校で教師をしてをります。私は、大学時代の昭和四十四年から三年間、毎年この合宿を経験して大学を卒業し、教職の道に進みました。私の専攻は体育ですが、最初のころは自分が経験したスポーツの喜びや苦しみを、授業を通し、あるひは陸上競技を通して生徒と共に経験し、また特に部活動に於ては何とか全国大会に出場させて、私が高校時代に感激したその総合開会式の感激を生徒にも味ははせたいと思ひ、一生懸命部活動の指導に出してをりました。たゞそ

のやうな生活でしたので、自分自身を振り返ったり、物をじっくり考へたりする事が少なくなつてをりました。そして昭和五十四年に現在の高校に変はつたのですが、その時も一度教師として自分自身を見つめ直し、自己研鑽をしたいと思ひ七年ぶりにその年の霧島合宿に参加したのです。

ところが私はその合宿で、大学時代には味はふ事の出来なかつた経験を致しました。それは、明日の夜も慰霊祭が行はれますが、その合宿での慰霊祭の時の体験です。私は御霊をお迎へするかがり火の薪組みや祭場作りをお手伝ひして、祭の時にはかがり火の点火係になつたのですが、慰霊祭が厳粛に取り行はれ始めますと、私は大学時代にこの合宿に一緒に参加して共に学んだ今は亡き或る友達の事が偲ばれてきました。かがり火を点火し、目の前で舞ひ上る火の粉一つ一つに、日本の為に尊い生命を捧げられた全ての御霊と一緒に、今は亡き友の霊が強く感じられ、私に語りかけ、見守つてゐるやうな気がしたのであります。私は、私達の肉体は滅びても魂は不滅であるといふ事が、亡き友を思ふ時本当に実感として迫つてきて、そのことをはっきり確信いたしました。自分は今、国の為に生命を捧げられた全ての御霊とのつながりの中に、生きてゐるのだといふことを強く実感し、

感謝の念で一杯の合宿でありました。

さて、私は教員生活をして九年目になります。現在、テレビ、新聞で盛んに校内暴力などが報道されてをりますが、その渦中にある一つの体験をお話ししたいと思います。私の学校でも最近教師に対する暴力問題がおこったり、頭髪服装問題で生徒達が授業ポイコットをするやうな事件もありました。生徒間では、弱い者いぢめが非常に広がって、弱い連中は体育館の隅っこや図書館、あるひは職員室の廊下に避難してゐるのです。そのやうな弱い連中は、教室にゐると弁当を食べられるとか、物を買ひにやらされるとか、金銭を強要されるとか、随分ひどい目にはされるのです。しかもそれが日常茶飯事になってしまつて最近では善悪に対して無感覚な生徒が日に日に増えてきました。特定の生徒が問題であれば手のつけやうもありますが、学校全体がそんな雰囲気に含まれてゐるのです。

私は陸上競技部の顧問をしてをりますが、その部員の上野広光君といふ生徒が本年五月に退学いたしました。そのことについて少しお話ししたいと思います。上野君はねぎ専門の園芸農家の二人兄弟の長男として生まれ、三歳の時に農業機械に手を挟まれて右手首が先からありません。その事で小さい時からみんなにからかはれ、馬鹿にされて、小学校、中

学校時代はぐれてよく喧嘩をしたさうです。しかし、中学校の時に陸上部に入り短距離選手として目標ができ、自分の片手首がないハンディを克服して一生懸命練習に打ち込み、部活動の喜びや苦しみを経験して、少しは落着いて父の農業を継ぐ決心をして本校に入學してきたのです。もっとも入學してきた彼の印象は、だぶだぶズボンに片手をつっこんで、大変横柄な様子でしたが、接触していくと実に素直で礼儀正しい所を持った生徒でした。しかし、学校全体が荒れてあるといふこともあって、人に馬鹿にされたくない一心でつっぱったり、喧嘩もするやうになりました。かうして一年生の時に陸上部室で喫煙をしたり、あげくのはては授業中に早飯をしてゐる所を先生に注意されて頭をこづかれたのに対して、かっとして先生の衿首を掴むといふ事件をおこしてしまいました。その事が教師に対する暴力行為として職員会議では退学させるべきだといふ意見も出ました。しかし私は彼が陸上で励んでゐる姿は真剣で素直な所があり、誰も練習をしてゐない夏休み、一人で黙々と走ってゐる姿や、トラックの草を取ってゐる姿を見、又手首を失ったハンディを考へた時、ぜひとも農業後継者として一人前になって卒業させるべきだと痛感して、担任の大音先生と一緒に強く訴へ、本来なら退学になる所を無期の家庭謹慎といふことで結着

をみました。

その後いくらか落着いた彼は、二年生になり、ある先生から生徒会長の立候補を勧められたのですが、悪僧連中からも担がれ、結局生徒会長に選ばれました。私はこの機会を生かして人の上に立つ心構へについて話したり生活態度、服装言葉遣ひなどを注意して彼が、自分を押へ、良い方向に行くやう願つてをりました。そして三年生になったときには、新生生を迎へて彼は生徒会長として校内で乱れてゐる頭髪服装問題に取り組みました。入学式の時には、新生生にむかつて父兄がをられる中で頭髪服装を正しくしようと思へ、一年生に対する服装頭髪のチェックが行はれました。しかしなかなか効果はあがりません。上野君は再三の生徒会の呼びかけにもかかわらず、一年生が直して来ないのに生徒会長としてメンツがそこなはれたといつて大變腹立たしく思つてゐたやうです。そのころ彼は陸上部の練習に来るといつも、私に「今度の一年生は横着だ」とこぼしてゐましたが、彼は心のうっ積を陸上で汗に流す事によつて安らぎを得てゐるやうに思へました。だが、どうしても心のうっ積ははれなかつたのでせう。一年生に対する校歌応援歌の指導の時にそれが遂に爆発してしまつたのです。一年生全員を柔道場に入れ校歌の指導が行はれる中

で彼は竹刀を持ち、やくざまがひの言葉を吐いて脅しをかけて指導したらしく、その事が行き過ぎた威圧行為として一年生の担任から抗議があり、生徒会長としてあるまじき態度だと指摘されたのです。彼と食堂で会った時、私は「君の最近の精神状態はをかしい。やけっぱちになってゐるやうな気がする」と言つて、もっと自重するやうに注意しましたが、彼からは弱々しい返事しか返ってきませんでした。そんなとき新入生歓迎遠足が行はれましたが、彼は違反した服装で登校し、指導部の先生に注意を受けたのです。ところがそれに対して「去年も私服の生徒がゐたのに注意しなかつたぢやないか」と烈しくくつてかかったのです。このやうな彼の問題行為に対して、学校として本人・両親を交へた教育相談がなされ、強く自重するやうに勧告がありました。そして、その教育相談があつた翌日またも授業中に先生とトラブルを起こし、ごみ箱を放り投げたため、遂に職員会議に於て退学勧告処分が決定されたのです。その日に指導部の先生と担任の先生が自主退学を勧めに行きましたが、結論は出なかつたやうです。その早朝に彼の両親から私に電話があり、薬をも掴む気持でなんとかならないでせうかと言はれた事には、本当に心が裂かれるやうな思ひがしました。その日の午後、いよいよ決心して退学の挨拶御礼に来られた両親

に対して私は申し訳ない気持ちで一杯でした。たゞ私にとって唯一の救ひは上野君がお世話になった先生方に御礼を述べ、すがすがしい態度で学校を去って行った事でした。

彼は現在運送会社の配車係の仕事をしてをりますが、夏休みの初めの陸上の試合に、彼はわざわざ会社から休みをもらって応援に来てくれました。ところがその時の彼の姿は実に生き生きとしてゐました。さうして彼は現在の心境を「学校で経験した事を大切に、来春、一から出直して定時制でもいいから高校だけは卒業します」と明るく語ってくれました。私は彼が退学処分に対して何一つ愚痴もこぼさず来春、一から出直しますと語ってくれたすがすがしい姿に心打たれました。その時彼は今もなほ私を信じてくれてゐると思ひました。さう思ふと私と彼との間に今から本当のつき合ひが始まったやうな気が致しました。話の途中で今さらのやうに陸上競技を通して養はれた氣骨と、その内面に隠された純情を感じました。今私は彼の今後を温かく見守り、相談相手として教師、生徒の關係を越えた一生のつき合ひをしていきたいと思つてをります。

明治天皇の御製に「教師」といふ御歌があります。拝誦してみます。



朝夕にまもり育つるをしへ子はうみの子のごとかなしかるらむ

「守り育つる」といふ言葉がありますが、その守るといふ言葉に私は親鳥が雛鳥を翼の中に身をもってはぐくんである姿を思ひ浮べる事ができます。「守り育つる」といふ言葉の中に、さはやかな力のこもった感じが致します。その愛情の強さといふものが教育の本質のやうに感じられるのです。下の句に「うみの子のごとかなしかるらむ」とありますが、教師は教へ子が自分が生んだ子供のやうに身にしみて可愛くてたまらないであらうと、教師の子供に対する愛情の切実さを思ひやられての、ありがたいお言葉と拝するのであります。

朝夕にまもり育つるをしへ子はうみの子のごとかなしかるらむ

私はこの御歌をくり返しくり返し味はひ、明治天皇が、その胸の中に描いてをられたさはやかで力のこもった教師の姿に少しでも近づくやう努力し、日々生徒の心に接していきたいと念願してをります。そして、同じ教師を目指してゐた今は亡き友の御霊も、私の至

らない歩みを見守ってくれてゐるやうに思へるのです。

## 臨床実習の中で思ったこと

昭和57年第27回「合宿教室」

笠 普一朗（九州大学医学部六年在学・25歳・九州大昭58卒）

私は現在医学部の六年生として外科、内科などさまざまな科で臨床実習を行なつてゐます。臨床実習といふのは、各科において入院患者さんを一人受け持ち、実際の医療の現場を体験するものです。まづ最初に、その中で私が出会った患者さんのことを話させていただきます。

その人は十九歳の女の子で大学生です。彼女の病氣は悪性リンパ腫といひ、リンパ組織といふ所の癌です。最近では治ることも多いのですが、彼女の場合は病氣が大変進んでをり、残念ながらあと一年生きることができないと判断されてゐました。もちろん彼女自身はそんなことは知りません。また毎朝毎朝、身の周りの物を持って面会に来られるお母さ

んも御存知ありません。只、お父さん一人が本当のことを知ってをられました。

その患者さんのカルテを読んでみた折、主治医が次の様に書き記してあるのを読み、私はお父さんの心が偲ばれて胸つまる思ひがしました。それはたった一行、「お父さん面会に来られ、元気にしてゐるのを見て安心して帰られる。」といふ言葉でした。普通カルテは医学的記録で、無味乾燥なデータが並んであるだけです。その中の突然の一行でした。ただ一人、娘の真の病を知るお父さんは、どんな気持で、何も知らぬ娘と話されたのか、そしてどんな気持で帰られたのか、そんなことが思はれてなりません。少なくともその日は元気でゐてくれた、それは「安心」と云へるかもしれませぬ。しかし、だからこそもっと生きてほしい、死ぬなんて信じられない、そんな思ひがこみあげてきたに違ひありません。しかもその事を誰にも語られず一人で堪へてをられるのです。そしてこの一文を書き記した医者も、お父さんの姿にそんな思ひを偲んだのではないでせうか。だからこそ、普通はデータばかりしか書かぬカルテに、そのことを書かずにをれぬ気持になったのだと思ひます。「元氣」「安心」と云ふにはあまりに辛いことですが、すべてを知る医者はさうとしか表現できなかったのでせう。

実際、患者さんの症状は一進一退を繰り返しながら、確実に悪化を辿ってをり、それにつれて主治医は病院のソファアに寝泊りすることが多くなってきたやうでした。また、私が患者さんの事に就いている質問しても、最初は丁寧な教へて下さってゐましたが、段々と辛さうに沈痛な表情でしか話せぬ様になつてゆかれました。特にその医者は一年先輩で、今年の春医者になつたばかりです。自分の患者さんが死に瀕するのは初めてで、なほさらの事と思はれました。

私は実習生ですので、主治医の邪魔にならぬやう当り触りのない事を患者さんと話しただけです。しかし、私も彼女の真の病氣を知つてゐます。彼女が私にいろいろと納得のゆかぬ点など質問する時など、本当のことを話したい思ひで一杯になりました。しかし、その心を一生懸命に押へて、どんな症状がいつどんな形で起こり、どう変はつて来たかを聞き、診察を行なひ、さらにカルテで検査データを調べてゆきました。そしてこれらの結果を一つ一つ合理的に説明づけてゆく作業を続けてゆくだけでした。いはば科学者がひとつの現象を見つめ、解析してゆくやうな作業です。勿論これは医学の基本だし大切な仕事です。しかし、私はこのやうな作業をくりかへしながら、非常にもどかしいおもひがしまし

た。ここで得られたデータをどんなに詳しく説明してあげても、それだけでは病氣と闘ふ勇気を奮ひおこすことはできません。先程お話しした医者やうに苦業を共にしようといふ姿勢をみせてこそ患者さんも家族の人々も一筋の光明を見出すことが出来るはずです。勿論データは必要です。しかしこのやうに医者が患者さんや家族と共感を分かちあへるその時にこそ、冷たい一つ一つのデータが生きたものになってくるのだと思ひます。ともすれば科学者になりがちな医者ですが、そこから一步踏み出させてくれるのは、そんな経験だと思はされました。私がカルテの一行の文章に心うたれたのも、お父さんと主治医の共感が偲ばれたからだと思つてゐます。

この合宿にも何度か来られた評論家、小林秀雄先生は『歴史と文学』の中で次の様に言つてをられます。

「歴史を貫く筋金は、僕等の愛惜の念といふものであつて、決して因果の鎖といふ様なものではない。」

先生がここで言はれる「愛惜の念」とは、自分にとってかけがへのないものが失はれて了つた、或は失はれてゆく、さういふ時に覚える悲痛な思ひだと思ひます。まさしく先程

のお父さんの気持ちそのままです。小林先生はこの文章の後で、子供に死なれた母親を例に引かれ、「母親は死んだ子供を単なる事実として知ってゐるから、その面かげをよみがへらすのではない。子供を愛してゐたからこそ、子供の死といふ事実が退引きならぬ確実なものとなるのだ。」と言ってをられます。先程も申しましたが、お父さんにまざまざと娘の死といふ事実が迫ってくるのは、娘を愛しむ情、すなはち「愛惜の念」があるからだと思ひます。又、主治医がカルテに一行書き記し、献身的な治療を行なへたのも、その心に共感したからです。

これ迄患者さんのことについてお話した事は皆さまは何の抵抗もなくお聞きいただけましたと思ひます。しかし、小林先生の文章を引用して、歴史といふ言葉が出て来た時には、戸惑はれた方が多かったのではないでせうか。歴史の問題と私が出会った患者さんの話にどんな関係があるのか、さう考へられたかもしれませぬ。しかし、私はこの二つは密接に関係してゐると思ひます。先程も申しましたやうに医者はさまざまのデータを組み立てて診断、治療を行なひます。しかし、それだけでは患者さんや家族はもちろぬ、医者自身にとつても何の力にもなりません。患者さんや家族の悲痛な思ひに共感してこそ、医者は力

を得る事ができるし、その姿に患者さんも勇気を奮ひおこすことができるのだと思ひます。歴史も同じことです。過去の人々が積み上げてきた事実を、恰度医者が患者さんの病気を科学的に扱へようとした同じ姿勢でのみ解明しようとしても、歴史の中に生きた人々と出会ふことはないでせう。私達は歴史事実といふと、何年に何があつて、それは前後のこの事実とどのやうにつながつてゐるのかといふ様に考へがちです。そしてこれを客観的と言つて大切にします。しかし、その事実の中でどんな人がどんな思ひで生きたのか、それをその人が遺した文章から偲んで知る。かうして歴史の中の人物と共に涙を流し、怒りそして喜ばなければならぬ。その時にこそ歴史上の事実はまざまざと私達に迫ってくるものだと思ひます。

私も大学一年の時この合宿に参加する迄は、歴史といつてもほとんど知りませんでした。自分とは無関係だと思つてゐました。しかし、この合宿で今上天皇の御歌に初めて接した時、私は歴史を自分の問題として考へはじめました。そのことについて若干お話申し上げませう。陛下は多くの御歌をよんでをられますが、私が出会つた御歌は、先の大東亞戦争の終戦時につくられた次の二首の御歌でした。拝誦させていただきます。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひくさとめけり身はいかならむとも  
身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

この御歌を教へて下さったのは私の班の班長さんでした。そしてかう言はれました。「ここでよまれてゐる民といふのは漠然とした国民ではない。僕達の両親であり、おぢいさん、おばあさんなんだ。」それまで国民といふ言葉に漠然としたイメージしか持たなかつた私は驚きました。もっと言へば、それまで自分が日本の国民と思つた事など殆んどなかつたのです。ところが陛下がおよみになってをられる「民をおもひて」の民とは、自分の肉親であり、自分自身の事なのだと思つたときに私は本当に驚きました。そして自分が日本の国民であるといふことを身にしみて感じました。

陛下の御心は、ただ「たふれゆく民」の事のみを思はれ、御自身をかへりみる余裕など微塵も感じられません。一首目の最後「身はいかならむとも」といふ御言葉が、そのまゝ二首目に「身はいかにも」と続けられてゐる。それだけに御心の強さが感じられます。繰り返し繰り返しまないではをられない強さと緊張が伝はってきます。陛下の御心



をお偲びする事など思ってみた事などなかった私は愕然としました。私は終戦の御聖断を下されたのは陛下だといふ事実は知ってゐましたが、その御聖断をお下しになるにあたって、どこに思ひ定められて行なはれたかは知りませんでした。しかしこの御歌にこめられた御心を知って、私のそれまでの片々とした知識などふつとばされて了った思ひでした。それまで私にとって終戦といふ事実は、大した事ではありませんでしたが、その時、終戦といふことが私自身にとって重大な意味をもつたものとして蘇ってきました。私はかういふ経験を通して最初にお話した患者さんの事と、歴史を自分の問題として考へる事は、全く同じことなのだ、人のいのちをいとほしみ、歴史をいとほしむことは全く同じなのだとしみじみ思ふのです。

私は来春卒業し、医者として第一線で働く毎日が待ってゐます。総合的な力を問はれる事と思ひます。医学の専門の勉強はもちろん、患者さんと苦楽を共にしようと努める心をさらに大切にしてゆきたいと思つてゐます。

## 新任校での体験から

昭和57年第27回「合宿教室」

竹下鉄郎

(宮崎県立日向高校教諭・29歳・熊本大昭53卒)

唯今御紹介にあづかりました宮崎県の日向高校に勤務してをります竹下でございます。教職に就きましてから五年目になります。日向高校に今年の四月に転勤しまして、その前は宮崎市にあります宮崎県立盲学校に四年間勤務してをりました。

盲学校は大学を卒業して初めての赴任校でありましてそこでは生物を主に教へてをりましたが、目の不自由な生徒達に生物を教へることは大変難しい仕事でありました。しかも生徒は目の見える教師にはなかなか心を開いてくれないと言はれてみました。注意をすることがあっても「先生には目の見えない僕らの気持は分るはずはない。」といふ風に頑になり心を閉ざしてしまひがちになるのです。

盲学校は宮崎に一校しかありませんのでほとんどの生徒は寄宿舎に入っております。私はその寄宿舎の舎監を四年間してをりました。

着任早々のことですが、寄宿舎の極りを破って自習時間に四、五人の生徒が一室に集まりお茶を飲みながら騒いでゐました。巡回中にそれを見つけ注意しましたところ、年長の生徒が「自分達の気持は分るはずがない。」と言って注意に従はうとはしません。この時は単に規則違反といふことだけでなく、生徒達の荒んだ気持をどうにかしなければいけないと思ひました。生徒の中には私より年長の者もをり、拳を握る者さへありました。

私は彼らに「君らの気持が私に分つてゐるとは言はない。それは私は目が見えるからだ。でも君らの気持に近づかうとはしてゐる。そのことは分つてほしい。もし私がたった今失明したとすれば、これから先生きて行くのか死んでしまふのか真剣に考へるだらう。失明して生きて行くといふことが大変な労苦を背負ふことになるのは当然なことであつて、私は生きることを止めてしまふかもしれない。諸君もきつとそんなことを考へたことがあると思ふ。しかし今君らがこの学校で勉強をしてゐるといふことは、たとへどの様な苦しみがあらうとも、自分はきつと立派に生きてやると心に決めたからではないのか。規則を守らず、年下の教師から注意された位で、そんなに我慢ができない様ではないんじゃないか。私には君らの行末が思ひやられる。」といふ様なことを言ひました。最初は

横柄な態度だった生徒もよく話を聞いてくれました。中には泣いてゐる者もいました。

それ以来次第に生徒も心を開いてくれ、色々なことを相談してくれる様になり、余計な気遣ひもせず付き合ふことができる様になりました。生徒達との四年間は忙しい毎日でしたが、私には想ひ出深い充実した生活でありました。

その様なこととは別にこの盲学校での四年間に、私は教師として真剣に取り組まねばならない大きな問題にぶつかってゐました。それは着任早々の初日に、私の目の前に投げ出されて来たのです。新しく来た職員の紹介が済むと早速、前日からの継統審議といふことで職員会議がもたれました。

会議では入学式を目前にして「君ヶ代斉唱をするか、しないか。」が議題でした。様々な意見が出されましたが、いづれも反対意見ばかりで「君ヶ代は軍国主義に直結する。」とか「民主主義と相容れない。」とか「全体主義につながる。」といったものばかりで誰一人として賛成意見を言ふ人はをりません。私は「君ヶ代」に対しては全く違和感を持ってをりませんでしたので、新任早々ではありましたが、思ひ切って手を上げ「自分はこれ迄、自然な気持で国歌を歌って来た。今回も是非歌ふことにして戴きたい。」といふ旨を

発言しました。すると司会者の了解もなく数人の教師が立ち上り「あなたは本校のこれ迄の経過を知らないのだから勝手な発言は控へた方がよい」とか「公教育の場で主観的な発言はやめて客観的に述べよ」とかの色々な意見が私に向けて投げかけられました。

職員会議は一変して異様な雰囲気となり、私は始めて自分の発言の重大さに気付きました。私はそれらの意見の一つ一つについて私の率直な思ひを述べましたが、論議は仲々結着せず、結局校長命令で「君ヶ代」を斉唱するといふことになりました。それ以来今年の四月に転勤する迄、入学式、卒業式、体育祭等、国旗国歌が議題に上る度に互ひに噛み合ふことのない議論が繰り返されたのでした。

この様な状況になるであらうといふことは学生時代に本で読んだり、聞いたりしたこと、ある程度の予測はしてをりましたが、自分自身が現実にその場に立たされることによつて私には最早この問題が他人事として済まされることではなくなつて来た訳です。

私の学生時代は学園紛争そのものは下火になつてをりましたが、学内で活動する学生はまだ残つてをりましたし、私の友だちにも何人かをりました。彼らとの話の中でどうしても納得できなかったことは、国家Ⅱ権力Ⅱ悪といふ考へ方で色々な物事をその図式で割り

切つてしまふことでした。

この様な疑問について、私はこの合宿を機縁に知り合った先輩や友達と一緒に勉強を続けて来た訳ですが、やはり教育現場においても国家に対しては同様な捉へ方しかされてゐないといふことが判りました。

国家⇨権力といふ見方は、果して国家に対する健全な把握の仕方でしょうか。現在は祖国とか国とかいふことばを使ふことさへ憚られる様な現状になってをりますが、それはこの様な捉へ方しかできなくなつてしまつたからだと思ひますし、この見方が自分の国の国歌を歌ふことについても賛成か反対かといふ次元で論じ合ふことになつてしまつてゐる原因だと思ひます。私には賛成か反対かと議論すること自体が正に不自然なことだと思はれなりません。

この様な窮屈な状況の中で果して柔軟な物の見方ができるでせうか。この様な状況から早く脱却してほしいものだと思ひます。

また私が「君ヶ代」問題について思ひますことは、現在の学校教育の中で、学校行事における国歌の斉唱は、児童生徒にとって自分の祖国と関り合ひをもつ唯一の接点であると

いふことです。私自身の経験からも小学校、中学校、高校時代に国歌を斉唱し、国旗を仰ぐことにより、国といふものを、また自分が国民の一人であるといふことを少しづつでも肌身に感じとって来たのではないかと思ひます。

私は国に対する思ひ、愛国心などといったものは健全な精神生活の上では自然に育まれて行くものだと考へます。国家を権力としてしか見ることでできない硬直した考へ方が、子供達の気持を故意にねぢ曲げてしまひさへしなければ自然に身について行くものではないかと思ふのです。

教育現場では教師が国歌斉唱の際に着席したままで口笛を吹いたり、隣の者と話しをしたりして嘯いてゐたり、酷いものになりますと生徒の手から国旗を奪ひ取りズタズタに引き裂くといふことが実際に起つてゐますが、この様な異常とも思へる行為が、生徒達に良い影響を与へるはずがありません。

自分の生れ育つた国に愛着をもち、その歴史に愛情を抱き深い同胞意識をもつて互ひに交はるといふことがどれ程人の心を豊かにするか分かりません。

さうなることによつて現在教育界で取り沙汰されてゐる非行とか校内暴力とかいった様

々な多くの問題が正常化されて行くのではないでせうか。

また私が接して参りましたあの不遇な運命を負った盲学校の生徒達にしましても、自分の国に愛情と誇りをもち、人と人との広いつながりの中に生きてゐることが確信できたならばどれ程心の支へになることか、本当に計り知れないものがあると思ひます。

初めは誰も「君ヶ代」を歌はうといふ気持のある先生はゐないのかと私もショックを受けましたが、色々な方と話しをして行く中に「私も歌ふべきだと思つてゐた」といふ先生方が意外に多くをられることが分りました。また「あなたの意見を聞いて久しぶりに『君ヶ代』のことですっきりした気持になりました。頑張つて下さい。」と応援して下さいる先生もをられました。ここ一、二年の職員会議では実際に歌はうと発言する先生方も増えて来ました。そのことは私の大きな自信にもなつてをりますし、また今の学校でも心の支へになつてゐます。

私にとりまして、国家についての健全な思ひを生徒達の中に培つて行くことは、生物を教へて行くといふ専門科目の指導と同様に重要な課題として取り組まねばならないと考へてをります。



国歌、国旗の問題は一朝一夕に解決できるものではありませんが、今後とも粘り強く、一歩一歩確実に歩んで行きたいと思っております。

## 戦後の国語改革について

昭和58年第28回「合宿教室」

藤井 貢 （榊講談社校閲第四部・33歳・早稲田大学昭48卒）

ただいまご紹介いただきました藤井でございます。私は講談社に入社以来十年間ずっと、おもに子供向けの雑誌・書籍を校正してまわりました。いふまでもなく校正といふ仕事は、原稿と照らし合せて正しい印刷物にするために赤字を入れてゆく作業ですが、一字でも原稿と違ふ文字が印刷されて世に出ることは、その本を買っていただいた読者にご迷惑をかけるばかりでなく、ひいては会社が信用を失ふことにつながります。しかし、校正といふのはそれだけでなく本が出来上がる前に「最初の読者」として文章を検討することも校正者の大切な仕事なのです。具体的にいひますと、この文章はをかしいのではないかと

常に思ひながら、辞書や百科辞典などで調べる、いはば文章のあらさがしをしながら、より質の高い本をつくるといふ役割もなつてゐるのです。かうした仕事を通じて、現在私が最も痛感してゐますことは、戦後の国語政策および国語教育のあり方がいかに重大な問題をはらんでゐるか、といふことです。

最近、昭和五十七年十月に「当用漢字」を改めた「常用漢字」が制定されて、それまではかな書きが原則であつた「皿」「泥」「繩」など百四字の漢字が新たに、いはば「市民権」を与へられて大つびらに使へることになりました。このやうに時の政府の意向によつて国語の一部が一朝にして変はるのは、まさに「国語」が「政策」によつて左右されることを示してゐます。このやうなことは戦前までは全く考へられなかつたことでした。ところが戦後にはそれが当り前といふ風潮が生れてしまひました。いふまでもなく戦後の「国語政策」の基本は、「当用漢字（現在は常用漢字）」と、「現代かなづかい」ですが、これも昭和二十一年十一月に「内閣告示」として公布されてゐます。ここでいふ「内閣告示」とは、公務員が公文書を作成するときに守るべき規程を内閣総理大臣が申し渡すといふことなのであつて、必ずしも国民すべてが守らなければならぬ規則ではありません。

しかし、新聞社・出版社がそれにさからったのでは商売が成り立たないといふ次第で、私  
の会社でも「国語政策」にしばらくは仕事をしてゐるのが現状です。

また、小学校の教育段階では、ひらがな・かたかなは何学年で教へるべきか、さらに  
「教育漢字」といって、漢字一字一字についてどの学年で教へるべきかといふことを「文  
部省学習指導要領」に定めてをり、教科書検定の規準としてゐます。かうして「国語教  
育」のあり方は「国語政策」と深くかかはつてゐるのです。

もちろん私も戦後生れですので、大学生の皆様方と同じやうに「現代かなづかい」と  
「当用漢字」にもとづく国語教育を受けた一人です。従つて、この国民文化研究会の合宿  
教室に参加するまでは、戦後の「国語政策」について、それを疑問に思ったことすらあり  
ませんでした。ところが友達と黒上先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」や吉田  
松陰先生、小林秀雄先生のご著書を読まうとしますと、今までの「現代かなづかい」「当  
用漢字」では到底読むことができず、たえず辞書を引かないと口に出して読むことさへか  
なはぬ有様でした。

私たち戦後世代の者は漱石や鷗外も原文では読めないと思はれてゐますが、そのやうな

明治の文学もさることながら「古事記」「万葉集」をはじめ、日本民族の遺した数々の古典の文章を読み、祖先の生き方に学ぶことに力を尽さなければ、私たちのあとに続く世代にはますます日本人の生き方そのものがわからなくなってくる事態が待ってゐるやうに思ひます。

さて、私が大学時代、戦後の国語政策に疑問をもち、そのことについて勉強する直接のきっかけとなりましたのは、文芸評論家の福田恆存先生が書かれた「私の國語教室」（新潮文庫・中公文庫）といふ本との出会いからです。この本を読むうちに、私も福田先生を見習って、「現代かなづかい」をやめて、いはゆる「歴史的かなづかひ」を使って文章を書くことを始めましたところ、大まかな原則を覚えまし、辞書を引けば、案外に難しいことではありませんでした。

かうして卒業後、会社に入り、今の部署に配属が決ったころ、私は上役に『現代かなづかい』と『当用漢字』はよくないし、まだ三十年たらずの決まりなので、千数百年にもわたるそれ以前の本来のかたちに戻るべきではないでせうか」と尋ねたことがあります。上役は「それはないよ、藤井君」と即座にいはれ、会話は途切れましたが、今にして思へ

ば、出版社の校正者が「現代かなづかい」や「当用漢字」を無視することは仕事を放棄することであり、新入社員だったからこそ許された質問だったやうです。が、このやうにして会社では厳密に「現代かなづかい」や「当用漢字」を使はねばならないといふことはわかりましたが、同時に、「この職場にゐる間、戦後の国語政策をテーマにもっと勉強してみよう」と心に決めました。

ところで、「当用漢字」のよくない点は、その内容の是非よりもまづ漢字を使ふことに制限を加へたことです。幕末・明治から戦前までの国語問題の歴史をふりかへてみますと、漢字をやめて国語をローマ字にしようといふローマ字論や、かなだけにしようとするかな文字論や、子供の漢字学習の負担を軽くしようとする漢字制限論などが各方面から、手を替へ品を替へて持ち出されてゐます。しかしながら、もしもかな文字あるいはローマ字しか使へないとしたら大変なことになるのは一寸考へてみればすぐわかることです。例へば「うみ」「umi」といってもそれが漢字の「海」「膿」「生（産）み」のどれをさすのか全くわからないし、語句の切れめがわかりにくい文章になることは容易に想像されます。言ひ換へれば、漢字とかな文字が組み合されてゐる方がはるかに速く正確に読むことが出来

るのです。すなはち意味を受け持つ漢字と読みを受け持つかな文字を交へた「漢字かな交り文」といふ、先祖が築き上げた国語の姿こそ、私達が受け継ぐべき貴い伝統であり、絶やすことなく持続していくべき文化なのです。

そもそも「現代かなづかい」といふものは、昨日の合宿導入講義で福岡県立水産高校の占部賢志先生が話されましたやうに、「現代語音」にもとづくかなづかひであり、現代人が発音する通りに書かうとするものですが、そのために大変な混乱が起つてゐるのです。例へばよく使はれる「合ふ」といふ動詞をとり上げてみますと、「現代かなづかい」以前にはその活用は「合ハ(ズ)」「合ヒ(タリ)」といふやうにハ行四段ですが、「現代かなづかい」では「合ワ(ナイ)」「合オ(ウ)」「合イ(マス)、合ッ(タ)」「合ウ」「合ウ(時)」「合エ(バ)」「合エ」と、ア行とワ行にまたがる五段活用になります。本来ハ行一行でをさまつてゐた活用語尾が、「現代かなづかい」で発音どほりに書くことに決めた結果、ア行・ワ行二行に分かれ、「合ワ(ナイ)」「合オ(ウ)」と二種類の未然形が併存するといふ不合理・複雑さが生じたのです。ところが「現代かなづかい」はすべて現代語音通りであるかといへばさうではなく助詞の「は」「へ」「を」だけは、「わ」「え」「お」と発音どほりには書

いてはいけないのです。ところがこの助詞「は」「へ」「を」の例外は、小学校低学年の国語教育では、生徒が覚え、身につけるまで、例文を示しながら繰り返して教へてゐるので、もしそれが可能であるなら、動詞の「合う」「教える」は、「合ふ」「教ふ」と書くこと教へることも可能ではないでせうか。そのほか、「現代かなづかい」では着物を入れる行李は「こうり」と書き、水が凍った氷は「こおり」で、数字の十は「とお」と書けといふのです。このやうなオ列の長音「お」と「う」の使ひ分けが何故生じたかといへばそれは元来「歴史的かなづかひ」で「かうり」「こおり」「とを」と書いてゐたのでそれを改めたためにこのやうな表現をするのだと説明してゐるのです。このことは「歴史かなづかい」を知らなければ「現代かなづかい」を使ひこなせないといふことになる。実に奇妙なことが行はれてゐるのです。

最後に、国語審議会漢字部会で国語は「漢字かな交り文」であることを徹底して主張され、漢字を制限した「当用漢字」から、漢字使用の目安の「常用漢字」に改めたときの推進役を果されました、癌研究の権威であられた故・吉田富三博士の「現代かなづかい」批判の文章を引用させていただきます、私の発表のしめくくりといたします。

「現代語を現代語音で表記するといふ新仮名は、仮名遣ひの歴史と伝統はこれを無視するといふ宣言に等しい……（略）……今『現代』と称するものが、伝統を破壊して、法を作る者は現代だとするなら、『次の現代』にもまた、同じく法を作る権利があることにならう。かうして日本語の未来は破壊の連続となり、ここに最も憂ふべき『失はれてゆく日本語』があることになると思ふ。言葉の問題はそのまゝ精神の問題である。伝統を失ふことは道を失ふことであり、言葉の無法は精神の無法であることを思ふべきである。」（読売新聞社刊「随想集 生命と言葉」より）

## 桑原暁一先生のこと

昭和59年第29回「合宿教室」

絹田洋一（大阪府立東寝屋川高校教諭・30歳・大阪大昭55卒）

只今ご紹介いただきました絹田です。現在大阪の高校で社会科の教師をしてをります。学校ではよく生徒に「何故教師になったのですか。」と聞かれます。私の場合、好きな歴



史をずっと学んでいきたい。そして生徒にも歴史の面白さ、奥深さを知って貰いたいといふ気持ちからでしたが、この様に考へ始めたのは、大学二年の頃からでした。高校では漠然と人間について知りたいと考へ、それでは心理学をといふ事で、大阪大学の人間科学部といふところに入りましたが、心理学による人間へのアプローチは、実験、統計処理といった、あくまで科学的手続きを重んずるものでしたから、厳密ではあっても表面的な人間の捉へ方で終はって了ふといふ物足りなさを感じることがありました。そして次第に、歴史を勉強したいと思ふ様になりました。歴史を学ぶ事によって、つまり現実の生を苦悩し、精一杯生きた人間の姿を見つめる事によって、自分自身の生き方にも直接関はって来る様な形で、より深く人間を理解出来るのではないかと考へたのです。かうして私は、専門課程に上る時に人間科学部から文学部に転部して日本史を専攻し、同時に教職課程も取り始めました。

このやうに私が歴史にひかれ、教職を目指す様になったのには、二つの大きな契機がありました。それはこの合宿教室を機縁とした或る高校教師との出会ひでした。今日は皆さんにその一教師の事をお話ししたいと思ひます。

その先生は桑原暁一といふ方で、東京の千歳高校で二十年間教鞭を執られ、その間この合宿教室の運営にも携はって来られました。実は私は桑原先生にお会ひしたことはありません。初めてこの合宿教室に参加した時には、桑原先生はもう亡くなってをられましたから、桑原先生を知ったのは、その御著書を通じてでした。或る先輩のお宅に伺った時、桑原先生の『国史の地熱』といふ本を目にしました。桑原暁一といふ名前は聞いた事がありませんでしたが、取り出して目次を見ますと、楠木正成と聖徳太子に関する論考が収められてみました。楠木正成は非常に好きな人物の一人でしたので、その本を借りて帰り、その本を読み始めて間もなく、私は言ひ様のない感動におそはれました。何か非常に純粹で美しいものが文章の底にたたへられてゐて、そこから心にしみる様な透きとほったすがすがしい言葉が湧き出て来る。そんな感じが致しました。これまで本を読んで来て、一つの言葉がこれ程自分の心の中にしっとりとしみ込んで来る様に感じたのは、初めての事でした。自分が求めてゐたのはこれだ、読み進み乍ら何度もそんな気持ちで湧いて来て、嬉しくて仕方がありませんでした。

この本の中で、特に心をひきつけられた文章の一節をご紹介します。「小歌

うたひて」と題された論考で、南北の争乱を描いた古典『太平記』の中に、「小歌うたひて」といふ言葉が何度か出て来るのに目を留められて、それについて書かれたものです。南北朝の争乱は次第に南朝方が劣勢になり、楠木正成は湊川で戦死、その子正行も父の遺志を継いで活躍しますが、四条畷の合戦で奮戦の後、力尽きて一族郎党と共に自害します。ところが、その中で和田新兵衛行忠といふ男だけは、どういふ訳か、皆が自害したにも拘らず、一人落ち延びていきます。しかも敵の首を一つ手に提げ、小歌を口ずさみ乍ら歩いて行くのです。これを見た敵方の安保肥前守忠実といふ武将が一騎馳せ寄って、「一人落ちるとは情けない。返しなされ、見参せん」と呼びかけます。すると新兵衛はにっこりと笑ひ、「返すに難いことか」と言つて刀を振りかざし、走りかかります。忠実は一騎打ちではかなはじと思つたのか、馬の首を返す。忠実が止まれば新兵衛は落ちてゆく。すると又忠実が追ひかける。追へば返し、返せば止まり、さうかうして陽も落ちかけた頃、忠実方の侍が加勢にやつて来て矢を射かけ、遂に新兵衛は首を取られる。かういふ話が太平記の中にあり、それがまづ引用されてゐます。そして、この話を讀まれた桑原先生の感想Ⅱ「あとがき」が続きます。

「少し調べたいことがあって、久しぶりに太平記を取り出し、あちこち拾い読みしているうちに、『小歌うたひて』というのに心ひかれて、そのことばの出てくる右の三箇所を取り出してみた。それは、わざと平静を装う、ということではむろんあるまい。さりとして相手を呑んでかかっている、ということだけでもなさそうである。心中何のわだかまりもなく、自然に口に出たもののように思われる。死はもとより辞せず、さりとして生を恥ずることもない。死も生も、何も彼も、すべてを通りぬけた、いわば透明な虚無の声である。しかし、云うまでもなく、これはぼくなどの実感をはるかに超えたもので、ただおぼろげの感触である。」

太平記の中の「小歌うたひて」といふ一見何でもない言葉から、これ程までに深く読み取る事が出来る桑原先生の感性の鋭さに驚くと共に、この様な歴史の味はひ方がある事に気付かされました。最後の、

「死も生も、何も彼も、すべてを通りぬけた、いわば透明な虚無の声である。」  
といふ一文は、日本人の死生観の深淵を簡潔に表現し尽くした、心にしみわたる様な言葉ではないでせうか。そして、

「しかし、云うまでもなく、これはぼくなどの実感をはるかに超えたもので、ただおぼろげの感触である。」

といふところは、全く肩を張らない、むしろ非常に控へ目な言葉が選ばれてゐて、謙虚な人柄が偲ばれ、そこにも強くひかれるものがありました。

もう一つ、「自他を分かつた」と題された、聖徳太子に関する文章の一節をご紹介します。『三経義疏』は、法華経、維摩経、勝鬘経といふ三つの経典について聖徳太子が注釈されたものですが、この文章はその義疏の中の或る言葉についての考察です。

維摩経に、

「心淨く歡喜して賢聖に近づく」

といふ一節があります。仏の教へにふれる事によって人の心は清らかになり、そして心の中に喜びが湧き出て来て、自然に賢聖に近づいていく事が出来るといふ意味だと思はれますが、これを聖徳太子は、

「人をして心淨く和悦せしめ、愚に近づけば即ち憂苦を生ず」

と注釈されてゐます。経文に「賢聖に近づく」とあるのを、太子は「愚に近づけば即ち憂

苦を生ず」と解釈されてゐるのです。「賢聖」と「愚」といふ事とは、普通に考へると全く逆の意味です。何故太子はこの様な解釈をなされてゐるのか、桑原先生はそこに疑問を持たれ、そして次の様に考へられたといふのです。

「賢聖に近づく、と云うと、愚者とは手を切つて、自分だけ別の途を往く、と云うことになりかねない。それでは自他を分かつことになる。そのことは太子のもっとも戒められたことである。賢聖と愚者とは別々のものではない。おのれの愚を自覚せるものがすなわち賢聖である。われこそ賢聖なりと自任するほど愚かなことはない。したがって愚に近づく<sup>と</sup>心がいたむ、と云うのは、その愚は他人事とは思われぬ、と云うことであり、彼我共に、愚者である、との自覚に促されて、共に、賢聖に近づく、と云うことでなければならぬ。」

また次の様にも言つてをられます。

「愚はおのれの外にあるものではなく、おのれの内なる愚を愚とすること、そのことが実は賢聖に近づくことにほかならない。ここにほくは経文注釈の筆を取りながらも、たえずおのれの内面に向けられる太子の目なさしを感じる。」

私はこの文章を読み、非常に考へさせられました。私は劣等感に悩まされる事がありま

すし、逆に優越感を覚える事もあります。劣等感にさいなまれるのは気分の悪いものです、それ以上に、例へば友人に対して優越感を感じてゐる自分に気づいた時には、そんな自分が嫌になります。無意識に人と自分とを比較して、どちらが上か下か、優劣、賢愚を判別してゐるのです。又人と対立した場合でも、やはり無意識に相手が悪い、相手を愚かと思つて疑はないのです。この様な心の働かせ方が、これまでどれ程人との心の通ひ合ひを妨げてゐたかと思はざるを得ませんでした。自分の心をじつと見据ゑれば、その愚かさに気付かされ、そして人も自分も共に凡夫である事が痛感されて来るに違ひない。そこから他者を受け入れる事が出来る広やかな心、和して共に生きようといふ姿勢が生まれて来るのではないでせうか。

さて、この文章の最後にあります「たえずおのれの内面に向けられる太子の目なごしを感ずる」といふ言葉を見てをりますと、この目なごしはそのまま桑原先生の目なごしである様にも思はれて来ます。聖徳太子を敬慕され、太子の心を心として生きようとされた桑原先生の中に、聖徳太子の精神はそのいのちを甦らせた、そんな気が致しました。

最後に桑原先生の人柄をもの語るお話を少し致したいと思ひます。先生は明治四十四年

にお生まれになりました。家は貧しく、一高在学中は学資を稼ぐために、夜お母さんと屋台を引いてラーメン等売って歩かれたさうです。金が無いため大学を出るまで自分で買はれた本は辞書だけだったといふ事ですが、図書館に通はれ、文学、歴史、哲学、経済、芸術等あらゆる分野において一級の学識を持ってをられたと友人の方から伺ひました。

そして一高、東大といふエリートコースをたどられましたが、出世栄達は一向顧みられず、高校の一教師としてその仕事に打ち込まれ、昭和四十八年にガンで亡くなられました。六十一歳でした。

聖徳太子を敬慕されるあたたかい人柄と、底知れぬ学識を持たれた桑原先生は、学校でも生徒に慕はれ、尊敬を集めてをられた様です。文化祭の時には、或るクラスで「桑原先生一代記」といふ、先生自身をテーマにした展示が催され、先生の行きつけの店の好きな酒の肴まで調べてあったさうです。最後の授業の話はとりわけ印象的でした。授業の後、数人の生徒がやって来て、最後に先生の話をやっくり聞きたいと言って来ました。放課後先生が約束の喫茶店に行かれると、店は立つ所もない程生徒で一杯で、驚かれたといふ事です。又別のクラスでは、先生が教室に入られると、教壇の上に一升びんと紙コップ、お



つまみまで置いてあったさうです。先生はそれをご覧になり、「いただくよ」と言はれて口で栓を抜き、前列の女子生徒に酒をつがせて一気にぐいっと飲み干されました。その間教室は静まり返り、先生が酒を飲んでくれるかと心配しながら見守ってゐたのですが、ぐっと飲み干されるのを見て、あちこちの男子生徒の間から「いいなあ、いいなあ」といふ声もれてゐたさうです。先生はすぐに授業を始めましたが、酔ひがまはって来て次第にろれつが回らなくなり、しゃべれなくなつて、「皆が卒業したら一緒に酒を飲まう。」と言つて授業を打ち切られたさうです。後にその友人の方に、「あの時の酒ほどうまい酒はなかつた。」ともらされたといふ事です。

私は友人の方からお話を聞き乍ら、その最後の授業の教室の中をゐて、先生が酒を飲み干されるのを目の前で見てゐる様な気がしました。御著書を通じて知つた桑原先生は、想像した通りの、或はそれ以上にすばらしい方だった―私は感激し、熱いものがこみ上げて来ました。以来桑原先生は私の心の支へであり、敬慕してやまない師であります。

歴史の面白さ、奥深さ、そして人間としてどの様な心の働かせ方をしていけばよいのかも、桑原先生から多く教へていただいた様に思ひます。到底及ぶところではありません

が、桑原先生を目標に現在の仕事に打ち込んでまゐりたいと思ひます。

## 硫黄島で思ったこと

昭和59年第29回「合宿教室」

山根 清

(防衛施設庁横浜防衛施設局勤務・30歳・九州大昭53卒)

只今、御紹介戴きました山根です。現在、横浜防衛施設局に勤務してをります。

防衛庁に入りましてから、自衛隊や在日米軍の基地の整備事業の仕事を行ってまゐりましたが、今からお話いたしますことは、二年前の九月頃、私が硫黄島といふ島に参ることがありましたがその時の体験です。

硫黄島といひますのは、東京より南に千二百五十キロメートル先にある小笠原諸島の中の一つの島のことです。面積二十平方キロメートルで、半日もあれば一周出来る小さな島ですが、この島は、サイパン島と東京の丁度中間にあり、飛行機が離着陸出来る唯一の島といふ戦略的価値のために、大東亜戦争末期の昭和二十年二月から三月迄、日米合はせて

四万九千人に及ぶ死傷者を出した激戦地として有名です。現在は、海上自衛隊の航空基地分遣隊が置かれてありますが、私はその滑走路工事の検査の目的で、役所の人達と一緒に参りました。

島の名前から想像されます様に、この島は活火山で、現在も隆起現象を続け、水蒸気や硫黄を出してをります。台湾の北部と同じ緯度にあるこの亜熱帯の島には、川も湧き水も無く、今でも滑走路に降った雨水を貯へ飲料水としてゐるといふ有様です。

昭和二十年当時、米軍は圧倒的な物量を誇り、制空権、制海権を有してをりました。それに対して、この島での日本軍の最高指揮官、小笠原兵团長栗林忠道中将は島全体を要塞化するやうに命令され、その結果全長十八キロメートルに及ぶ地下壕が、地下十乃至十五メートルの所に、網の目の様に設けられたといふことです。今でも壕の一部はその正確な位置が分からず、工事の時にも新しく壕が見付かることもあり、さういふ際には、白骨化した遺体や遺品が一緒に出て来ることも度々ださうです。言はば、島全体が四十年近く経った現在も戦士達の眠れるお墓となつてゐる、さういふ島です。

私達は、島に着いて挨拶を済ませた後、直ぐに天山てんざんといふ所にあります慰霊碑に参りま

した。ここは島の東端部で、日本軍の最後の拠点となった丘です。お酒や本土より持って参りました水をお供へし、黙禱を捧げました。水を持ってゆきましたのは、戦争の時は本当に水が無く、ここで亡くなられた兵隊さんの多くがおいしい水を飲みたいと思ひながら斃れてゆかれた、さういふことを聞いてみましたので、壘に入れて持って行ったのです。黙禱の後、この丘の下にあります海軍天山壕といふ地下壕に入ることになりました。

私達は、ヘルメットを被り、ライトを持って入りましたが、壕の中は真暗で、頭を天井にぶつけない様身を屈めて進まねばなりません。中で地下壕は幾つかに別れてゐるのですが、迷はぬ様に紐が地面に張ってあり、それを頼りに進んでまゐりました。先程申しました様に、この島は活火山で、従って地下壕内は地熱により大変熱く、五十度程度の温度がありました。全身から汗が吹き出てサウナにでも入った様でした。

後から聞いた話では、これらの地下壕を掘る時は、硫黄や一酸化炭素に備へて防毒マスクを被り、或る地区では兵隊さんが五分か十分毎に交代し作業を続けて行ったといふことでした。しかも、それらの作業は全て人力であったといふことでした。大変な工事であつたらうと思ひます。

熱気の籠る真暗な地下壕を進むことは、はっきり申しまして余り気持の良いものではありません。本当に怖いと思ひました。私達は地下壕の中を唯進むだけですが、余りの熱さに最後迄進むことは出来ず途中から引き返しました。

その夜、仕事を終へて宿舎に戻りましてからも、昼間のことが余りに生々しく、中々寝付かれませんでした。その夜は南国特有のスクールも降り、比較的涼しかったのですが、この島で戦ひ斃れてゆかれた人達のことを思ふとやはり眠れません。その時、自分が思つたことを中々一言で言ひ表はすことは出来ませんが、本当に胸が締め付けられるやうな思ひがしました。これは言葉の上のことではなく、何か自分の胸を締め付ける様な物理的な力をすら感じました。夜が明け、外が白んでやっと我に帰り、いつしか眠りについてをりました。支援も、弾薬も、水の補給も無く、この様な苛酷な条件の下で、斯く迄人間が戦ひ得るのだといふ動かし難い事実<sup>に</sup>圧倒されたのです。

昭和二十年の三月十七日、栗林中将が最後に本土に宛てて出された訣別を告げる電文は次の様なものです。

「戦局最後ノ関頭ニ直面セリ 敵来攻以来麾下将兵ノ敢闘ハ真ニ鬼神ヲ哭シムルモノア

リ、特ニ想像ヲ越エタル物量的優勢ヲ以テスル陸海空ヨリノ攻撃ニ対シ宛然徒手空拳ヲ以テ克ク健闘ヲ続ケタルハ小職自ラ聊カ悦ビトスル所ナリ（中略）今ヤ彈丸尽キ水涸レ全員反撃シ最後ノ敢闘ヲ行ハントスルニ方リ熟々皇恩ヲ思ヒ粉骨碎身モ亦悔イズ（後略）」

敵の「想像ヲ越エタル物量的優勢」とは、具体的には、米軍が上陸以來島に撃ち込んだ砲弾の数、艦船から二十九万発、海兵隊から四十五万発、さらに延四千機に及ぶ航空機からの爆撃を意味します。総兵員も、日本軍約二万人に対し六万一千人を投入してをりま

す。

この圧倒的優勢な敵軍に対し、日本軍二万人は最後の最後迄敢闘します。そして、この硫黄島の戦ひは、大東亜戦争に於て、米軍が攻勢に立つてより、米軍の被害の方が日本軍のそれを上回った唯一の戦ひであったといふことでした。その一月に亘る健闘を、栗林中将は「聊カ」と控へ目に述べてはをられますが、最高司令官として本當に満足されてゐたのだと思ひます。さらに、この部下将兵の敢闘を「真ニ鬼神ヲ哭シムルモノアリ」と述べてをられます。護国の鬼神をも哭かしめるやうな戦ひ振りであったと述べてをられるのです。私は壕の中に入ったただけですが、ここでの戦ひは通常の間業でなかつたらうことは

実感出来ました。

これは後で知ったことですが、この戦ひの前年昭和十九年八月、天皇陛下は、小笠原兵団が水不足に悩まされながら日夜防備増強に励んでゐることに憂慮され、激励のお言葉を賜はつてゐます。さらに、この電文の出された十日前の昭和二十年三月七日、陛下は硫黄島の戦況をお聞きになり、孤軍奮闘して敵を撃破してゐる兵团に対し、「深く満足に思ふ」旨のお言葉も賜はつてゐます。そして、これらのお言葉は栗林中将以下硫黄島の日本軍将兵全てに伝はつてゐます。電文の中の「熟々皇恩ヲ思ヒ粉骨碎身モ亦悔イズ」といふ言葉には、陛下のお言葉に対しての感動と決意が込められてゐると私は思ひます。

この電文の最後に、和歌が三首載せてありましたが、その中の一首は次の歌です。

国のため重きつとめを果し得て矢弾尽き果て散るぞ悲しき

この歌をよみますと、最後の「悲しき」といふ言葉に私は強く心をひかれます。硫黄島といふ、国土防衛上の要衝を確保するといふ「重きつとめ」をつひに果すことが出来ず、弾も水も尽き果てて死んでゆくのが悲しいといふ意味でせう。しかし、その悲しみは自分

の肉体の死のみに止ってはゐないでせう。この歌をよみますと、人智の及ぶ限りのことは尽して、何か大きなものに帰ってゆく、さういふ作者の心の動きすら感ぜられます。本当に悲しいとき、人は自分といふものをすら忘れてしまふのではないでせうか。その「悲しき」思ひが、きつと鬼神をも哭かしたと思ひます。この歌を詠まれた後、栗林中将は自ら陣頭に立ち、部下将兵とともに「天皇陛下万歳」と唱へ、将官でありながら突撃されたといふことです。

この様な奮戦にも拘らず、島は米軍の占拠するところとなり、この島より数多くのB-29が飛び立ち、五箇月後の昭和二十年八月十五日、日本は敗戦を迎えます。さうして、敗戦によって多くの変革が起きたことも事実です。私もいはゆる戦後生まれで、戦争を實際に体験した者ではありません。しかし、自らを顧みず、矢弾尽き果てる迄祖国のことを思ひ戦ってゆかれた人達の残された「悲しき」といふ痛切の思ひが私の心を打つのです。捉へて離さなかつたのです。

以上の話は、私が偶々硫黄島といふ島に参ることがあった、その時の体験です。しかし、私にとって尋常の体験でなくどうしても忘れられないものだったので。また、硫黄



島のことだけでなく、私達の先輩や祖先達の残された言葉に触れ、本当に悲しく思ふこともあります。さういふ私達の祖先達の悲しき思ひといふものに触れ得て、やっと自分の国が如何にして続いて来たか分かる様な気がします。

ご清聴どうも有難うございました。

## 母の手紙

昭和60年第30回「合宿教室」

内海勝彦

（日産自動車㈱アフリカ部・31歳・早稲田大昭55卒）

只今御紹介戴きました内海です。現在、日産自動車のアフリカ部といふ部署で輸出の仕事に携はってをります。

さて、本日皆様方にお話したいことは、私の母の手紙についてであります。実は、私の母は、丁度十年前病死したのですが、その母が生前書き記した手紙が最近偶然見つかったのです。

私はこれを読んで有り難いといふか、大変感動し、母親の真心に強く胸を打たれました。皆様方の多くは、今も御両親が健在でいらっしゃると思ひますが、案外、親の真心といふものには余り気づいてゐないのではないでせうか。私も以前はさうでした。そこで今日は私の母が遺した手紙を紹介しながら、親の真心についてお話できたらと思ひ登壇いたしました。

手紙を紹介する前に、私の母のこと、そしてこの手紙のことについて説明したいと思ひます。母は大正十二年、福岡市郊外の小さな農家に、娘二人、息子四人の六人兄弟の一番上として生まれました。家が貧しく、母が十二歳の時に母親が亡くなったために、長女として妹、弟の世話をし、家事の手伝ひをするために、高等小学校、今の中学校を卒業後、一家の働き手となりました。「もっと勉強したかったけど言へなかった」と生前私に語ってゐました。

母が生まれ育った時代は、満州事変そして日華事変そして大東亞戦争へと、日本、世界が大きく動きつつある時代でした。しかし、私の母はごくごく普通の大正生れの一人の平凡な女性として過したと思ひます。終戦後二十二歳で結婚し、私を一番下に四人の子供を

生み育てました。そして十年前、五十二歳で病のために他界しました。

実は、亡くなる十年前から、それ迄の子供の養育や家事での疲労がたまっていたのでせうか、肉体的、精神的に病気がちとなり、半年を病院、半年を自宅療養といった生活をしばしば繰返してみました。そして最後は、家族や子供の分別もつかないほど、心身共に病に冒されて逝ってしまったのです。

当時、浪人二年目の秋を迎へてゐた私は、試験が迫り、心に苛立もありました。病院で母の最期を看取ってやれなかった無念さの片隅で、一体私の母は何を遺してくれたのだからか。長い病気の末に私達に何も言はずに逝ってしまった母は、一体家族に、そして子供達に何を遺してくれたのだらうかと、母の最期が普通でなかっただけに、駄目な母親であったなあといふ思ひが拭ひきれずに、そのまま歳月が過ぎてゆきました。そして十年が経ち、母の面影もそして存在すらも心から失せようとしてゐた丁度このごろ、この手紙を私の姉から見せられたのです。

この手紙は、母が、姉の小学校の時の担任であった森田先生といふ女の先生に宛てたものでした。今年の初め、森田先生から「大人になって子供を育てるやうになつたら見てほ

しいと思つて今迄大切にとつておきました。お母さんの形見ですからお返しします。」と言つて、わざわざ私の姉のもとに送つて下さつたとのことでした。先生の話では、この手紙は、姉が小学校三年生の時に、或テストの成績が非常に悪かつた上に、裏に落書きをしてゐたのを、先生が咎められて、母宛に子供の教育のことや家庭生活のことなどを細かく指導して戴いた、その便りに対する母のお詫びと感謝の返事だったので。二十年の歲月のために便箋は黄色に変色してゐましたが、久し振りに見る母の文字でした。手紙にはかう書かれてゐました。

森田先生、御手紙有難く拝見致しました。師の恩は山より高く海よりも深し。私共が小学校の時より教えて頂きました事でございます。先生の御教訓、あの子の将来に何時までも別れないで、御恩の万分の一でも世の人のためになる人間になってくれることを、私は念じております。私共の小学校時代はあの戦争の只中でした。そして今を去る二十五年前、私の母は他界致しました。祖母に育てられた私は、苦しい世の中の事をしらず、又ひがみから、われとわが身をせめました。結婚生活十八年、主人の姑上様

よりいろ／＼教えて頂きました。此の上は正しい円満な人格者となってくれるように、そして私よりも教養のある男子であり女子になってくれますよう、四人の子を立派な人間に育てる親としての私の義務を忘れてならぬと心には思い乍ら世事に追はれていました。ほんとに私のゆるんだ心をいましめ下さいましたのは先生でございます。

「学問は坂に車をおすごとし」とか。又、人間の性格は生れつきもあり、又幼きころの家庭のかん境も大いに影響することを私の体験からして考えさせられます。無躰なるまゝの鉛筆の走り書き何卒御ゆるし下さいませ。どうぞこん後共無学の私を御導き下さいますよう、三津子にも悪い所はどしどしはげまして下さいますように御ねがい致します。

ではこれにて失礼いたします。有難とうございました。有難とうございました。合掌

五月二十一日

三津子 母

森田先生

忙しい家事の合間をぬって一気に書き上げたものらしく、便箋二枚に鉛筆で書かれてあ

りました。

私は、最初これを読んだ時、正直言って信じられませんでした。前に述べたやうに、「母は一体何を遺して逝ったのか。駄目な母親だったなあ」といふ先入観の為、自分の母親の手紙すら疑ふ心になってゐたのです。

しかし、紛れもなくこれは母の文字でした。そして私は十年ぶりに再会し得た思ひで、幾度も幾度も読み返したのです。今かうして読んでゐますと、母の声をはつきりと聞くことができず。これほど率直に自分の身の上と心情を表はした母を聞いたことがありませんでした。言葉に溢れる真心に胸を打たれ、ありのままの姿をさらけ出してでも先生に教へを請ふ母の強さを感じました。

手紙の初めにある「先生の御教訓、あの子の将来に何時までも別れないで、御恩の万分の一でも世の人のためになる人間になってくれることを、私は念じております」の言葉には、一人の先生に幼い教へ子の行末を案じて我が子の如く御指導を戴いた、その御恩に対し、それをしっかりと心に刻み、我が子よ、世の人のためになる人間となってほしいとの母の願ひがこめられてゐるのです。

先生の信念に基づいた心からの教育、それに対する親の全幅の信頼。そして世の人のためにあってほしいと願ふ、我が子に託す親の思ひ。これらが一人の平凡な母の言葉に表はされてゐると思はれてなりません。私には、母が、弱く至らぬ自分を痛感しながらも、それでもやはり、否、そんな自分だからこそ、恩師を信じ四人の子供をしっかりと育てていきたい、さういふ気持ち、努力が生れてきたのだと思ひます。

そんな母の姿を偲びながら、手紙の中にあつた「私よりも教養のある男子であり女子になつてくれますよう、四人の子を立派な人間に育てる親としての私の義務を忘れてならぬ」といふ箇所を読む時、私は、一体自分は母よりも教養ある人間といへるのだらうか、さう問ひ返さずにはをられませんでした。

確かに私は、最高学府である大学を卒業し就職しました。一方、母は高等小学校、今でいふ中学校出です。学歴から言へば無学、無教養であるかもしれませんが。しかし、世の中には大学で学ぶだけでは難しい、大学で学ぶ学問では得ることが難しい、苦しい事、辛い事、楽しい事、悲しい事、様々な人生経験を重ねることによって練られ、育てられてゆく人の心の姿勢、心の豊かさがある。母の手紙はそれを私に教へてくれてゐる気がします。

それが私達が本当に生きる力となるものではないか、生きた学問と言へるのではないか、さう思へてなりません。

母が亡くなった時、私は、母は一体子供達に何を遺してくれたのか、さういふ疑問が残ったと申しました。しかし、今、私は自分自身にかう問ひかけずにはをられません。母は一体私に何を望んでゐたのか。どんな人間になつてほしいと願つてゐたのか。そして、自分はその母の願ひにどう応へていけばよいのか。さういふ自問に變つていったのです。そして何よりもこの一通の手紙を遺してくれたことが私にとって何よりの宝であると今は思つてをります。

今一つ忘れてならない事があります。それは二十五年もの間、大切にこの手紙をとつて戴いた森田先生の事です。母の在りし日の姿と声を歳月を経て私に呼びさまさせてくれたのは森田先生です。母は死んでゐない。この手紙の中にしっかりと生きてゐる。さう思へるのも森田先生の御陰です。もし先生がいらっしゃらなければ、私は母の真心も知らずに、否、母に対する間違つた考へを抱きながら一生を終つてゐたかも知れません。それを思ふと、二十五年ぶりに現れたこの手紙のえにしの不思議を思はずにはをられません。



人が生れ死んでゆく、この人世は、はかないものではありませんが、しかし、この母の手紙のやうに、ありし日の声は、人の心のまことは言葉に残されてとこしへに伝はる。さう私は信じてをります。

今年も私も一児の父となりましたが、我が子から孫へとこの母の手紙と真心を語り伝えてゆきたいと思ひます。

## ロンドン留学より帰りて

昭和60年第30回「合宿教室」

山口秀範 (大成建設(株)海外事業部・37歳・早稲田大昭47卒)

司会の方からご紹介頂いたやうに、私は昭和五十五年一月から三年三ヶ月、西アフリカのナイジェリアで仕事をし、引き続き五十八年六月から二年間、ロンドンでビジネス・スクールに通ったといふ、皆さんと多少違ふ体験をして参りましたので、その、合計五年半にわたる海外生活の中で見聞し、考へたことのいくつかをお伝えしたいと思つて、登壇

させて頂きました。

### ナイジェリアーニジェールの国境で

まづナイジェリアについてですが、人口七、七〇〇万と公表されてをり、世界第六位の原油産出量を誇る、ブラック・アフリカの中では、豊かで将来性のある国です。国土は日本の三倍あり、その中に大小約二五〇の部族が住んでゐると言はれてゐます。各部族は、それぞれ身内でしか通じない言葉を持つてゐるため、意思の疎通は仲々うまく運ばず、国の政治を初め、全体に関する問題を語り合ふ時には、公用語の英語に頼るしかないのが現状です。しかも宗教まで、南部はキリスト教、北部に行くといスラム教と分れ、更に少数民族の中ではまだ、原始宗教が信じられてをり、非常に統一を図り難い国と言へるでせう。イギリスの植民地から独立後四半世紀を経てゐますが、まだまだ「作られた国」といふ印象を強く持ちました。ここで、私の体験を一つお話してみます。

ナイジェリアの北方に国境を接する、ニジェールといふ国を訪れた時のことです。緑と白のナイジェリア国旗が翻る国境事務所で手続を終へ、四、五キロ車を走らせると、ニジェ

ールの旗が立つ建物が見えて来ます。

車を降りた我々にまづ近づいて来たのは、人なつっこい、黒光のする顔の男の子です。そしてその第一声は、なんと「ボン・ジュール・ムッシュ」でした。ニジュールは、元フランスの植民地で、今も公用語はフランス語ですから、考へてみればこの挨拶は当然なのですが、突然の事で驚きました。見渡す限りの景色はいつもと寸分違はぬサバンナの土漠、点在する民家もナイジェリア側と全く同じ土壁・わら屋根なのに、そこに住む渾たれ小僧の口をついてフランス語が飛び出さうとは……。三日後に、また、国境線を越えてナイジェリアに戻ったのですが、そこでニジュール側と同じやうな顔をした、やはり鼻水たらした男の子達が寄って来て、今度は「ハロー・マスター」と言ふのを聞いて「一本の線」が隔てゝあるものの大きさを、しみじみ感じました。

我が国は海に囲まれてをり、現在陸続きの国境を持たないため、猶更わかり難いのですが、人為的に引かれた一本の線を隔てると、「ハロー・マスター」が「ボン・ジュール・ムッシュ」になつてしまふ事から——しかも彼等が共有する、先祖から受け継いだ言葉は、英・仏いづれの言語でもない——国、或いは民族とは何だといふ問題が浮かび上が

て参ります。しかも、この、多民族国家、人為的国境線といふのは、ナイジェリア、ニジエール間だけの問題ではなく、世界の超大国と呼ばれるアメリカ、ソ連にしても、また隣の中国にしても、異なった言葉を持った複雑な民族の寄せ集めで、未だに国内で互ひに話しが通じない程の「人工国家」である事は、案外忘れられてゐるのではないでせうか。

### 連合王国「イギリス」

では、次にイギリスを見てみませう。イギリスも、正式にはユナイテッド・キングダム（連合王国）と呼ばれる通り、北アイルランド・スコットランド・ウェールズそしてイングランドと、四つの「国」から成り立ってゐます。我々は、太古の昔からイギリスといふ国が存在した如く錯覚し、七つの海を支配した国、民主々義の手本の国として見てゐますが、実際イギリスの歴史の中にはこの四つの「国」の間のはげしい抗争といふ過去も持つてゐるのです。しかも過去だけではなく現在でも、イギリスの人々はイギリス国民といふ共通の基盤の他に、自分がどこの出身かを、強く意識してゐるやうです。

一例をあげますと、私が通つてゐたビジネス・スクールの授業で、ある先生が「この中

に外国人はどれ位あるか。」と言ひ出し、「お前はアメリカ人か。お前達三人は日本人だらう、見たらすぐわかる。」といふ具合に尋ねました。で、「あとはみんなイギリス人だな」と確かめると、後ろの方でパッと手が挙がり「ここにスコットランド人が二人をります。」と答へるんですね。また、ウェールズを旅行すると、いまだに、ウェーリッシュといふ昔からウェールズ人が使つて来た文字で道路表示をしてゐる地方があります。イギリス人でも、そのウェーリッシュが読めなければ、時には道に迷ふといふ信じ難い状況があるのです。

### 民族から国家へ

以上、いくつかの例から、民族とか部族——私がここで言ひますのは、共通の祖先、共通の歴史を持つ人間の集団といったものかと考へますが——さういふものが、この世界の中で重要な一つの単位を成してゐることは、おわかり頂けるかと思ひます。さて、それでは、その民族・部族が、どのやうな過程で国家といふものになつて行くかが次の問題です。一番自然な姿としては、幾つかの民族が非常に長い年月をかけて、渾然となつて一

のもっと大きな形を成し、それが国になるといふのでせうが、実際にはそれが必ずしも、十分こなれた形にならず、一応は国といふ体裁はとつてあつても、構成民族同士が反発し合つたり、お互ひに相手より優位に立たうと内部紛争を繰り返してゐるやうな国も、世界中にたくさんあります。しかし、いづれにしても、現実に国を考へる時に、土地、人民、主権が国家の三要素であるといふやうな、大学の「政治学原論」流の定義づけや、国を一般名詞化するやうな方法は避けたいと思ふのです。我々に出来ることは、個々の国について、例へば、ナイジェリアの国はどういふ成り立ちで、実情はかうなつてゐる——今も、二五〇部族のうち最有力の三部族が主導権争ひを続けてをり、十五年前の、悲惨な、ピアフラ戦争が再発する危険を常に孕んでゐる——さういふ国がナイジェリアだとか、イギリスは、かくかくの歴史の上に築かれた、連合国家といふ面を持った国だとか、では一体アメリカはどうなのかといふやうに、見て行くしかない訳で、それを一緒に括つて、「国とはなんだ。」といふやうな問ひには、非常に答へ難いし、また、そのやうなことはあまり意味のない作業になつてしまふ、さういふのが、いくつかの外国滞在の経験を通して見た私の感想です。

そこで改めて、我らが祖国日本は、といふと、単一の民族で、同一言語を全国民が話す、世界の中でもかなり珍しい国だといふことが、つくづくと実感されて参ります。我々は、北海道に行っても、沖縄に行っても、お互ひの言葉が通じ合ふ事については何の不思議も覚えなないし、この国土に住む人は、皆、同じ日本人である事を当然としてゐますが、むしろ、さうでない国、まだ渾然と混じり合はない国、或いは、お互ひに言葉が通じないけれども、それをどうにかして一つのものにして行かうといふ努力をしてゐる国の方が、世界の大半を占めてゐる、それが現実の姿なのだといふことに気付かされるのです。

### イギリスの歴史教育

では、こゝで、例へばイギリスで、現在国を維持するためにどのやうな努力がなされてゐるかを、教育の問題に絞って、身近な体験の中からお話してみませう。

私はこの二年間、家族と一緒にロンドン郊外に住み、子供達を当地の小学校・幼稚園に通はせてをりましたが、小学校四年の長女が、或る時期、宿題だと言って毎日ぬり絵を始めました。良く聞いてみると、実はヘンリー八世のお後の似顔を書いてゐるとの事で、六

人の王后それぞれの特徴を捉へて描き、解説を加へていくのです。例へば「最初のキャサリンは、子供が出来ず離婚された。次のアンといふお后は、女の児を産んだけれど、国王に対して謀反の疑ひをかけられて絞首刑になった。」或いは「四番目のお后もアンといふ名前で、六人の中で一番ブスだったが、氣立てが良く国王から最も愛された。」などと言ひながら、丁寧の色をぬってゆくのです。あちらの教育ではかういふ作業を通じて、歴史の機微に触れるやう仕向けてあるのでせう。イギリスが近代国家として勃興する前夜、緊迫した政治情勢の裏では様々な陰謀も入り乱れ、最後には処刑されたアンの遺児がエリザベス一世として君臨するといふことになるのですが、その英国史の中でも重要、かつ劇的な一時代を、彼等は似顔絵から始めて、三ヶ月がかりで教へるのです。これが中流家庭の住むごく当り前の小学校で行なはれてゐるといふ事は、注目に値するのではないでせうか。

翌年は、今度はナポレオン戦争の頃に絞つて、また三ヶ月かけて勉強します。イギリスとフランスが世界の覇権をかけた戦ひの時代をたどる訳ですが、中でも、天下分け目のトラファルガー沖海戦で英雄的な死を遂げたネルソン提督については、特に念入りに教へら



れます。そして、授業の総仕上げとして、提督が乗ってゐた帆船・ビクトリー号——今もポーツマスの海軍基地に、当時の姿のまま保存されてをり、時には女王様をお招きして、船内で晩餐会が催されるとの事——を見学するため、みんなで遠足に出かけます。海戦指揮中に敵の弾を受けてネルソンが倒れた甲板には、小さな、かまぼこ板くらの表示板があり「HERE NELSON FELL-21st October, 1805」と、それだけの短い表示ですが「此処でネルソンが倒れた」といふ歴史事実を、肅然と伝えてゐるのです。この船を訪れる子供達の目の輝きが、想像出来るではありませんか。

かういふ教育が続けられる限り、やはり大英帝国の基盤は、まづ揺るぐまいといふことが窺はれる、私と長女にとっても、貴重な経験でした。

### 外国人の目に映る「天皇」

さて、次に申し上げたいのは、世界の中で日本がどのやうに見られてゐるかといふ点です。こゝでは、主にイギリスの新聞記事から、一つ二つご紹介します。

私がロンドンに住んだ二年間に目にした新聞の中で、日本に関して最も大きな写真が掲

載されたのは、何の記事だと思ひますか。それは、今年（昭和六十年）の四月二十九日の新聞に載った天皇様のお顔だったんです。これは私、嬉しかったですね。写真の大きさを以て、単純に比較はできないでせうが、あとで送られて来た日経新聞の写真が、十分の工程の小さなものだったのには、がっかりしましたね。「タイムズ」紙の特大のお写真には解説がついてゐて、「八十四回目の誕生日を迎へられるエンペラー裕仁の統治は、歴代百二十四人の天皇方の中で最長の五十九年を越えてをり、その時代は、啓明と調和（昭和）と名付けられてゐる。」とありました。

また、他紙の伝へるところによると、この日の国連社会経済理事会で、ブルガリア代表が冒頭に、「今日は日本のナシヨナル・ホリデーなので、この機会にお祝を述べる。」と提案したところ、議長のエドイツ代表も「只今の発言を支持し、私も議長として日本にお祝を申したい。」と応じて、国連議場では異例の光景が見られたとの事です。ナシヨナル・ホリデーとは、単なる祝日ではなく、その国が最も大切にしてゐる記念日といふ意味あいなのです。その四月二十九日、国連の場で、それこそ、国家体制、思想の違いを超えて以上のやうな発言がなされたといふことは実に感動的なことだと思ふのです。その一事を見

ても外国の人々は皆「日本の国は天皇を中心として成り立ってゐる」といふ事実をはつきり認めてゐることがわかるのです。このやうに国際社会では、天皇が日本の元首であるといふことは、常識に類することなのに、当の日本人だけが、未だに曇らされた眼をぬぐふ事が出来ずにゐる訳で、もうそろそろこのやうな妙な風潮から抜け出しても良い頃ではないでせうか。

この合宿でも、天皇について初めて勉強され、どうもすっきり受け止められないといふ方が、或いはをられるのではと思つて申し上げるのですが——実は私も学生時代のある時期には、「長い歴史や様々な文化遺産を持つ日本の国を大切にしよう」といふことは良くわかつたが、しかし天皇の問題は難しいので、暫く棚上げにしておかう」と考へてをりました。しかし、それがいかにをかしなことなのか、今ご紹介した新聞記事等を見ても日本の国のことは大事だが、天皇のことはちょっとわからないといふ具合に、その二つのことを分けて考へるといふことが全く現実を遊離した空論であることがおわかり頂けるのではないでせうか。

先程も述べましたやうに、ナイジェリアの国、イギリスの国といふやうに世界中いづれ

の国もそれぞれの国は他の国と一緒に出来ない成り立ちをもつてゐるわけですが、この日本の国について考へる場合には、天皇陛下のことを抜きにしたままでは、要するに一般論となつてしまひ、いつまでたつても具体的な、現実の日本の国の姿に触れて来ないでせう。皆さんはこの合宿を契機として勇氣を持って、歴史事実をたどる努力を開始して頂きたいと思ふのです。

### 国際人への道

最後になりますが、私自身、学校を出る頃には、まさか自分が海外で仕事をする事など思ひもよらなかつたところ、現実には、アフリカに三年、ロンドンに二年そして今度はアメリカ勤務と、次第に世界が広がつて来たやうな訳ですから、今後、社会に出て行く皆さんが、海外に住む、或いは外国人とつき合ふ機会は沢山出て来るでせう。その時には地球上のどこであれ、またどんな小さな会合であれ、皆さんが会ふ外国人に対しては、皆さんは日本人の代表として接する事になるのです。少なくとも相手の方では、日本の事ならお前に聞けば何でもわかるだらうと信じて語りかけてくるでせう。それに対して自分が、如

何に日本のことを知らないかと痛感してももうその時はおそいのです。

双肩に国を背負ひ、日本の代表として外国人とつき合へる日本人が続々と生まれなければいけない。さうでなければ日本といふ国は世界の中で本當に尊敬される国になつていくことはできないのです。その事を思ふと、やはり皆さんに、もっともつと頑張つて頂かねばと期待せざるを得ません。この合宿教室で、毎日研鑽してをられる内容、またそれらを、合宿が終つてからも友達と確め合ひ、深めていく友情、これらが、今後皆さんが国際人として立つて行く、すべての基本となるのです。

私自身、機会を得て、学生時代に合宿に参加し、友情を培つて来たお蔭で、或る時はアフリカの大地に一人であつても、またロンドンで、仲々通じない英語に苦しみながらも、やはり心の底では、誰が何と言はうと自分は日本人として、しっかりしたものゝを今まで学んで来たし、それを支へてくれる友達が日本には沢山あるといふ確信を持ち続ける事が出来ました。皆さんも、何年後かには、国際舞台で力を発揮されることになるでせうが、その日のためにも、今しっかり勉強し、友情を育んで下さい。

雑駁な話で、あちらこちらに飛びましたが、以上、私の体験の一端を述べさせて頂きま

した。

## 心に残る言葉

昭和61年第31回「合宿教室」

西山八郎（鳥栖市役所下水道課・34歳・西南学院大昭51卒）

唯今御紹介戴きました西山です。現在、鳥栖市の下水道課で工事の契約や検査などを担当してをります。皆さんは、昨年話題になりました「ビルマの竖琴」といふ映画のことは御存知でせうか。観に行かれた方も多いと思ひますが、原作となった同名の本の中で、著者の竹山道雄先生は、戦後の混乱したわが国のありさまを嘆いて次のやうに書いてをられます。

「いま新聞や雑誌をよむと、おどろくほかはない。多くの人が他人をのしり責めていばっています。『あいつが悪かったのだ。それでこんなことになったのだ』といつてごうまんにえらがつて、まるで勝った国のようです。（中略）ところが、あの古参兵のよ

うな人はいつも同じことです。いつも黙々として働いています。その黙々としてるのがいけないと、えらがつている人たちがいうのですけれども、そのときどきの自分の利益になることをわめきちらしているよりは、よほど立派です。どんなに世の中が乱脈になつたように見えても、このように人目につかないところで黙々と働いている人はいます。こういう人こそ、本当の国民なのではないでしょうか？」

戦争が終り、混乱したわが国を何とか再建していかうといふ大変つらい時代に、さうなつた事をまるで他人事のやうに批難する人が多いなかで、黙々と地道に働いてゐる人も矢張をられたのです。

仕事を通じて地元の方や工事に携はつてをられる方など毎日いろいろな方と出会ひながら実感致しますことは、私達が生活してゐるこの社会が、実に多くの人々に支へられながら営まれてゐるといふことです。そして、さういふ人々のひたむきな姿に接してをりますと、この「ビルマの豎琴」の一節がフツと浮かんでくるのです。

私が大学に入りましたのは今から約十四年前になりますが、当時は、大学紛争がまだ終結してをらず、ヘルメットを被り角棒を持った過激派の学生達が授業を妨害したり、学

内のあちこちでマイクのボリュームをいっぱいにあげてアジ演説をするといった光景が屢見受けられました。そして、皆さんにはとても信じられないでせうが、大学の構内において、大学側や対立する思想集団との間で、流血の争ひが頻繁に行はれてゐたのです。私はこのやうな大学の現状を見て、大学で行ふ本当の学問とは一体何なのかと少しづつ疑問に思ふやうになってゐました。

その頃、学内で開かれた講演会で知ったある先輩に勧められて、毎週一回の輪読会に参加するやうになつたのです。テキストは、皆さんが昨日読まれた太子の御本でした。初めの頃は、言葉が難しくて意味もよく分らないまま読んでをりましたが、難しいながらも、お言葉をじつと見詰め、先輩の言葉に耳を傾けてをりますと、それ迄分らなかつた言葉の意味がまるで霧が晴れるやうに少しづつ分つていく。それが本当に不思議に思へました。

そのやうにして参加するやうになつた何度目かの輪読会のことを、私は今でも忘れることができません。それ迄は輪読会に参加しても殆ど回りの先輩の話聞くだけでした。でも、その日は私も思ひ切つて自分が思つてゐることを発言してみたのです。ところが、私とその発言をめぐる長い時間議論になりました。それは、先の大東亞戦争で戦死した若



者達のことについてでした。私はそれ迄戦争や戦争に結びつくことであれば何でもいけな  
 いことだと思つてゐました。ですから、悪い戦争に参加して亡くなったのだから、それら  
 の人々の死は無駄死にだったのだと主張しました。ところが、私の話を静かにじつと聞い  
 てをられたある先輩は、次のやうに私に繰り返し説かれたのです。「あの戦争について、そ  
 れをいろいろと論じることはできるかもしれない。しかし、大事なことは、一国の存亡を  
 かけた戦争に、わが身を惜しまず出征して行った若者達がゐたといふことをよくよく考へ  
 てみることはないのか。精一杯生きて、そして死んで行った若者達の思ひを偲ぼうとも  
 しないで、簡単にあの戦争が悪かったのだから若者達の死も無駄死だったと片付けてしま  
 ふのは間違つてゐるのぢやないか。」と言はれたのです。

その日以来、私はこの問題を何度となく自問自答しました。戦争が良いことでないこと  
 は誰でも分つてゐます。進んで戦争をしようといふ人などゐないでせう。では、何故戦争  
 は起こるのでせうか。今でも世界のあちこちで戦争が行はれてゐます。わが国も四十数年  
 前戦争を体験しました。これらの戦争は何故防げなかつたのでせうか。この問題を突き詰  
 めていくと、大変大きな問題になっていきます。しかし、戦争が起きたといふ事實は紛れ

もない事実であり、その戦争に参加して掛け替へのない命を失った大勢の若者達が、たこともまた事実なのです。

私は、先輩に紹介して戴いて彼らが出征する前に書いた手紙や短歌を読みました。そして、その純粹な思ひに本当に心を打たれました。私は知らなかったのです。彼らが自分の置かれた苦しい時代の中でいかに真剣に自分の生き方を悩み、短い人生をまっしぐらに生きていったかといふことを。彼らが残したそれらの言葉に直接触れて、私の心の中のわだかまりも消えていきました。

このやうな経験の中で、もう一つ今も心に残ってゐることがあります。それは、私の母の里の近くにをられた廣尾彰大尉といふ方のことです。昭和十六年十二月八日、日本はアメリカやイギリスなどに対して宣戦を布告してハワイの真珠湾を攻撃しました。この時、航空隊と共に作戦に加はった五隻の小型特殊潜航艇がありました。二人しか乗れない小さな特殊潜航艇に乗り組んだ十人の兵士達は、一人を除いて総て戦死されました。この廣尾大尉もその一人でした。

この方は、私の母や叔父達と同年代の方で、お盆に墓参りに行きますと、祖母はいつも

近くにある廣尾大尉の墓迄連れて行き、いろいろと大尉のことを話してくれました。幼い私にこの方がどのやうに偉い人なのかよく分るはずもなかったのですが、何かとても尊いものに対するやうな態度で廣尾大尉の墓に参り、そして墓に向つて苦勞を勞ねざらふ言葉をかけながら大事さうに掃除をしてゐた祖母の姿を今でもよく覚えてゐます。

その廣尾大尉は、いよいよ作戦が開始と決定されると、自分は転属になつて暫く戻れないとだけ両親に言ひ残して出征されたのださうです。祖国を離れ、遠い異国の湾上で、目の前に迫つた自らの死を前に廣尾大尉は何を思つてをられたのでせうか。長く敵しかった訓練期間、自分に課せられた任務の重大さ、そして、これからの日本がどういふ運命を辿るのかを心の中で思ひ巡らし、自分が迎つてきた二十有余年の人生を振り返り、幼い頃の思ひ出をなつかしみ、そして、何も言はずに別れて来た両親のことを思ひ、万感の思ひが胸中を渦巻いてゐたことでせう。

先の大戦では、約一八五万人の国民が戦死し、残された国民の多くも住む家さへ失ひました。多くの生命を犠牲にし、絶望と深い悲しみだけを残したあの戦争は、民族の悲劇としか言ひやうがありませんが、この戦争を一つの概念として捉へ、その概念に対する評価

に基づいて具体的な事実を裁いてゆけば、私達が人として本質的に備へ持つてゐる喜びや悲しみといった感情は一体どうなるのでせうか。それでは、青春の総てをにかけて戦陣に参加し、肅々として死地に赴いて行った若者達のあの無量の思ひは一体誰に受け継がれてゆくのでせうか。このことを思ふ時、私はあの輪読会で言はれた先輩の言葉が、今も心に蘇ってくるのです。

私にとって、大学に入って始めて経験したこの輪読会は、私のそれ迄の生き方を根本から問ひ直させるものでした。二、三度しか会ったことのない先輩に自分が確信してゐたことについて正面から反論されるのにはびっくりしました。言ってみれば他人の私に、この先輩は何故これ程迄本気で語りかけてこられるのか、くやしきもありましたが、思ひがけない体験でもありました。何の遠慮もなく率直に、そして心を入れて語りかけて下さった先輩の姿を今思ひ浮かべると、自分の心を赤裸々に披瀝し合ふ本当の付き合ひといふものを学ばされたやうに思ひます。

私は、現在も時々佐賀や福岡でこの聖徳太子の御本の輪読をさせて戴いてをります。が、これからも輪読を続けながら私の人生を精一杯生きて参りたいと思つてをります。

第二編 青年講義



## 祖国と慰霊と

昭和51年第21回「合宿教室」

——現代日本に失はれたもの——

志賀建一郎（福岡県立三池高校教諭・30歳・九州大昭48卒）

### 言葉と概念の乱れ

皆様も既に御覧の通り、この弓張岳からの眺めは実に素晴らしいのですが、先程の夕食の休み時間に、私は窓辺から海のかなたの半島に夕陽が落ちていくのをじっと見てをりました、何ともしれぬ気持ちに襲はれました。空は朱色に染まり、見渡す限り広がる沢山の島々は、闇につつまれようとして、さらに、それをめぐる海はまことに静かにないでゐる。古代以来の人々がこの海に小舟を浮べて生活をして来たのでせうが、その情景が、眼に浮ぶやうで、これが祖先より代々受け継がれて来た国土なのだ、しみじみ思はれてなりませんでした。

さて、「祖国と慰霊と」と題して御話しをしていくことになっていますが、私が大学時代

以来、特にこの合宿教室を通じて、何を学んできたかを考へて見ますと、それは結局、この二つのことばに集約されるやうな気持がしてなりません。

学生の皆さんはほぼ昭和三十年前後のお生まれでせうが、私も戦後生まれで、ほぼ同世代に属してゐると言へます。私達が育つてきた時代の特徴をここで思ひ浮べてみますと、第一に私達は、日本の国が危いとか、将来日本はどうなるだらうかといふ危機感を直接に体験したことがなかつたといふことが挙げられるでせう。それに代はつて、声高に論じられてきたのは「民主主義の危機」だとか、「軍国主義化への危機」といったものでした。

又、経済事情を中心として、日本は一貫した上昇、発展の過程を辿り、明日の生活は、必ず今日より良くなるといふ楽天的雰囲気支配して来たことも挙げられます。その中で私達は、まるで当り前のやうに享受してゐるこの日本のすがたが、かつて多くの人達の懸命の努力によって守られ、受け継がれて来たといふ簡明な事実を殆んど忘れてしまつてゐるのではないでせうか。そこには、何か大切なものが欠落してゐる。それを端的に言へば「祖国」といふ言葉に集約されていくと思ふのです。

さて、この「祖国」と、表題にかかけました「慰霊」といふ二つの言葉は、現代の一般



的風潮の中では、ほとんど死語に近いものになってしまつてゐます。しかし、奇妙なことに、一部では、それが盛んに声高に叫ばれてもゐるのです。その典型的なものは、民主青年同盟の機関紙の題名ですが、これは「祖国と学問のために」となつてゐます。又、毎年、革新政党等による原爆による死者への慰霊祭も行はれてゐます。しかし、民青の使ふ「祖国」といふ言葉には、階級史観によつて裏付けられた特殊の意味づけがなされてをりますし、原爆の慰霊祭は、多くの戦没者の中から殊更に一部の方達だけをとり上げることによつて、反米、反戦運動の一環として、行はれてゐるやうで、共に、本来の意義がねじ曲げられてゐると言へるのです。ここでは、それを批判する前に、もっと大事な点を指摘しておきたいのです。それは、このやうな大切な言葉が、政治的意図でねじ曲げられても、誰もそれに気づくことなく、そのことに全く無感覚になつてゐるといふことです。ここで使はれてゐる用例の中では「祖国」や「慰霊」といふ言葉がもつてゐる本来の意味は死んでゐる。しかしそのことに誰も心をとめようとはしないのです。この傾向は、マスコミであれ、言論界であれ、そして大学の中であれ、どこにでも見られることです。かうして現代の日本では、言葉がその本来の意味とは無關係に、勝手に用ひられてゐる。例へば現在の

日本を風靡してゐる言葉に「民主主義」といふ言葉があります。私は現在高等学校の教師をしてゐますが、教育の世界におきましても、民主主義とか、民主的といふ言葉が、全く無秩序に使用されてゐます。しかし、この言葉は例へば自民党も民主主義なら共産党も、さらにアメリカもソ連も皆、民主主義を標榜してゐることからも明らかかなやうに、現代では殆んど、その正確な意味を失つてゐます。にも拘らず、まるで呪文のやうにこの言葉が用ひられてゐるのは何故か。何か、どこかに、根本的にをかしいところがあるはずです。では一体どこかをかしいのか。

ここでは、レジメでお渡ししたアテネのペリクレスが行つた、「葬礼演説」をよみながらその問題を考へてみたいと、思ひます。

### ペリクレスの葬礼演説

ペリクレスとは、古代ギリシヤの、都市国家アテネの、将軍です。演説が行なはれたのは、紀元前四三一年の冬で、彼はこの二年後に、亡くなつてゐます。ギリシヤは、このペリクレスの「葬礼演説」がなされる五〇年ぐらゐ前に、東方の大帝国ペルシヤの大攻撃を

受けませんが、この時、ギリシャにおける諸ポリスは、一致して、これを撃退してゐます。この後の数十年間のアテネこそが、私達が一般的に言ふ、古代ギリシャのイメージの原形と考へてさしつかへないと思ひます。

政治的には、いはゆる直接民主制が行なはれ、経済的にも非常に豊かでした。文化面でも、演劇がきはめて盛んで、フィディアスをはじめとした多くの芸術家が輩出し、市民が心ゆくまでこれらを味はひ、楽しんでゐた時代でした。そのアテネの全盛時代の、最盛期を現出したのが、このペリクレスの時代だったのです。

ところが、ギリシャには、あと一つの強力な都市国家、スパルタがありました。この二つの都市国家は、つひに両雄並び立つことが出来ず、その他の都市国家が、それぞれ両者に同盟いたしましたして、相対立し、ここにペロポネソス戦争が始まります。それが紀元前四三一年で、一年目の戦ひが済んだ冬、その年の戦没者に対する国葬が行はれ、この時、ペリクレスの「葬礼演説」が行なはれたわけです。それでは、ペリクレスの言葉を見ていきませう。

「まず私は、わが祖先に讃辞をささげたい。今日この場にあつて、祖先の思ひ出に、最

初の位をゆずるのは、われわれの義務であり、この機にふさはしいからである。なぜならば、この土を、わが血脈の祖先らは、古よりつねに住み耕やし、その自由を守る勇徳によって世々今日にいたるまで、子らにゆずり渡してきた。」(『トウーキューディス戦史』岩波文庫より、以下同じ)

ペリクレスは、国葬の墓地に集った市民の前で、まづ最初に「わが祖先に、讃辞をささげたい」と、云ふのです。それぞれに悲痛な気持を、抱いてゐる参会者が、心を一つに寄せ合ふ機縁として、彼らの共通の祖先の功績と、その祖先が作り上げて来た彼らの祖国に対して、思ひをこらし、まさにそのおかげで、自分達が今生きてゐるといふことを、確かめようとするのです。

それでは、彼らの祖先は、どのやうな生き方をして来たのか、そしてアテネの国柄といふものはどういふ国柄であったのか、ペリクレスの言葉にそれらを見て行きませう。

「ともあれ、苛酷な訓練ではなく、自由な気風により、規律の強要によらず、勇武の氣質によって、われらは、生命を賭する危機をも肯んずる……(中略)われらは、質朴のうち美を愛し、柔弱に墮することなく知を愛する。われらは、富を行動の礎とするが、

いたずらに富を誇らない。また、身の貧しさをみとめることを、恥とはしないが、貧困を克服する努力を怠るのを、深く恥じる。そして、おのれの家計同様に、国の計にも、よく心をもちい、おのれの生業に、熟達をばげむかたわら、国政のすすむべき道に、十分な判断をもつように心得る。ただわれらのみは、公私両域の活動に関与せぬものを、閑を楽しむ人とは言わず、ただ無益な人間と見なす。」

ギリシャの直接民主政治といふものは、民主主義の、理想的な姿であるといふことが、しばしば云はれるわけですね。しかし、民主政治といふものは、一人一人が、国家の政治に対してそれをなし遂げるだけの、十分な判断力と、十分に心をくだいていく姿勢がなくては、直接民主制であらうが、何であらうが、出来るわけではないのです。ここにあるやうに、「おのれの生業に熟達をばげむかたわら、国政のすすむべき道に、十分な判断をもつように心得」なければ何一つ達成することは出来ないのです。

ここでは個人の生活と、国民の一人としての生活とが、市民一人一人の心の中で、大きくつながってゐるやうな生き方が大切にされてゐる。このやうな伝統こそが、アテネの政治と文化とを支へてきたのだといふことが言へると思ふのです。アテネの直接民主制を、

単なる政治の機構として考へてはならない。一つの政治制度が生まれるためには、それを支へる、その国民の生き方といふものがある。それが、ここでは明確に述べられてゐると思ふのです。それがなければ、民主制だとか言つたつて、何の役にも立たないのです。しかし、ペリクレスはそのやうな生き方をしない人を、「閑を楽しむとは言わず、ただ無益な人間と見なす」と、強い言葉で結んでゐます。

ペリクレスはさらにそのやうな生き方、伝統を貫く力として、「自由の気風」と「勇武の気質」とを挙げてゐますが、ここには、アテネ市民の武人的性格が良く表現されてゐます。彼は「われらは質朴のうちに美を愛し、柔弱に墮することなく知を愛する」とも述べてゐますが、ここには、芸術と知性を重んじながらも、ともすれば陥り易い、柔弱化への傾向を戒めるなど、実に注意深い人間性への洞察が見られます。これらのことは、彼らアテネ市民の人生観が、極めて現実の人間性に、密着したものであったといふことと、彼らの目ざす人間像が極めて総合的な人格を備へたものであったことを示してゐます。しかも、これらのことは、決して、彼らの単なる理想を述べたものではなく、彼らの具体的な生き方そのものであつて、市民全体にとつても、自明のことであつたと言へるのです。

ならば、その伝統は、現実はどう生き返って来るのでせうか。ペリクレスの次の言葉を見てもませう。

「しこうして、すでにかれらの功績の主たるものは述べつくされた。なぜなら、私が国にささげた讚美は、ここに眠る人々や、かれらの行動をわかちあった人々の勇徳によって、真の美を得たからである。」

この文章より前の言葉は、すべて、祖先への讚美であったのですが、それだけで、既にここに弔はうとしてゐる戦死者の功績は、明らかになつたと言ふのです。何故なら、戦死者は勿論のこと、戦ひに参加した人達の勇氣ある行動によつて、祖先への讚美が、「真の美を得た」からである——。伝統とは、紙に書かれたものでもなければ、石に刻まれたものでもない。後につづく人々がその道を生きていつて、はじめて伝統たり得るのですが、このペリクレスの演説では戦死者への慰霊のポイントが、伝統を受け継いだことへの賞讃であつたことは、まことに注目すべきことと思ひます。ここには、歴史といふものの、真の姿が、表現されてゐるといへるでせう。ペリクレスは次に、遺された人達へ語りかけます。

「諸君は、ただ報国のすずめに満足するだけではなく、われらの国の日々の営みを心にきざみ、これを恋い慕うものとならねばならぬ。そしてその偉大さに心をうたれるたびに、胸につよく噛みしめてもらいたい。かつて果敢にもおのれの義務をつらぬいて、廉恥の行ないを深くした勇士らがこの大をなしたのである、と。かれらは身は戦いの巷に倒れようとも、おのが勇徳を国のために惜しむべきではないとして、市民がささげうる最高の寄進をさしのべたのである、と。」

よく味はつてもらひたい文章です。特に前半の、「国の日々の営みを心にきざみ」とか、「恋い慕う」とか、「胸につよく噛みしめてもらいたい」などといふ言葉に見られる、国家や先人に対する細やかな心づかひを偲ばせるやうな表現に注目していただきたいと思ひます。このやうな表現が、自然に出てくるやうな精神的風土が、アテネには存在してゐたのです。彼らの生き方に於いては、自分が生きることと、租先のことを思ふことと、そして、国家のためにつくすこととは、一つのものとして、考へられてゐた。だからこそ、一人一人が行政にも、あるひは立法にも、そして裁判にも参加し得るやうな、さういふシステムといふものが、可能であつたのだと思ふのです。



最後にペリクレスは、戦歿者の遺族に、深い思ひやりの言葉によってこの演説を終へ、ここに、長きにわたるペロポネソス戦争の最初の年の葬礼の儀式が、とどこほりなく終るのです。

「祖国」と「慰霊」と

このペリクレスの演説の主題は、私が演題としてかかげました「祖国と慰霊」といふことに直接につながってまゐります。その表現の中には、古今東西をつらぬく人間にとつての、最も普遍的なものが息づいてゐるのです。しかし、残念なことに、この翌々年ペリクレスは、当時流行りました疫病によって、亡くなります。そして戦ひは、アテネに利あらず、最後は、スパルタに破れてしまふわけです。その不利な軍事情勢の中で、動揺するアテネ市民に、とりわけ青年達に正しい生き方を説き続けていったのが、ほかならぬソクラテスなのです。

ソクラテスと言ひますと、皆さんの中にはいはゆる無知の知を説いたとか、その方法は、産婆術であったとか、哲学者の祖としてのソクラテスの像が描かれてゐるでせう。し

かし、現実のソクラテスは、彼の祖国アテネが、まさに滅びつつあることに、誰よりも深く心をいたため、それを救ふために命をかけた人であったのです。

当時アテネでは、ソフィストの詭弁術が横行して、一身の立身出世の爲の弁論術が、青年の心をとらへてゐました。その中であつて彼は、ペリクレスを尊敬し、祖国を、父よりも母よりも、自分よりも、大切にしたいといふことを残してゐるのですが、祖国を去ることを拒否し、国法に従つて、毒杯を仰いで亡くなったソクラテスの最後は、たしかに祖国に殉じたものと云へるでせう。これらペリクレスにしても、ソクラテスにしても、彼らが生きた現実の姿を直接に偲ぶべきで、それらの現実を遮断して、彼らの主張や行動を、抽象化し一般化して理解しようとするれば、そこには生きた、血の通つた思想を認めることはできない。そこにあるものは単なる、死せる概念にすぎないことになるのです。

歴史を貫く大切なものを守つて戦陣に斃れていく人々、そしてその戦死者の霊を祀り、その志をうけついでいく人々、さういふ人々のいのちのつみ重ねが、国家といふものがつながつていく基本的な姿ではないか。それはこのギリシャであらうと、日本であらうと何の違いもないはずで、祖国を恋ひ慕ひ、亡くなった人たちの霊を慰め、そのためには自

分の命もまた捧げて悔いない、さういふ志の継承が、古来人間が辿ってきた道なのです。

だが現在の日本ではこのやうな人間本来の生き方を大切にし、祖先の足跡を偲ぶ機縁にはほとんどめぐまれてゐない。民主主義も大事だらうし、自由も結構でせうが、それらを支へ、それらにいのちを与へるもの、それは今までに述べてきたやうな人間本来の生き方であり、国家のあるべき姿だと思ふのです。それは共産党が何と言はうと、厳然としてゆるぎない事実なのです。ところがその事実を無視し、あるひはことさらに軽視して、民主主義とか自由とかいふスローガンだけが横行してゐるやうな日本の現状は、古今東西の歴史に照らしてみても、どこかいびつであるとしか言ひやうがないと思ふのです。

日本の歴史をしみじみと思ひ起してみること、そして祖国の為に命を捧げた人々の霊にむかつて謙虚に頭を下げる一瞬をもつこと、すべてはそこから始まるのです。そこに漲る情意の力によって、今の日本を蔽ひつくしてゐる概念の混乱も断ち切ることが出来るに違ひない。

これから四泊五日の合宿が開始されますが、これまでの大学生活の中で欠けてゐたものは何か、そしてまた大学の中に、祖国の生命が蘇る道は何か、そのことについて卒直にそ

して真剣に語りあっていただきたいと思ひます。

## 詩と哲學の恢復を

昭和58年第28回「合宿教室」

——現代青年の課題として——

占部賢志 (福岡県立水産高校教諭・33歳・西南学院大昭51卒)

### はじめに

先程皆さんは、めいめい自己紹介のひとつきを過ぎられました。初見の相手に交々己が名前を告げて、参加の動機なりを語り合ひ聴き合ふ。至極當り前の禮儀であります。先づその意味するところについて一言觸れさせていただきます。初めて顔を合せた相手に前に自分の名前を名乗るといふことは、端的に申しますと、己れの獨立した主體を截然と示すといふことに他なりません。初見の者同士が己が魂の所在を晒し合ふところから眞の對話が胎動するといふ事實に着目したいと思ふのです。

人生の大事といふものは、何か大仰な構へ、肩を怒らした氣負ひから生まれるものがあるまい。それは自分が何時の間にか纏まとつて了つてゐる一切の意匠を剥ぎ取つて、祖國を同じくする同朋として素朴に名乗り合ふさゝやかな世界の實現を前提としてはじめて萌すものと言ひたいのです。共通の祖國を戴く同朋であるといふ紛れもない事實は、私達が自らの意思で選択した結果ではありません。宿命づけられてゐるといふ言ひ方がふさはしいでせう。従つて名乗り合ふことに依つて同朋としての胸襟を開く。さう思へば本合宿の幕明けに自己紹介のひとつきを持つた意味は、國民同朋としての素顔を示し合つたことに他ならないのです。そのことを最初に確認し合つて、本日掲げました「詩と哲學の恢復を」といふ標題をめぐつてお話し上げようと思ひます。「詩」と「哲學」の「恢復」といふのは大袈裟な標題かもしれない。だがこの「詩と哲學」は、私を含めまして現代青年層の中から歛落して了つた象徴であり、私達青年の胸に甦らせるべき最たる課題だと思つてをります。

## 國語と國家像の喪失

皆さんは本合宿に参加されるに際して、合宿申込書の裏面のアンケートにそれぞれ所懐を書き綴っていらっしゃいます。その全てを讀ませて戴きましたが、その中にかういふ意味のことが書かれてをりました。曰く、「自分の言葉を、自前の生きた言葉を持ちたい。實體のないおざなりの言葉が今の大學には餘りに多過ぎる。さういふ世界から脱け出して、魂の入った日本語を持てる日本人になりたい。」と切々と訴へていらっしゃいました。日本語の衰退を嘆く眞率なものでした。全部のアンケートにふれてみて、この参加學生の想ひは、角度は違へ全参加者の等しく痛感されてゐる訴へだな、と思はれてなりませんでした。

言葉といふものは、私達の精神の活動と緊密に結びついてゐる。言葉の衰退は精神そのものの衰退であり、言葉の隆盛は横溢なる精神の活性を示すものでありませう。さう考へますと、今取り上げました一人の参加學生の指摘は、言葉のみならず私達の精神の鈍さへの指摘でもあるのではないかと言へる。では、さういった恐るべき事態は如何にして蔓

延して來たのでせうか。その由来の一つに私は占領政策の影響が多分にあると考へます。吾國の教學の行くへを決定づけたと言はれるものに、「米國教育使節團報告書」と呼ばれる文書があります。この使節團一行は、昭和廿一年三月初旬に來日いたしましたして、凡そ一箇月の視察の結果、日本教學の重大な變革を強制したのです。その重大な一つが、「個人の知性」の徹底した神格化であり、さらに吾が國語國字のローマ字化であつたのです。後者の國語の改革については永久の平和のためには是が非でもローマ字を採用すべきであるといふやうなまことに啞然とする内容を記してをります。勿論その後ローマ字化は採用されませんでした。國語解體の占領政策の意圖は、漢字の略式化と現代假名遣ひの裡に着々と現實化されてをります。この國語の改革解體の背景には、この報告書が如實に示す通り、獨立國家としての日本の國柄を國民の胸から抹消するといふ思想があつたのです。その爲の恰好の材料が日本語であると看破して改革を斷行していったのであります。私達はこの徹底した占領政策に今日もなほ拘束されてゐる。この拘束に順應して來た結果が、當今の大學に見受けられる言葉の衰退を齎らした元凶であると思ふのです。

そして、かういった言葉の衰退が、自然に精神の衰退を招き、その結果日本人の胸から

いつしか日本本來の國家像が消え去っていったやうに思はれます。さらに重大だと思ひますのは、さういふ經緯を辿って、次第に私たちの學問の領域の中に、「日本」といふ視野が失はれ、爲に日本教學の「價値の學問」迄も紛失する羽目に陥つたといふことです。そこで、この「價値の學問」について、或る科學者の指摘をみてみませう。

### 哲學——「價値の學問」といふこと

私は科學の世界については全くの門外漢ですから、こゝで科學論をする積りは毫もありません。たゞ、科學の達人の書き著した物を讀む事は、私のやうな科學の素人は素人なりに閃きが得られるものです。こゝに採り上げた一文は、工學博士である奥田克己氏の學問觀の結晶ともいふべきものです。

「科學は外界を見る學問、したがって、すべてを物として客觀的に冷静に見る學問であり、存在の學問であるが、教學は主觀的に、すなはち感情をも含めて我を内省する學問、したがって心の學問、または價値の學問である。」（『科學の限界と日本の教學』）  
本文を一讀すると篤と了解されるのですが、奥田博士は理屈を説かれてゐるのではない



のです。積年の科學の仕事を通じて得た勘所を、在るが儘の事實に即して淡々と在るが儘に語ってゐるだけなのです。學問にもそれぞれ分といふものがあるのだ。この分を離れて了へば學問は學問とは言へないのだ、とさゝやく聲が聴こえるやうでした。私はすっかり魅了されました。

「客觀的に冷靜に見る」といふ視力の純化は、勿論大事なことでせう。よく觀測を誤るとか手元が狂ふとかいふが、さういふ場合は概してぼんやりしてゐたり興奮してゐたりすることが多いものです。だから失敗をする。勿論體調や感情に左右されることなく正確に「見る」といふ「客觀的態度」は堅持されねばならない。さういふ世界が科學の世界なのです。それは言はず觀測の世界といつてもいい。この觀測の世界では、寸分の狂ひのない視力の純化は不可缺の條件だと言へます。存在する物の性質を誤らずに握むといふ觀察の力を鍛へる學問の領域、それが科學だとこの達人は言つてゐるのです。

ところが奥田博士は、もう一つ、觀察では扱へぬ學問の領域が存在するといふ事實を示唆されてゐるのです。その領域こそ「價値の學問」だと言ひ切つてをられます。實に瑞々しい斷言ではありませんか。目が覺めるやうな指摘です。私が演題に掲げました「哲學」

とはまさに、この「價値の學問」だったのです。價値とは一生における値打ちでせう。さうしますと、この「價値の學問」といふことを私なりの表現で言へば「綜合的的人生觀」と言つてもいゝのではないか。人生觀ならば、人生を「觀察する」ところから得られるものではない。人生といふ舞臺には、踊り込むほかに術はないのです。

では、「綜合的的人生觀」なるものは、人生に踊り込みさへすればたちどころに自得出来る代物でせうか。さうではないことぐらゐ誰でも知つてゐますね。何も無いところから降つて湧くものではない。それはやはり人から人へと傳承されてゆくものだと思ふのです。その傳承を私は學問と名づけていゝと思ふ。私は未だ確乎とした「綜合的的人生觀」を体得してゐるわけではありませんが、一瞬、人生の値打ちらしきものを垣間見る感じは経験したことがあります。人生の決斷を迫られる時、あるいは難局に立ち向ふ時、さういふ土壇場は誰しも経験するものです。私にもさういふ人生の緊張の一瞬といふものがありました。人生が人生である以上、これからも幾度か訪れるものと覺悟してゐますが、さういふ二進も三進も行かぬ閉塞状態に陥つた時に、其處から脱け出したいと願ふのは、誰憚ることのない人間の本然の欲求でせう。私の場合、脱け出したといふあへぎの極限に天啓のやう

に浮んで來たものは、或る確かな人生を全うした人の姿でした。一つの決斷を下し己が人生を選択してゆく獨りの男の背中が見えて來たのです。そして、あの人ならどうするだろう、どういふ決斷を下すだらうか、さう自問自答を繰返してゐますと、吾知らず一つの決斷が促うながされてくるのでした。かういふ經驗を顧みますと、その核心には、己が人生の範とするに足りる先達の人生から洩れてくる囁きに知らず識らず聴き入つてゐる自分の姿があるのです。この囁く聲の聴き方、聴こえ方は、誰しも一様でないことは言ふ迄ありません。人生の體驗の仕方が皆違ふやうに、囁く肉聲の色彩いろどりもやっぱり違ふものです。全く自分の聴き方で聴きとつて人生を復原してゆくのです。私は私自身の經驗を顧みてさう思ふ。確かに心の深部に囁く聲といふものは、「客觀的に冷静に見る」ことは出来ない。これはまさしく簡明な主觀の世界なのだ。徹底した主觀の世界であつて、客觀的に普遍的に正しいのかどうか、判斷の加へやうのない世界です。従つてそれは、詮ずるところ、信ずる力の強弱かかはに關するものとしか言ひやうはないのです。見て確めることは不可能なのです。から、行き着くところは、信ずるかどうか、といふ精神の勁きよさのほかにない。信じた瞬間、何ものにも換へ難い力となつて私を突き動かす。ところがさういふ世界が學問の領域の中

に存在すると奥田博士は言はれるのです。博士は、この學問を「日本の教學」に求めてをられる。日本の教學とは、さういふものだとか指示されてゐる。その學問の世界、それは、もつと端的に言ふならば、精神の歴史的傳承の世界とも言へませう。

ではその學問のありやうを、それを體現した一人の人間像に即して考へてみたいと思ひます。

「詩」と「哲學」の體現者―遊歴の中の吉田松陰―

吉田松陰は、天保庚寅元年（一八三〇年）八月四日、長門國萩の東郊松本村に、父杉百合之助常道、母瀧の次男として誕生。松陰五歳の時、父の弟吉田大助賢良に世嗣がゐなかつたので、吉田家の養子となり家督を繼ぐことになります。この吉田家は、代々山鹿流兵學を以って三十七萬石の毛利氏に軍學師範として仕へ、家傳の兵學を藩學明倫館で講ずることが主な任務でした。天保六年、叔父吉田大助の死後、六歳の幼童たる松陰は、もう一人の叔父の薫陶の間に家學復興のための一心不亂の少年時代を送つてをります。このやうな松陰の緊張した成長に併せる如く、吾國を圍む時勢は次第に急を告げてゆく。十一歳の

幼少年ら藩主の前に『武教全書』戦法篇三戦を講じて藩主毛利敬親を驚嘆せしめてゐた頃、隣國清ではアヘン戦争が勃發し翌年清は敗北を喫し、列強の波は亜細亞全体を震撼させ吾國に迄押し寄せてくる勢ひを示し始めてゐました。松陰十五歳から十七歳の三年間にも、佛船琉球に來航、英船琉球に來航、露船松前に來航、さらに孝明天皇踐祚の弘化三年（一八四六年）には、米使浦賀に來り通商を求め、佛船も再び長崎に來航するといふ動亂の兆候が見えて來るのです。松陰の一生を通覧しますと、まさに迫りくる國難に符合する様に成長してゆく人生であると思はれる。私は歴史の不可思議さをつくづくと感じないではをられません。

いづれにしても國防の任を意識し自覺的に成長を續ける少年松陰の胸には、海外諸蛮の有様が如何なるものであるか、熟知したい欲求がふつと湧き上つてゐたといへませう。かうして松陰は胸に充満する欲求に堪へられなくなって、つひに意を決して遊歴の途に上るのであります。折しも松陰廿一歳の時であります。爾來、全国津々浦々に至る迄凡そ五年間の遊歴を續けますが、各地歴訪の折々に書きつけた日記を中心に松陰の「詩」と「哲學」の自得の仕方をしたのでみたいと思ひます。

嘉永三年（一八五〇年）八月廿五日、廿一歳を迎へたばかりの多感なる青年松陰は、陋村、萩の松本村を發して九州遊學の途に上るのです。私はとりわけこの頃の松陰が無性に好きです。遠路を遠しとせず、心の赴く儘に小倉、佐賀、大村、長崎、平戸、天草、島原、熊本、柳川、久留米等の旅程を健脚で歴訪、十二月廿九日に帰宅してをります。この間に認めた紀行文が『西遊日記』として現在に傳へられてゐます。三十歳で生涯を閉ぢた松陰の年譜を御覽いたゞくと判ります通り、廿代後半を殆ど幽囚の身に過した松陰にとりましてその前半生の五年間は、恰も後の幽囚を予感してゐたやうに祖国の各地を普く訪ねてゐるとも言へるのです。

ところで、當時の徳川時代は同時代のヨーロッパの文明國に勝る程の知識人口の層がありましたし、賢者は江戸に集中してゐる譯ではなく、全國津々浦々に學を講じてをったのです。従つて學に志す俊秀は自然遊歴の旅を試みて、己が志を鍛練するといふ次第でした。だが、藩外への留學は、その滞在期間がやかましく、とりわけ家督を繼いでゐる者には、容易に許可は降りないのが實情だったので。松陰自身もその一人であり遊學の許可を貰ふのは竝大抵のことではありませんでした。「藩臬<sup>げつ</sup>嚴重なるに羈<sup>きせつ</sup>縛せらる。」（『葉山鎧<sup>が</sup>

軒に與ふる書』嘉永二年）と自ら申してをりますやうに藩の允許を得るまでずいぶん難渋したやうであります。

さてかうした經緯を経て勇躍出發する松陰の胸には、二つの目的が秘められてゐました。一つは、平戸を訪ね、山鹿流兵學の宗家の一人山鹿萬介並びに以前から欽慕してゐた佐藤一斎の高弟葉山左内（號を鎧軒といふ）の門を叩くことであり、今一つは、吾國が唯一海外に窓を開いてゐた長崎に赴いて是が非でも動亂する海外諸邊の事情を自分の眼で具さに調査したい、といふことです。この燃えるやうな期待感に胸を弾ませ乍ら、松陰は『西遊日記』の序にかう書きつけてをります。

道を學び己れを成すには、古今の跡、天下の事、陋室黃卷にて固より足れり。豈に他に求むることあらんや。願ふに、人の病は思はざるのみ。則ち四方に周遊すとも何の取る所ぞと。曰く「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは觸に従ひて發し、感に遇ひて動く。發動の機は周遊の益なり」と。西遊日記を作る。

（『西遊日記』一序）

松陰は「自己一身を鍛へるといふ方策としては、自分の部屋にあって先賢の書を徹底して讀破してゆくことで充分である。この基本的な地道な勉學を離れて他に何を求めるといふのか。だが思ふに、人はこの地道な勉學の世界にゐて遙かに天下を想ふ心の働きをしないやうだ。さういふ停滞した精神の病に陥つたままで、徒らに師や友を求めて四方に遊學したところで一體何が得られるといふのか」、と先づ自問してをります。たしかにそれは一理ある、だがさうはいつても心中やはり已むに已まれぬものがあるのだ、松陰はさういふ己れの發心を書き記すのです。

「心はもと活きたり」、心といふものの本然の姿は生きて働くところにある、生命の躍動する姿こそ心ではないか、と松陰は喝破するのです。生命感あふるゝ心の活動には、必ずや「機、」人生のチャンスが訪れる筈だと言ふのです。否、チャンスといふものは、與へられるものではない。心の躍動の中におのづから生れるものだと言つてもいゝでせう。心がピチピチと躍動さへしてゐれば、手應へある物に觸れた瞬間人生は大きく勇躍する。さういふ予感を籠めて「機なるものは觸に従ひて發し、感に遇ひて動く」と信じて已まないのです。ですから松陰にとって、この遊歴の眞意は、新奇の學問を他郷に求めるといふこと



ではないのです。學問以前の、學問に生命を與へる心情の豊かな「發動の機」を周遊によつて體得するといふところにあるのです。それこそ周遊の最大の益だと言つてゐるのです。學問とそれを支へる心情が乖離する危さ、そのことを松陰は一番想つたのでありますまいか。學問が活學問となるもならぬも一に懸つて「觸に従ひて發し、感に遇ひて動く」己が心の發動次第である。かくして嘉永三年八月廿五日の早朝、初秋の澄み透つた大氣を胸に吸ひ込み乍ら獨りの青年は、一步を踏み出したのだと思ふのです。

さてかうした松陰の初志は九州滞在中見事に稔つてゆきます。こゝでは精しい消息は省きますが、二人の傑物との出會を通して松陰の發動の機をみたいと思ふのです。

山坂嶮岨の地を越えて平戸に着いた松陰は、旅装を解く寸暇も惜んで宿願の葉山左内（鐙軒）訪問を果し、平戸滞在中足繁く通つてをります。「鐙軒先生を訪ふ」といふ一篇の漢詩に松陰の心情が見事に表現されてゐます。

經を説き史を論じ又兵を談ず　　着實の工夫細評を得たり

侍坐端なく閑話久し　　月輪來り照らす此の心の明

（『西遊詩文』）

宿願の師に見えた静謐な感動は、詩句の隈々に確かに鳴ってゐますね。「侍坐端なく閑話久し」、鎧軒先生の傍らに親しく坐して學問の在り方を淡々と語り過す一刻、まさに松陰の歡びを聴く思ひです。「月輪来り照らす此の心の明」、師と語らふうちにいつしか明月が秋の夜空に間近く昇り静澄に吾が心を照してゆく。美しい詩情を湛へた言葉ではありませんか。「發動の機」を求めた松陰は、「侍坐端なく閑話久し」といふ貴重な體驗を得る。といふより「發動の機」なるものが松陰にこの上もない體驗を與へたと言ふ方が正確かも知れません。それは何も松陰だけに限るものではない筈です。「侍坐端なく閑話久し」といふ師との交流は、時代を越えて在るべき眞實の學問の原型ではないでせうか。

かうして松陰は師弟の交流を結び、果敢なる研鑽を積み乍ら予定外の熊本へ足を延ばします。この熊本の地で終生の友宮部鼎蔵と邂逅することになるのです。松陰はこの初めての出會ひの心持をかう綴つてをります。

十二月十二日晴。池部に至る。宮部來る。相伴ひて莊村に至る。談話深夜に至る。是の夜、月明朗、単行して清正公に詣づ。豪氣甚し。宿に還れば人定しつまつる後なり。

實に簡素な日記ではありませんが、宮部鼎蔵との初對面の様子が行間に立ち現れてくる感  
 じです。宮部鼎蔵は松陰と同じく山鹿流兵學の師範で、質實醇厚で義に勇む卅歳の士でし  
 た。この後江戸にて再會し生涯の深交を持つ二人の男の初見は此處に始まってゐるので  
 す。松陰は、この日を迎へる迄、同學の友とかくも意氣が溶け合ふ鮮烈な經驗はなかつた  
 でありませう。打てば響くが如き談論風發する様、それはまさに魂の呼應する世界だつた  
 と思ふのです。ふと氣づくとは夜はすっかり更けてゐた。別れを告げて戸外に出ると寒月は  
 皓々と輝いてゐる。高鳴る昂揚抑へ難く、自然清正公の廟所に詣でる。その道すがら沸々  
 とこみ上げてくる胸の高鳴りを「豪氣甚し。」と言ひ表してをります。凍てつく眞冬の夜  
 氣の中を歩む松陰の体内は眞赤に熾おこつた炭火の如く滾たぎつてゐたことでありませう。己が心  
 の本然の姿をその儘發露せんことを願ひ、つひに千載一遇の「發動の機」に立ち合へた歡  
 び、その明朗な歡びの聲が、実に簡明な言葉にはちきれんばかりに含蓄されてゐるではあ  
 りませんか。

「宿に還れば人定る後なり。」止宿に戻ると、ものみな寢静まり寂として聲なし。邊り  
 は深閑としてゐる。だが床に就いても松陰の胸中には、魂と魂が交流し合ふ内的體驗の鼓

動がびんびんと反響してゐた筈です。

青年松陰は、この初の九州遊歴によって學問知識の獲得ばかりではなく、出發に際して自ら誓つた通り、吾が心が「觸に従ひて発し、感に遇ひて動く」様をまざまざとみたことでせう。一旦發動し始めた活きた心の躍動はやむことなきうねりとなって一筋の道を開いてゆくことになる。さういふ意味で、この「發動」實驗の旅は松陰の人生を人生たらしむる一里塚となるのです。

私は、こゝで、皆さんに向かつて、松陰に習へ、と構へて言つてゐる積りは毛頭ございません。たゞ、本合宿研鑽の主題として掲げる「學問」「祖國」「人生」といふ退つ引きならぬ課題もそれに取り組む自が主體性の中に「心はもと活きたり。」と翻然として自覺し得ねば、課題が熟す機は見えて來ないではないか、と思ふのです。合宿への參加動機は各人各様に違ふでせう。違ふのが當然でせう。だが如何なる參加動機であれ、申込書を認める時の胸の奥には、何かを求めようとする一種の發心と予感が兆してゐた筈だと思ふのです。勿論不安もあつたでせう。松陰にだつてなかつたとは言へません。併し、多少の不安はよぎつたかも知れませんが、それにも増して鬱勃と發心が湧くからこそ松陰は遊歴の途

についたのだし、皆さんは一通の申込書を投函してこの雲仙に登って來られた譯でありませう。その動機に形を與へたものが、松陰にとつては『西遊日記』の序文であり、四カ月の旅程の體驗告白なのです。「心はもと活きたり。」といふ自覺の原型は、すでに皆さんの身體に宿つてゐるのです。この原型を顕在化せしめ形を與へてゆく旅程が、私達にとつては本合宿の日程の一コマ一コマであると私は思つてをります。其處で鎧軒先生に出會ふか、宮部鼎蔵を相識るか、一に懸つて「觸に従ひて發し感に遇ひて動く」吾が心の發動にあるのです。

ところで、活きた心といふものは昂揚感だけで満たされてゐるものでもありません。時には挫けて嘆いたり、苦しんだり、はた錯亂したりするものでもあります。だがそれは本來心が生きて動いてゐる紛れもない證左ではないでせうか。さういふ時機は何も私達ばかりでなく、松陰自身にも訪れてゐるのです。たゞ松陰の場合如何なる事態であれ、心が空白になつて了ふことがないのです。つまり空想の世界に心を委ねることだけはしないのです。常住坐臥、具體的課題の前でのみ嘆き苦惱し喘ぐ、それが松陰の人生なのです。さて、さういった内心の千變萬化する流動のいや果てに如何なる發見をするのか、しばらく

みてゆきたいと思ひます。

年の瀬もいよいよ押し迫った十二月廿九日に帰萩した松陰は、程なく「軍学稽古のため江戸差登され候」といふ辞令（嘉永四年正月廿八日付）を受けます。願ってもない藩費による江戸留學が決定したのです。嘉永四年（一八五一年）三月五日、藩主參府に扈從して萩を發ち、四月九日江戸に到着してゐます。爾來櫻田の長州藩邸を居所と定めてすさまじいばかり刻苦勉勵に寧日なく努めてゆきます。經學、兵學の師についての聴講、輪講は月に三十回、その上月二回藩主へ進講、さらに同藩同輩の爲に大學論語の會讀を主宰し、或は再會した宮部その他の同志と兵書會讀研究会を開く、亦一方では劍術や馬術にまで手を染める有様で、家兄梅太郎に宛て、「何分會を減じ候はではさばけ申さず候。」（五月廿日付）と書き送る程の實に猛烈果敢なる獅子奮迅ぶりでした。

併し、學に努めれば努める程、松陰の眼には、「江戸にて兵學者と申すものは尊程には之れなき様」（六月二日付家兄宛書簡）に映じて來るのです。六月下旬に至りますと、「江戸の地には師とすべき人なし。」（友人中村道太郎宛書簡）と斷ずるやうになり、九州遊歴の折の、あの澎湃として湧いた感奮は見る影もなく、寂寥とでもいふべき心境に達してを

ります。

そしてつひに「方寸錯亂」の事態に立ち至るのです。八月十七日付で家兄に宛た書簡にその苦悩の様子がありありと綴られてゐます。一部抄録（摘出）してみませう。

是れ迄學問<sup>とく</sup>も何一つ出来候事之れなく、僅かに字を識り候迄に御座候。夫れ故方寸錯亂如何ぞや。

先づ歴史は一つも知り申さず、此れを以て大家の説を聞き候處、本史を読まざれば成らず、通鑑<sup>つうかん</sup>や綱目<sup>こうもく</sup>位にては垢ぬけ申さざる由、二十一史亦浩辭<sup>こご</sup>なるかな。頃日<sup>ころひ</sup>とほとほ史記より始め申し候。——（中略）——

矩方<sup>のりかた</sup>も兵學をば大概に致し置き、全力を經學に注ぎ候はゞ一手段之れあるべく候へども、兵學は誠に大事業にて經學の比に非ず。且つ代々相傳の業を復興する事を圖らずして願<sup>か</sup>つて他に求むる段、何とも口惜しき次第申さん方もなし。方寸錯亂如何ぞや。——

（中略）—— 僕學ぶ所未だ要領を得ざるか、一言を得て而して斯の心の動揺を定めんと欲す。萬祈萬祈。

松陰は萬感の期待を籠めて江戸の多岐に互る學問に、渾身の力で臨んだのですが、とゞの詰り「方寸（胸中）錯亂」の状態に陥ってゆくのです。歴史を首め多岐に互る學問を未だ統べ修めることの出来ない喘ぎ、次いで經學との相剋の中で「代々相傳の業」であるところの山鹿流兵學の恢興に専心し得なかつた自省と名状し難い口惜しさ、これら渾然となつた嘆きは、行間から聴こえてくるやうな気がしてなりません。勿論、松陰の激しい苦悩と動揺の振幅は、たゞ漫然と坐してゐて生まれ出たものではありません。當代學風の懷に自ら飛び込んで初めて經驗する、のるか反るかの土壇場に來たのであつて、放心の状態からはかかる正念場に到達すべくもないのです。

松陰は、初めて見舞つた學問の難局の渦の眞つ只中にゐて、己れの心の動揺をしっかりと見詰めてゐるのです。「方寸錯亂如何ぞや。」と書きつける松陰の心情は、痛覺を伴つて迫つて來ます。無難に難局から身を躲す男ではありません。誤魔化すことの出来ない程多岐に互る學問に立ち向かつたからこそ自己一身の危機が到來したのだと言つていゝでせう。敢へて申しますと、「方寸錯亂如何ぞや。」といふ地點に迄至り得ないやうな脆弱な精神では、見えてくるべき筈の「發動の機」はいつかな訪づれることもないでせう。松陰



は、「方寸錯亂」の土壇場から眼をそらさず、見据ゑるうちに「僕學ぶ所未だ要領を得ざるか」といふ風に氣づいて來るのです。こゝで言ふ「要領」とは、網の目のやうに込み入る學問百般を巧みに體系化する學問方法だけを指すのではありますまい。それはやはり、學問の勘所と呼ぶべきもの、種々の學問を束ねて活かす求心力の如きものが得たい、といふことではないだらうか。文脈上さう思はれてなりません。「哲學」つまり綜合的的人生觀の希求ではないのかと思はれて來るのです。人には危機に陥れば本能的に復原力が働くやうに、學問を深化すればする程、復原力としての綜合的的人生觀が自然要請されて來るのではないか。奥田博士の言葉に倣なまつて言へば、「存在の學問」と同時に翻然として「價値の學問」を自己一身の内部に打ち立てねば人としての本領は完成に向はない、人間らしい生き方は出來ない、と断じていゝのであるまいか。本合宿がかうやって營まれることになつたのも、参加者全員のさういふ眼に見えぬ人間本然の復原力の然らしむるところに依るものと思はれてなりません。

さて其處で松陰は如何なる姿勢をとらうとするか。結びに言ふやうに、「一言を得て而して斯の心の動搖を定めんと欲す。萬祈萬祈。」と願ふのです。錯亂の渦の中で、自分の

行く末を截然と示してくれる一言の囁きを聴きとるべく、精神を一點に集中し始めるのであります。松陰は、江戸滞在の數ヶ月、幾多の學問の様子を垣間見たことでありませう。未知の學問の集積をうんざりする程その兩眼に焼きつけた。だがさういふ觀察の初體驗は、刻苦勉強したとはいへ、「方寸錯亂」を齎すばかりとなった。觀察の學、存在の學といふものは、この男には無縁の筈なのですが、知らず識らずの裡にさういふ態度に陥ってゆき始めてゐた、と言つても過言ではないでせう。識らうと焦る餘り「觀察」の傾向のみを走つて了ふ。これでは駄目だ、といふ意識を、松陰の人間としての本能が目覺めさせるのです。この瞬間、『西遊日記』に自ら誌した序をはたと思ひ出したかも知れません。「發動の機」それは何處からかそつと囁きかける一言を「聴く」ことだ、聴いてたちまち信ずる、さういふ内的經驗が吾が學問の中心ではないか。勿論松陰は其處迄は言つてをりません。勝手な私の忖度に過ぎませんが、さういふ松陰自身の反芻をこの書簡の餘韻として感じないではをられないのです。

かくして松陰は、再び、「一言」を聴かうとするところに新たなる「發動の機」を求めて立上がるのです。その機縁を得たのが、九州遊歴の折り知己となつた宮部鼎藏なので

す。宮部と共に兵學者として露艦頻りに出沒する東北踏査を決意します。「自力遊歴」を藩府に願ひ出て、許可を貰ひましたが、丁度その折、これも江戸滞在中相識った知己江幡五郎が南部藩の内訌で獄死した兄の敵討のため同行を求めて来たのです。三人は赤穂義士討入りの十二月十五日を以って出發の日と約します。ところが松陰は許可は降りてゐるものの關所通過證である「過書」の交付を未だ受けてはゐませんでした。熟慮の末、松陰は脱藩を斷行するのです。當時、脱藩は先づ死罪が相場です。松陰にも藩にとりましても一大事件となつたことは申す迄ありません。この事件の核心を松陰自らかう明かしてをります。曰く、「余は則ち自ら誓ひし所を行ふ。國家に負せむくを顧みざるには非ず、誠に丈夫の一諾いちだくゆるが忽せにすべからざればなり。」（嘉永五年一月十七日『東北遊日記』）と。

非業の最期を遂げた亡兄の仇敵を討たんとする獨りの知己の哀切な迄の眞情に松陰は胸を突かれたのです。千々に亂れてゐた松陰の心の濁りを拂ふやうに知己の語る言葉は鮮烈に響いて來たことでせう。まさしくそれは「觸に従ひて發し、感に遇ひて動く」紛れもない體驗だつたと偲ばれます。たとひ如何なる處罰が待ち受けてゐようと、この共感に依る「丈夫の一諾」は、忽せに出来るものではなかつたのです。この時松陰は、区々たる一

身の罪を想ふより、「方寸の錯亂」を脱け出してゆく吾が心の「發動の機」に歡びを見出したこととせう。顧みますと、人生には、選擇に迷ひ逡巡する時といふものが誰しもあると思ふのです。ためらひを激しく覺える事態は必ずや訪づれる。併し、どうであれ、自らの責任において選擇の斷を下してゆかねばならないのです。それが、「生きる」といふことではないか。松陰は、その選擇を「丈夫の一諾」に求めたのです。この勁い決斷の意志、それは心の動搖を定める「一言」の囁きを信じたからだとも言ひ得ると思ひます。

かうして松陰一行は相前後して先づ水戸に赴くのです。水戸藩は、二代藩主水戸光圀以來この時の藩主水戸斉昭に至る間、藩主を中心に日本の歴史を明らかに『大日本史』の編輯を繼續してをり水戸學と呼ばれる国学の中心地でした。亦、當時吾國に迫りつゝあつた列強の波に對して敢然と對處しようとする姿勢が最も強い藩でもあり、諸國有志の士にとつては渴望の地だったので。松陰はこの水戸に一箇月餘り滞在してゐまして、後に此処での強かな思想體驗を回想してをります。

客冬水府に遊ぶや、<sup>はじ</sup>首めて會澤・豊田の諸子に<sup>いた</sup>踵りて、其の語る所を聴き、<sup>すなは</sup>輒ち嘆じて曰く、「身皇國に生れて、皇國の皇國たる所以を知らざれば、何を以てか天地に立た

ん」と。帰るや急に六國史を取りて之れを読む。古聖天子蛮夷を懾服するの雄略を觀る毎に、又嘆じて曰く、「是れ固に皇國の皇國たる所以なり」と。〔米原良三に復する書〕  
嘉永五年六、七月頃）

「會澤・豊田」と申しますのは、ともに水戸學の中心人物である會澤正志齋と豊田彦次郎を指します。水戸學雙璧の傑物に見えた松陰は、その語る言葉の一言一句に身を乗り出して聴き入ったと思はれます。しっかりと傾聴して松陰は重大な示唆を與へられたと思ひ知った。「身皇國に生れて、皇國の皇國たる所以」を知るといふ大事、自分のこれ迄の學問にはこの大事が脱落してゐたと翻然として悟るのです。松陰は、新たな學問の一つとして水戸學を學んだといふことでは勿論ありません。さうではなく、水戸學といふ學風を素材にし乍ら日本たる所以であるところの國柄を學ぶ大事こそ學問の勘所、「要領」ではないか、と駭然として開眼するのであります。

國史に学び、吾國の國柄を知る、といふ事は、自分の正體を知るといふことではありませぬか。松陰は、水戸學の傑物と語るうちに、何處からとなくさう呼びかけて來る囁きを、聴いたのだと私は信じます。

私は、松陰の遊歴を素描しながら、「心はもと活きたり。」と信じて遊歴を續けて心蹟百變のいや果に、「學問」と「人生」の要諦である「祖國」への開眼に至る迄の偏歴の一端に觸れました。其處には、感激もあれば錯亂もある、そして、甦る道もあるのです。それは松陰の心のうねりに發してをります。

先程申しました通り、嘉永三年、松陰はこの長崎を訪れてをりますが、その松陰の魂を籠めた遊歴の道筋を、皆さんは今、確かに踏みしめてこの雲仙に辿り着かれたのです。であれば私達も私達一人一人の流儀で吾が心をうねらせながら、私達を拘束する「戦後」から甦る道を求めようではありませんか。

標題の「詩」と「哲學」について不十分な言及になりましたが、「詩」とは、心の發動であり、そこから直下に直叙される言葉であります。「哲學」とは、日本人としての総合的的人生觀だと言つていゝでせう。その體現者としての松陰像を皆さんの前に示したといふことを以つて本合宿の導入講義に代へさせて戴きます。

## 戦後を考へる

昭和60年第30回「合宿教室」

——精神の自立のために——

今林賢郁（新日本製鉄㈱機械プラント事業部・42歳・早稲田大昭43卒）

### 現代日本の状況

昭和もすでに六〇年、大東亜戦争が終りまして四〇年の月日が流れました。私は今、四一歳です。といふことは、私はまさしくこの戦後を生きて来たことになりましたし、諸君が二〇歳前後としますと、諸君はこの四〇年の後半の二〇年を生きたことになりました。そして、諸君は私が学生時代の頃にお生れになったといふ関係にあります。いずれにしましても、私も諸君たちも、この戦後の中で育ち、今日に至ってゐるわけです。そこで、この戦後とは一体どういふ時代であったのかをふり返ってみることは、私どもにとって大変意味があるかと考へ、本日のテーマを「戦後を考へる」とした次第です。もとより、戦後を概観

するといふやうなことは、私ごとき者がよくなしうることではございませんが、できる限り自分の経験にそくしながら考へてみたいと思ひます。

さて、私どもは今、どのやうな社会に生きてゐるのでせうか。その見方について、ここに非常に対照的な二つの文章があります。最初は、山崎正和氏が昭和五十九年に書かれた文章（『自己発見としての人生』）からの引用です。

「今後の人間はひとりひとり自分の周辺の世界に生き、そのなかの小さな変化に驚き、そこから最大の達成感をひきだす感覚の訓練をするほかはない。……そうして得られる生きがいや三日しかもたないとしても、必要なことは、その現実に自暴自棄にならず、いかに賢く、その三日しかもたない生きがいや積み重ねるか、という工夫であろう。」

少し補足します。山崎氏は、以前から自分たちが生きてゐる時代の歴史、同時代史を書いておられました。昭和五十三年には、「おんりい・いえすたでい<sup>60s</sup>」——ほんの昨日の六〇年代——といふ書物を出されました。二年前には、中央公論に「新しい個人主義の予兆」、続けて「顔の見える大衆社会を目指して」といふ論文ができました。それが最近単行本になって『柔らかな個人主義の誕生』といふタイトルで出版されました。山崎氏によれ



ば、六〇年代は国家が明確な主題をもち、国家が時代の主役をつとめ得た時代であった。その時代のスローガンは、経済成長であり、国際化であり、情報化であった。そのあとに続く七〇年代はと言ふと、これは「視界ゼロの時代」だとか、「海図なき時代」といふことで、国家が攻撃的な目標を何一つ持ち得なかった一〇年であり、この年代の特徴は、国家のイメージが著しく減少したことであった、と言ってをります。六〇年代みたいに国家が大きな目的を目指して動く戦闘集団から、非常に実務的な集団に変わっていったのが七〇年代といふのです。そして、国家のイメージが減少した結果として、国民の関心が国家から、より小さな社会に移って行き、国民個々人の帰属関係も、国家といふものから、いくつもの共同体に、単一の個人が所属していくやうになる。これからの個人は、さういふ小規模な共同体に守られ、その中で生き甲斐を見出しながら生きていくことになるのではないだらうか。そしてその社会は、従来の産業化時代とは歴然と違ふ、「個人の顔の見える人間関係が重視される社会」の到来になるのだと、言つてをります。

この脈絡で引用文を読みますと、「自分の身近の世界」とは、小規模な趣味の共同体であり、その中で「小さな変化に驚き」、そこから「最大の達成感をひきだす」、つまりその

中でより個性的な自己を発見することに努める。その結果得られる生き甲斐が、「三日しかもたないとしても」、その生き甲斐をいかに賢く積み重ねるかが、今後の課題である、といふことになります。今の社会が妙に柔軟で、何とも実体がつかみにくいといふ状況の中で、山崎氏のこの指摘は、未来の可能性を提示したものととして説得力をもつてゐます。しかし疑問に思ふところもあります。その共同体が生き甲斐を生むためには、共同体自身が価値あるものでなければならぬでせう。その価値はどこから生れるのか。自己を越えた次元に価値が設定されることが生き甲斐を生むためには必須ではないか、その価値基準が不明確な共同体であれば、そもそも生き甲斐など生まれないのではないか、といふやうな点です。それはそれとして、山崎氏の一連の文章は、非常にわかりにくくなった現代社会の中で、一つの行動のスタイルを示したものととして、すぐれた指摘だと思ひます。

次ぎは村松剛氏の『豊かな社会の相続人たち』といふ一文です。これは、昭和五十八年の論文で、山崎氏の論文と同じ時期ですが、文章のトーンが、山崎氏と大変違ひます。山崎氏の論文が未来の可能性を示した楽天的な見方だとすれば、これは相当悲観的な現代日本観といふべきでせう。

「豊かさとは自由とのなかで、キリスト教世界は自分の文明に往年の自信をもち得ないでいる。……それでもヨオロッパはその過去への誇りと老練とによって、アメリカは若さによって、あるいは現在の危機を乗りこえるかも知れない。」

日本は歴史の根から切りはなされたまま、精神的な昏迷のなかを漂っているように見える。……自己の文化への——つまりは生き方への——誇りなしには、危機の認識もそれを乗りこえようとする活力も、生じては来ないだろう。」

この論文の最後部にこの一節が出てくるのですが、村松氏の危機感がこの論文全般に読みとれます。これは全体が教育論になってをりまして、麻薬の問題、校内暴力の問題、セックスの問題などにふれながら、今世界がどういふ状況に陥つてゐるかを述べたあと、しかし、「ヨオロッパはその過去への誇りと老練とによって」、「アメリカはその若さによって」この危機を乗りこえるかもしれない。だが日本は、「歴史の根から切りはなされたまま、精神的な昏迷のなかを漂っているように見える。」そのやうな状況に陥つた根本原因は、戦後の教育にある。戦後の教育界を支配したのは、「デュイ主義とマルクス主義のカクテル」であり、そのカクテルが戦後社会に成立して絶大な威力を発揮した結果、今の精神

の混迷を生み出した。だから、今必要なのは「敗戦後の教育の基本理念の総ざらい」である、といふのが村松氏の指摘です。

「歴史の根から切りはなされたまま、精神的な混迷のなかに漂っている」との発言には同感を禁じえません。それでは、「歴史の根」から切りはなされたのはいつごろからかと言ふと、やはり、四〇年前の敗戦に戻らざるを得ません。そこで、この敗戦と、それに続く戦後の風潮を少し考へてみたいと思ふのです。

### 敗戦と戦後の風潮

あと一週間もしますと、また終戦記念日、八月十五日が巡ってまいります。四〇年前にわれわれの祖国はその存亡をかけて戦ひ、そして敗れました。それがどういふ戦ひであったのか、私どもは先入感をすててその実体を明らかにする必要があると考へます。ともあれ、それでは、四〇年前の八月十五日とはどんな日であったのかを想ひ起してみませう。

十二時、時報

君が代奏楽。詔書の御朗読。

やはり戦争終結であった。

君が代奏楽。

つづいて内閣告諭。

経過の発表。

——遂に敗けたのだ。

戦いに破れたのだ。

夏の太陽がカッカと燃えている。

眼に痛い光線。

烈日の下に敗戦を知らされた。

蟬がしきりと鳴いている。

音はそれだけだ。

（高見順『敗戦日記』）

その日は、「夏の太陽がカッカと燃え」、「蟬がしきりと鳴いている」だけで、すべてが静かであった。しかし、その静寂は瞬時であり、この八月十五日以降、日本を支配したのは、所謂戦後思想といふ声高な叫びであったのです。昭和二十年八月十五日をもって日本

には決定的な変化が起った、われわれはこの日をゼロとして、新しい出発を始めるんだといふ考へが拡っていったのです。知識人の間では「八月十五日の跨ぎ」といふことが言はれました。八月十五日を境にして戦前・戦後といふ価値観の違った二つの世界を、いかに巧みに跨いだかといふ意味です。かういふ考へ方を主流としてこの戦後は始まったのであります。この風潮に対する痛烈な批判として、例へば、西尾幹二氏の『私の戦後観』（昭和四十年）があります。

「疑いようもなく挙国一致の体制で行ったはずのあの国運をかけた一つの『事業』は、『侵略戦争』の名で弾劾され、一億こぞって全世界に懺悔しなければならぬ『犯罪行為』として、日本人自らの手で公然と非難されるにいたったのだ。一体いつから日本人は、東京裁判の判事や検事と同じ口調で、自分達自身の過去を裁くことに平然と矛盾をかんじなくなったのか。私にはまことに不思議に思われてならないのである。」

自分たち自身で自分たちの過去を裁く。よく言はれる過去の清算です。この時期は、このやうな居丈高な清算論や断絶論が横行しました。そして、この清算論は戦後の自己を正当化するためになされました。すなはち、自分が戦争とは無関係であったといふ、戦争か

らの免罪符を得るために論じられたのであります。この風潮の中で、新しい出発は語られなければ、敗戦の悲しみといふのはほとんどありませんでした。

西尾幹二氏の論文と同じ頃に、佐伯彰一氏は『日本を考える』（昭和四十一年）を書き、戦後の風潮に対して疑問を呈しました。

「敗戦から眼をそらすことは、戦争中、戦前という過去からの連続をすり抜け、眼をつぶってすまそうとすることに通ずる。たまたま過去への眼を向ける時は、たとえば『戦争責任』の名において始めから自分を棚に上げた他人の断罪をめざしてのこと、つまり、自分と戦争との無縁を証明するためにすぎなかった。そして、敗戦が一切の端緒の時だ、などという。しかも奇怪なことに、敗戦自体には目をふさいだままで、そういうのである。」

「敗戦自体には目をふさいだままで」、「敗戦が一切の端緒の時だ」と主張し、そして、敗北がただちに新しい信念——進歩、民主主義、自由——につながるといふのはいったいどういふことかと、佐伯氏は問ひかけます。あれだけ全力を挙げて戦った戦争、そして、敗戦から被占領といふ切実な経験をいとも簡単に乗りこえたのは、いったいどういふこと

なのだらうと問題を投げかけ、これはやはり、敗戦からすり抜け、その事実から眼をそらすことであつたのではないかと、指摘してゐます。それでは、敗戦といふ事実にもとむき合へばどういふことになるか。それは、「よほど本質的に、断絶と連続の二重性、解放と無力化のかさなり合い、また占領下の民主化といったアイロニカルな戦後の状況に迫る」ことになるかと氏は言ひます。しかし、この戦後は、敗戦の悲しみを思ふことも少なく、「ゼロからの出発」を誇らかに宣言し、その延長線上に今日があると宣言するでせう。それにしても、この戦後の四〇年間、日本には余りにも不健全な言論が跋扈したと言へるのではないでせうか。祖国の蔑視、死者に対する冒瀆、高貴なるものへの不信など、いくらでも指摘できます。われわれは、一日も早くこの風潮から脱却し、自己への誇りと自信を回復しなければならぬ。つくづくさういふことを思ひます。

次は江藤淳氏の一文です。これは昭和四十年の正月、読売新聞に掲載されたものです。この短かい一文によれば、氏は銀座の酒場で「妙に生々しい死者の幻影に出会つた」、「周囲に浮遊している死者たちの羽ばたき」を聞き、その気配があたりに充満してゐるのを感じたとき、氏の内部は「ある渾々としたものでみた」されはじめた。このやうな記述のあ



とに次の一文が続きます。

「私は帰ろうと思えば、前の戦争で死んだ三百万の死者たち——日本のために死んで、いまでも日本にとどまり、見てくれの急速な『近代化』から生じたその日暮らしに追われている人々からは忘れられている死者たちのところへ、帰ればよかつたのである。彼らこそが現在の私をささえていた。自分の背中にかかってくるその手ごたえと重みを、私はなによりも現実的なものとして明瞭に感じる事ができた。この感覚があるいは歴史感覚と呼んでもよい。とにかく、これらの死者たちは、われわれを過去につなぐ最初の鎖である。」

ところが私どもが経験してゐるこの戦後は、氏の言ふ「最初の鎖」をたち切るところから始まった、と言つても過言ではないでせう。そして、この「最初の鎖」がたち切られたために、現在の精神の混乱状態が生れてゐるとすれば、やはりわれわれは自らの手で、もう一度その鎖をつなぎ合はす必要があるのではないでせうか。次の一文も同じ意味合ひにおいて読むことができます。

「先見の明をもたれた少数の例外を別とすれば、きわめて多くの人々・青年学生たち

は「国のために死ぬ」ことを選びました。それは戦争に積極的意義を認めた人々だけでなく、懐疑的な人々、批判的な人々の大多数も、義務として国のために死んでいったのだと思います。……………」この国のために死ぬ」行為に、一定の道義的価値を与えなかったところに戦後日本の出発点での過誤があったように思われます。」

（粕谷一希「戦後史の争点について―鶴見俊輔氏への手紙」昭53）

「過去につなぐ最初の鎖」をたち切り、「国のために死ぬ行為に一定の道義的価値を与えず」に、過去の清算を意図し、然も、敗戦そのものには目をつぶって生きてきた——これが戦後の風潮ではないでせうか。それでは、この戦後風潮の中で、現代の青年たちは、生の実感といふものをどのやうに受けとめてゐるのだらうか。次の山田輝彦先生（九州女子大学教授）の一文（国民同胞「国破れし日」昭48）で考へてみませう。

「デモの隊列の中で、機動隊と対抗してゐる時、ギターを片手にロックやフォークに陶酔してゐる時、車の速度を上げて街路を暴走する時、はじめて生きてゐる実感を感じるといふ。何といふ脆弱で矮小な生き甲斐であらう。きびしい規制のない柔構造社会の中、何かもの欲しげなセンチメンタリズムを満足させてゐるだけではないか。国の運命

と、己れの生命を直結させ得た三十年前の青春と、どちらが幸福なのだらうか。軽々しく結論は出したくないが、戦時中の青春が不幸であったと断定できないことは確かである。」

機動隊とギターにロック、そして、暴走する車、その時、生きてゐる実感を感じずる今の青年たち。それに対して、これは「脆弱で矮小な生き甲斐」であるとの指摘。諸君は、これをどうお感じになるか。脆弱でも矮小でもないとおっしゃるか。あるいは、生きてゐる実感を感じる時なんてほとんどないと言ふかもしれない。確かにさうかもしれない。しかし、それはやはりをかしいのです。若々しく一番感受性の敏感な時期に、諸君が生きてゐる実感をもてないでゐるとすれば、それはやはりどこかに間違いがあり、本気で学問をしてゐないのだと思はれるほうがよろしい。真面目に生きて行くことを考へれば、そして、本当に学問をするといふことを考へようとすれば、必ずや自分の存在と自分が生きてゐる意味について問はざるを得ないでありませう。どうか、そのへんをよく考へてみて下さい。そして、「脆弱で矮小な生き甲斐」から脱却して、はつらつとした精神をとり戻してほしいと切に思ひます。それでは、戦時下と今とでは、どちらが幸福で、どちらが不幸な

のでせうか。私は自分が学生であった頃、自分の青春と、戦時下の青春とでは、どちらが本当に充実した日々であったのだらう、とよく思ひました。私が学生時代を過ごした四十年代の前半といふのは、スチューデント・パワーと言はれて、学生騒動が日本の全国至るところに起こりました。学生は「自由と繁栄の虚偽」と言つて騒ぎました。この騒動は激烈でしたが、「国の運命と己れの生命を直結させ得た」ことはありませんでした。何故ならこの騒動は、「絶対死なない」といふ前提の下に行なはれたからです。ここが、戦時下の青春と決定的に違ふところです。死と直面しながら、国の運命に自己の生命をつなぎ合はせようと努力した青春と本当にどちらの青春が幸福なのでせうか。「戦時中の青春が不幸であったと断定できないことは確か」なのではないでせうか。それでは、戦時中の青春とはどんなものであったか。「国民同胞」誌上の夜久正雄先生（亜細亜大学教授）の一文（吉田松陰「究理の学」昭54）から考へてみませう。次の引用はその冒頭部です。

『「統一のちをささげて―戦中学徒・遺詠遺文抄―」を読むと、親しかった友人たちの言葉に、いまさらのやうに叱咤され激励され教へられる。それは、この人たちが、『いのちをささげた』といふ事実によるが、それだけではない。『いのちをささげる』意味に

深い省察を加へてゐるからである。国をまもるといふことの意味をいのちがけで考へてゐるからである。国をまもるといふことについて、当時の青年は心をつくして思想し実行したのである。青年時代の数年に全身心を傾けて人生の眞実―生きることの意味―を、すなはち、いのちささげて死ぬことの意味を―求め求めた心のこと―これが彼らの文章である。」

この『遺詠遺文抄』は現在の国文研の先生方の戦時中の友人で、戦死された方々が書き残されたものを編集したのですが、まさしく国のためにいのちをささげられた方々の文章です。そして、その方々は「いのちをささげる」意味を深く考へ、「国をまもるといふことの意味を、いのちがけで考へ」てこられたのです。このやうな青春と生き方に対して、戦後、「犬死」だと言ったり、「軍部に騙された」といふ言論が横行しましたが浅薄なことです。私どもには、いのちがけでものを考へるといふことがわからなくなつたつあるのです。現在のわれわれには国をまもるといふことの意味をいのちがけで考へる、といふ経験もほとんどなくなりました。かつて、この国の青年たちは、国をまもるといふことについて、「心をつくして思想し、実行した」のです。今は、そんなことは考へなくても生

きていけるし、誰も要求もしません。だが、その結果、われわれは、何を得ましたか。何物にもとらはれない自立した精神をわれわれはもつてゐますか。一人一人自問してみる必要がありませう。「青年時代の数年に全身心を傾けて人生の眞実―生きることの意味―を、すなはち、いのちをささげて死ぬことの意味を」本当に深く考へてみる必要がある。戦時下に生きたかれらは、いのちがけでそのことを自問し、実行した。そして、祖国の永久を信じて戦ひに斃れて行ったのです。さういふ積み重ねの中に今日がある。われわれはこのやうな事実にもっともっと謙虚にならなければならぬと強く思ひます。

とにかく、青年時代の数年に全身心を傾けて生きることの意味を考へてみてください。そして、その経験の中で、本当の意味での生きてゐるといふ実感と生き甲斐を模索してほしいと思ふのです。

#### 献身―佐久間艇長の遺言

それでは、「いのちをささげる」といふことについてもう一つ申しあげます。それは佐久間艇長の遺言です。事件は明治四十三年に起こりました。海軍大尉佐久間勉を艇長とする

第六号艇は、潜水訓練中に誤って沈没します。乗員は浮上するためにいろんな努力を続けますが、遂に浮上できず、艇長以下十四名全員が殉職した事件です。この時、乗組員は一人残らず自分の部署にいたまままでこと切れてみました。艇長である佐久間大尉は、死に至る非常に呼吸が苦しくなる中で、最後に遺言をしたためます。それは、縦一四センチ、幅一〇センチぐらゐの手帳に、実に三十数ページにわたって書き残されたのです。船が沈み、船の中にガスが充満して、呼吸が非常に苦しくなっていくなかで、最後に至るまで書き続けられたものです。途中を少し省略しましたが、次がその遺言です。

「小官ノ不注意ニヨリ陛下ノ艇ヲ沈メ部下ヲ殺ス、誠ニ申訳無シ、サレド艇員一同死ニ至ルマデ皆ヨクソノ職ヲ守リ沈着ニ事ヲ処セリ、我レ等ハ国家ノ為職ニ斃レシト雖モ唯々遺憾トスル所ハ天下ノ士ハ之ヲ誤リ以テ将来潜水艇ノ発展ニ打撃ヲ与フルニ至ラザルヤヲ憂フルニアリ、希クハ諸君益々勉励以テ此ノ誤解ナク将来潜水艇ノ発展研究ニ全力ヲ尽クサレン事ヲ、サスレバ我レ等一モ遺憾トスル所ナシ

### 沈没原因

瓦素林潜航ノ際、過度深入セシ為メ「スルイス・バルブ」ヲ縮メントセシモ、途中「チ

エン」キレ、依テ手ニテ之ヲシメタルモ後レ後部ニ満水（セリ）約廿五度ノ傾斜ニテ沈降セリ

### 沈据後ノ状況

……………（略）……………

### 公遺言

謹ンデ陛下ニ白ス 我部下ノ遺族ヲシテ窮スルモノ無カラシメ給ハラシテ事ヲ、我ガ念頭ニ懸ルモノ之アルノミ

左ノ諸君ニ宜敷（順序不順）

一、齋藤大臣……………（略）……………一、生田小金次先生 十二時三十分呼吸非常ニクルシイ瓦素林ヲブローアウトセシ積リナレドモ、ガソリンニヨウタ 一、中野大佐 十二時四十分ナリ

これが佐久間大尉の遺言ですが、最初に陛下の艇を沈め、部下を殺したことを謝し、しかし、これが今後の潜水艇の発展に障害にならないことを要請し、そのあと、「沈没原因」をのべ、「沈据後ノ状況」（沈没したあとにどんな処置を講じたか）を詳しく書き、そし



て、「公遺言」として、亡くなった部下の遺族が生活に困窮することのないやうに陛下にお願ひし、最後に世話になつた方々に別れを告げて死んでいくのです。「十二時四十分」が最後ですから、多分この時間ごろにはほぼ全員が死亡したと思はれます。

明治四十三年といふのは、日露戦争が終つたあと、国民の心は弛緩し、文学的には自然主義が盛んで、弛緩した国民の心にくい入つてゐた時期です。人間の高貴とか權威を退け、物欲と性欲に人間を還元するといふ考へ方が人々の心をとらへてゐた時期でした。さういふ時にこの事件が起こつたのです。夏目漱石は、まだ水に濡れた佐久間艇長の手帳とその全文が新聞に掲載されたのを見て、一文を草します。これが「文芸とヒロイック」といふ一文です。この一文の中で、夏目漱石は、「ヒロイック」について、「世の中にない、又は少ないといふ事実と、馬鹿げてゐる、滑稽であると云ふ事実とは違ふ」と言ひ、少ないといふのには、価値がないから、世の人が無視してしまつたものもあるし、貴重であるがために容易に手に入りにくいといふものがある。「ヒロイック」といふのは後者である。それで自然主義者に向つて、めつたにないからといふ理由で、「ヒロイック」を描かないのはよい。だが、めつたにないからといふ理由で、「ヒロイック」を軽蔑するのは論理の

混乱である、と言ってをります。それで自然主義者が現実を重視して、事実を描くといふのなら、この佐久間艇長の事実の前に頭を下げねばならない、といふやうなことを言うてをります。又、往時、イギリスで同じやうな事件が起こったとき、「艇員は争つて死を免れんとするの一念から、一所にかたまって水明りの洩れる窓の下に折り重なつたまゝ死んでゐたといふ。」これは「本能の如何に義務心より強いかを証明するに足るべき有力な出来事である。」しかし、一方「佐久間艇長と其部下の死と、艇長の遺書も又事実である。」そして漱石は次のやうに言ふのです。

「重荷を擔ふて遠きを行く獸類と選ぶ所なき現代的の人間にも、亦此種不可思議の行為があると云ふ事を知る必要がある。」

この事件は、義務が本能に打ち克つた稀有な例でありませう。人間の高貴と尊嚴がここにはあります。ところが、この戦後は、このやうな事実は教へることもしない。それどころか、さういふ行為を蔑んだり、おとしめたりする。戦後は、「野卑と下賤の時代」とは、東大の小堀桂一郎氏の言ですが、全く同感を禁じ得ません。この時代風潮の中で、かつてこの国のために、「いのちをささげた先人」に対し、私どもはどれほどの思ひで追憶し、

それを自分自身の問題として把へてゐるかと思へますと、実に寒々とした感じがいたしません。過去を切実な思ひで受けとめることも少なく、現代に生きてゐることの意味に深い省察を加へることも稀薄だとすれば、これはもう相当異様な時代であると言へるでせう。そして、この時代風潮を少しでもお互ひに感ずることができれば、われわれ一人一人が、そこから脱却すべく努力を開始したいものです。そして、その努力の中から、自立した精神と生きてゐる実感を生み出していききたいと思ふのであります。

### 精神の自立

最後になりますが、次はフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』（角川文庫・小野浩訳）からの引用です。

「私たちは肉体と共に精神まで振ぢ伏せられ、屈服させられ、幽囚されるやうなことではならない。どうすれば、それが達成できるかと問はれるなら『この場でただちに私たちの本然、即ちドイツ人に立ち帰らなければならぬ』と私たちは答へるであらう。……私たちは精神を屈服させてはならない。さればこそ、私たちはとりわけ精神を、

しかも堅実な精神を養はなければならぬのだ。万事につけ真面目になり、浮々と遊び半分に生存を続けるやうなことをしてはならない。」

この『ドイツ国民に告ぐ』は、ドイツがナポレオンに占領された時、当時ベルリン大学の総長であったフィヒテが、一八〇七年から八年にかけて国民に向って訴へかけた連続講演です。この文章はその最後のあたりに出てきます。

このフィヒテの講演は、なぜこの国がナポレオンに占領されたかといふことから始まります。それは、ドイツの中から道義は地に墜ちて、滔々たる利己主義がこの国を支配し、全体的な同胞感は忘れ去られて、みんな自分一人のことしか考へないといふ状況であった。祖国の悲惨な敗北は、実にこの墮落の根源ともいふべき私欲の跳梁によつてもたらされたのだとフィヒテは言ふのです。従つて、この講演はこの種の利己主義を敢然と廃止することから始めなければならぬ、といふところから始まるのであります。そして、最後のあたりはこの文章が出てくるわけですが、これはそのまま今の日本にあてはまるのではないでせうか。「私たちは、肉体と共に精神まで振ぢ伏せられ、屈服させられ、幽囚されるやうなことではならない」とフィヒテは言ひます。われわれの祖国はかつて戦ひに敗れま

したが、占領時代ははるか以前に終り、肉体が振ぢ伏せられることは最早ありません。しかし、精神は振ぢ伏せられ、屈服させられ、幽囚されるやうなことが続いてゐるのではありませんか。さすればどうすればいいか。フィヒテが言ふところの「ドイツ人」を「日本人」に置きかへたらいいのです。「私たちの本然、即ち日本人に立ち歸らなければならぬ」

とにかく、われわれは精神の回復を圖らなければなりません。日本人としての誇りと自覚をとり戻す必要があります。野卑で下賤な風潮の中から一人一人が自立しなければならぬ、とつくづく思ひます。そのためにも、「万事について真面目になり、浮々と遊び半分に生存を続けるやうなことはしてはならない」と思ふのです。われわれが生きてゐる今の日本の状況が、精神は振ぢ伏せられ、個々人は自分のことしか考へないといふことになつてしまつたら、それだけで本当に國は再び敗北の様相を呈するやもしれない。フィヒテは、別の個所で次のやうにも言つてゐます。

「現在私たちの眼前に進行中のものを無視する態度や、ひよっとすると目を覚ましてくるかもしれぬ注意力を故意に他の方面へはぐらかしてしまふことは、私たちの独立を

奪はんとしてゐるものにとつては願つてもないことであるだらう。私たちがどんな事柄についてものを考へようと思ひないのを、このやうな敵が確かめるなら、彼は生命のない道具を扱ふやうに氣の向くままに私たちを操るであらう。」

再びさういふ悲惨なことがこの国に起らないやうにするためにも、自分自身でものごとを考へ、自分自身の目で歴史的事実をたしかめる。さういふ意志と心構へだけは持つていただきたいと思ふのです。そして、「浮々と遊び半分に生存を続ける」状況に自分があるなら、それはもう今日限りにして、「万事につけ真面目になり」、先輩たちが実行したやうに、本当に「いのちがけでものを考へる」努力を開始してほしいと思ふのです。そのことをお互ひに確認し合ひながら、この合宿生活を開始したいと思ひます。

## 学問の再生のために

昭和61年第31回「合宿教室」

長澤一成（九州大学循環器内科医師・30歳・九州大昭58卒）

此の合宿で学んだこと——聞くことのむづかしさ——

私が初めて此の合宿教室に参加したのは昭和五十一年、丁度今から十年前です。それから学生時代、そして社会人になつてからも、毎年の此の合宿教室に参加して参りました。此の合宿で私が学んだ事を一言で現す事は出来ませんが、敢へて申し上げるならば、それは、「聞く」ことの難しさでした。皆さんは、「聞く」ことが何故難しいのかと言はれるかもしれない。話したり、書いたり、表現することのはうが、余程難しいことで、黙つて人の言葉を「聞く」ことなど、誰でも、簡単に遣つてゐることではないか、と思はれるかもしれません。確かに、普段私達は、何の苦もなく人の話を聞いてゐる訳ですが、矢張り、皆、自分の都合のよい様に話を聞いてゐる、或は、聞いた積りになつてゐることが多いの

です。他人の言葉に、身が震へる様な感動を覚えたり、自分を虚しくして相手の言葉にじつと耳を傾ける経験、つまりは、その訓練の機会が、次第に少なくなつてゐはしないでせうか。

最近、書物やマスメディアを始め、私達の廻りには実に多くの言葉が氾濫してゐる。しかし、其処では言葉は単なる伝達のための道具として、恰も使ひ捨てのティッシュペーパーの様に扱はれてゐる。この様な世界に慣れ切つて了つた私達は、言葉は、語り手、書き手の生命の刻印であるといふ、言葉本来の姿を実感し得ない儘、多感な青年時代を過ごしてゐるのではないでせうか。仮に、友人や家族との間でその様な経験があつたとしても、古典や先人の言葉と、恰も現世の人と交はる様に個人的な交はりを結ぶといふことは、先づなくなつて了つたやうです。いや、考へてみれば、寧ろ現実の生活に於て、人と人とが言葉を通じて結び付くといふことが、どんなに深い意味を持つてゐるかに気付かないからこそ、古典や書物とも、真の交はりを結ぶことが出来なくなつて了つたのではないでせうか。

確かに、時を経るに従ひ、言葉は、人の手垢に塗れて行くものかもしれない。しかし、



その下には、いつも生命の刻印としての言葉が生きてをり、忍耐をしながら言葉と附合ひその垢を自らの努力で取り払はうとする人を待つてゐるのだと思へます。私は、此の合宿で、平生、余り意識せぬ儘過してゐる、言葉を以て人と人が、それも同時代の者のみならず、今は亡き過去の人も、心を通して行くことの大事と困難を教へられたと思つてをります。

### 現代青年と歴史

此方へ参ります前に「諸君！」といふ雑誌に掲載されてゐる石原慎太郎氏のエッセイを読んでをりましたら、彼が、その母校である一橋大学の学生寮の新築落成の祝宴に招待され、講演を行つた時のことが、印象深く書かれてゐました。彼は、後輩である一橋大学の学生に「諸君は、経済学というものを学ぶうえでの最高学府に在籍している訳だから、どうか今後、経済学を専攻する者として、古今未曾有の試みを企てて頂きたい。」といふ話をしたさうです。その講演の後、懇親会の席上、或る学生が氏に質問をした。「先程、先生は、何か、古今未曾有の事を遣つてくれと言はれたが、では、具体的には、私達は何を

したら良いのでせうか。」さすがの石原氏も、此には驚いたのですが、又、此が、現代の若者の象徴的な姿であると、痛感したと書いてをられました。

皆さんには、様々な意見がおありだと思ひますが、私にも、石原氏の言はれる様な事が、最近、特に目立つて来た様に思はれるのです。換言すれば、現代の青年は、自分が何をしようとしてゐるのか、そして、何を大切にして生きていくのか、かういつた、謂はば「如何に生くべきか」といふ、汲み尽すことの出来ない問題を、じつと胸に暖めて、自問自答して行く事が、出来なくなりつゝある、と言へるのでは無いでせうか。戦後、日本は驚くべき科学技術の進歩と経済成長を成し遂げました。しかし、それが齎した奢侈と実利、そして、溢んばかりの自由の下で生きる、私達青年の内心の空虚は、最早、覆ふべくもないのです。

さて、更に、氏は、此の様な問題は、戦後四十年にして初めて現れたものであると言つてゐるのですが、私は、少し意見を異にします。確かに、此の様なことが、現象として顕現して来たのは最近の事かも知れぬが、その胚子は、終戦直後の占領政策の中で蒔かれ、四十年の間、成長し続けて来たのだと思はれるのです。だが、此には、少し説明を要する

様です。

昨年この合宿教室は「戦後を考へる」といふテーマが一本の縦糸になつて、織り成されてゐた様に思ひます。その内容は、『日本への回帰 第廿一集』に詳しいのですが、此処で、わが国の戦後の歩みを振り返るに当つて、再び、皆さんと一緒に読んで見たい文章があります。それは、小田村四郎氏の「占領政策と日本」の中の次の一節です。

「さて、占領後遺症の最大のものは何か。それは最初に申し上げたやうに、日本国民が国家意識を喪失させたことだと思ひます。空間的にも時間的にもです。（中略） 時間的とは、全ての民族国家は長い歴史の積み重ねによつて存在してゐるに拘らず、二千年の歴史を有するわが国に対して、占領以前の歴史を全て抹殺し、その一体性、連続性を否定しようとする思考様式です。民族の過去、尊い生命を捧げて国の独立を守り、世界に誇る文化を築き上げて来た父祖の業績に対する謙虚さを喪失し、甚だしきはこれを呪詛の対象にしようとするのです。」

此処で使はれてゐる「時間的國家意識」とは、取りもなほさず、先輩や祖先達が築き上

げ、跡附けて来た歴史への、共感のことでせう。しかし、今や、現在を生きる私達は、その共感を持ってなくなりつつあり、しかも、此の冷たい無関心は、自然な時の流れに依るものでは無く、寧ろ、戦後の占領政策に依り、意図的に、作り出された状態であるといふ指摘だと思ひます。此処では、此の問題に具体的に触れる余裕はありませんが、是非心にとどめて、これから勉強して頂きたいことだと思ひます。しかし、青年の心から、自らの生き甲斐を希求する気持が失せ、恰も浮草の様に生きて行くことに何等痛痒を感じなくなつて了つたことと、先輩達の生き様に対する無関心とは、一体どう関係してゐるのでせうか。

### 歴史に学ぶ

此の事は、言葉を換へれば、歴史に学ぶことと、私達の生き方とが、どう繋がるのかといふことだと思ひます。此は、以前知つたことですが、紀元前四八〇年アテネ、スパルタを中心としたギリシャ都市国家群は、侵攻して来たペルシャ軍を迎へ撃つて大戦闘を展開しました。有名なペルシャ戦争の一齣です。ペルシャは、陸海相呼応して、ギリシャに迫

り、その数、陸兵参十万、兵船八百隻から成る大軍でした。此時、陸路を攻め寄せたペルシャ軍を、テルモピレイで迎へ撃つたのが、レオニダス率ゐるスパルタ軍だつたのです。しかし、さしものスパルタ軍も、数十万のペルシャ軍の前に、奮戦虚しく、此の地で玉碎してしまひました。しかし、その後、アテネを中心としたギリシャ海軍の健闘により、サラミスの海戦に勝利したギリシャは、ペルシャを圧倒して和を結びます。玉碎しながらも、寡兵よく数日間持ちこたへたスパルタ軍の勇名は、テルモピレイの戦として今日まで、語り継がれてゐるのですが、そのテルモピレイの地に、今でも、ひとつの石碑が残つてをり、それには、かう記してあるさうです。「道行く人よ、スパルタに行つて告げてくれ。私達はスパルタ人の命によつて此処で死ぬのだ。」石碑は、誰が建てたのかも判らぬのですが、此の石碑の言葉こそ、歴史の本質を語つてゐる様に思はれるのです。

此処でいふ歴史とは、勿論、皆さんが受験勉強で遣つて来た、時代や出来事の羅列と暗記などではありません。「スパルタに行つて告げてくれ」といふ過去の人々の、思ひ溢れた、言葉そのものなのです。過去の事実の全てが歴史として残つて行く訳ではない。過去を生きた人々の、深く、強い思ひが、時を超えて、歴史として伝へられて来た。現代の歴

史を貫いて流れてゐる最も大切な本質をなすものは、自分は此の様に生きたのだ、そして、それを伝えて欲しいといふ古人の痛切な思ひであると、私は思ふのです。此の切実な思ひは、言葉といふ形を取り、それを、実際には、経験しなかつた人の心をも動かす力を持つてゐる。何故なら、それは、多くのひとが、古人の中に自分の姿を見出したからでせう。すなはち、歴史には、私達が、平生、意識しない儘に生きてゐる、自分自身の姿が写されてゐるのです。それ丈ではない、或る時は身を挺して困難に当り、或る時は大きな喜びに包まれ、そして、又、或る時は深い悲しみを味はふ。それを言葉にしながら、人生を真摯に生きて行つた先人の姿に、今生きる私達が、共感や疑問を抱き、自問自答を重ねながら、生き方を定めて行く、それが、歴史に学ぶことの本義でせう。

私達が、言葉を使ふ時、先づ模倣することから始めたやうに、生き方といふものも、矢張、先輩達が、どう生きたかを模倣することに始まるのです。しかし、先程の小田村氏の言葉の様に、私達は、歴史に対する無関心を是とする、意図的に作られた空間の中で成長し、今も、その中で呼吸してゐるのです。しかも、潤沢な物質と高度な技術、そして溢れんばかりの自由。此処では、形而下的な、欲望を満たすことが人生の目標となり、生き方

の規範などといふ事は、陳腐なこととして、省みられなくなつて了つてゐるかの様です。人はパンのみにて生きるにあらずといふ聖書の言葉が長く生き続けて来た様に、生きるこの意味が、その様な事だけでないといふことは、誰もが、心の奥では思つてゐるに違ひない。しかし、先程の大学生の様に、歴史に冷淡になつて了つたが為に、つまり、生き方を模倣する事をしなくなつたが為に、パンにあらざる人生の目標を、自分の意志と努力で求めて行くことが出来なくなりつゝあるのです。そして、更に、恐ろしい事は、私達青年が、さういふ自分に対して、何等戦慄を感じなくなつて了つてゐる事なのです。

#### 戦没学徒の遺書

此処に御紹介するのは、約十年前の頃の合宿で、夜久正雄先生が、御話しになつた、一人の若き戦没学徒の遺書であります。此処にも、その折り一緒に、先生の御話を聞いた方が、大勢いらつしやいますが、私は、先生が、涙ながらに読んで行かれる此の遺書の言葉を迎りながら、涙が溢れてくるのを、どうしやうもありませんでした。此の遺書を残された方は、茶谷武氏といつて、昭和廿年四月廿三日、フィリッピン、ルソン島タクボといふ

処で、弱冠廿三歳で戦死された方です。夜久先生は、大学卒業後、当時の府立一中夜間部の教員をなさつてゐたのですが、茶谷氏は、その時の教へ子だつた訳です。そして、此の遺書は、戦死される直前に、御家族に宛てて出されたものですが、戦後三十年の歳月を経て、夜久先生の知る処となつたものです。

遺書

父上  
母上様へ

武モタウノ才役ニ立ツ時ガ参リマシタ。生ヲ稟ケテ二十余年唯ノ一度モオ心ヲ安マセルコトナク過シテ来タコトヲオワビ致シマス。今ノ私ノ氣持ハ吉田松陰先生ノ「親思フ心ニ勝ル親心今日ノ訪レ何トキ克蘭」ト歌ハレタ氣持ソノマ、デアリマス。今思ヒマスニ人一倍子ボンノウノ父上ニトツテコレヲヨマレ（ル）ノハドンナデアルカハヨシ全部デナクテモオシハカルコトガ出来マス。デモ此ノ皇国危急ノ秋私達ノ涙ハカクサレネバナリマセン。私ノ肉体ハコ、デ朽ツルトモ私達ノ後ヲ私達ノ屍ヲノリコヘテ私達ヲ礎トシテ立ち上ツテクル第二ノ国民ノコトヲ思ヘバ又之等ノ人々ノ中ニ私達ノ赤キ血潮ガウケツガレテキ



ルト思へバ決シテ私達ノ死モナゲクニハアタラナイト思ヒマス

日本ニ生レタ者ノミニ許サレル永遠ノ生ニ生キルトイフコトガイヘルノデス

之等ノ事ヲ思へバ私達ハ涙ヲ流ス前ニ故国ノ勝利ヲ、天壤無窮ヲ祈ラネバナリマセン  
ド  
ウゾ私ノコトヲ笑ッテホメテ下サイ 武モ笑ッテ散リマス デハ父上母上オ身体ヲ大切ニ  
シテ下サイ  
サヨウナラ

武ヨリ

ワガ生ハ下葉ノ露ト消ユルトモ何カ惜マンコノ秋ニシアレバ

我が肉ハヨシ朽ツルトモアガ魂ハミ空天カケ御国守ラン

征キ／＼テ草ムス屍ト果ツルコソ我身ニツキヌ思ヒナリケレ

神州ノ不滅ヲ信ジ吾ハ唯ニマケノマニ／＼進ミ行カナム

大君ノマケノマニ／＼生キ死ナム時ゾ近ヅキ吾ガ胸ハル、

同胞之働キミテハ日ニ夜ニモダセシ心今ゾハル、モ

アガ家ノ名ヲケガスナトノタマヒシアガ父ノ言ワスレカネツル

千枝子へ

兄サンハ今死ニツクニ当リオ前ニ一言遺シテオク　ワカラヌ所ガアルカモ知レヌガ来年ハ  
六年生ニナルノダカラヨクヨンデミナサイ

兄ナキアト茶谷ノ家ノ血統ヲツグノハオ前一人ダ　兄サンハ御国ノ危急ニ身体ノ心ノ一切  
ヲ陛下ニ捧ゲ日本男児トシテノ責任ヲ果ス為ニ今死ニツクノダ　決シテ泣イテハナラヌ  
涙ヲヌグツテコノ大イナル戦ノ勝利ヲ祈ラネバナラヌ　オ前ノ兄ハコノ美シキ尊イ御国ヲ  
護ル責任ヲ果シタコトヲホコリト思ハネバナラヌ　オ父サンオ母サン先生方ノ言フコトヲ  
ヨク守ツテ日本ノ婦人トシテハヅカシクナイヤウニ一生懸命勉強シナサイ　モウ少シ大キ  
ケレバイフコトモ沢山アルガマダイツテモワカラナイダラウカライハヌ　ソレカラ女学校  
ニデモ入ッタラ歌ヲ作りナサイ　歌ハ決シテ風流ナモノデハアリマセン　自分ノ心ヲイツ  
ハラズカザラズソノマ、三十一ノ文字ニ表ハスノデス。

デハ千枝子ヨ　サヨウナラ

兄ヨリ

確かに、戦争の悲惨を語り尽すことは出来ないでせう。戦争が、私達にとつて、忌み嫌

はれるものであるのも、当然でせう。しかし、私達が、人間であるかぎり、此の地上から争ひがなくなるといふことはありえないのです。平和をスローガンに戦ふのも、又、人間なのです。個人の人生に時として不幸が降り掛かるやうに、一国の歴史にも不幸が生じる。そして、茶谷さんを始め、多くの先輩達が、その悲惨を避けずに、全力を挙げて、これに立ち向かつて行つた。これが、僅かに、四十年前の、私達と同じ年頃の青年の生き方だつたのです。戦争の悲惨をいふのは良い。しかし、その一方では、戦ひに朽ち果てて行つた先輩達が、何を守るために命を賭けたのかを、彼等の身になつて思ふべきではないでせうか。

此の遺書を、初めて読んだ時、今日の日本が、偶然存在してゐるのではなく、多くの先人達の意志と苦闘の上に成り立つてゐるのだといふ、謂はば当り前のことが、私には、初めて、自分の中に生きた言葉として感じられ、今迄は、抽象的な言葉に過ぎなかつた「歴史」が、具体的な形を執つて迫つて来た様に思ひました。そして、文中の「第二の国民」が、とりもなほさず、私自身であることを思つた時、此の、家族に宛てられた、茶谷さんの言葉は、私への語り掛けとも思はれ、私は、今、重大な付託を受けてゐるのだと感じた

のです。その感動の中で、私は、生涯を通して、自分が何をしようとするのかを考へ始めました。

### 再生せらるべき学問とは

さて、此の講義の演題は、「学問の再生のために」と題しました。皆さんは、学問といふ言葉を聞いてどういふ風に受け止められるでせうか。受験勉強を思ひ出される方もいらつしやるでせう。又、現在の大学の中では、計測出来、他と主観を交へずに比較する、つまり、客観的に現象や出来事を捉へる事が学問であると考へられてゐます。文科系、理科系、又、各々の中でも、具体的な方法は異なつてゐるが、その基本的な姿勢は、変らないのです。さういふ中で、古典を読み、歴史に学び、如何に生きるかを問うていく様なことは、個人的な、いはゞ、趣味の問題として省みられなくなつてしまつてゐます。受験勉強も、大学における研究も、その重要性は、言を待たないが、しかし、此は、私達が、世を涉り、人々に貢献する為の、一つの手段なのです。大学に進む迄は、受験勉強が、学問であると思ひ、大学では、方法論と技術を学ぶことが学問であると思ふ。だが、私達は、さ

ういふものを、何に使はうとするのか、つまり、如何に生きるかといふ問題を問ひ、鍛へて行く場は、私達の周囲には、皆無と言つても良いほどです。大学の中に、或は、高校の中に、さういふ場が無いのも問題ですが、最も問題なのは、此の空気の中で、私達自身の心の中から、それが、消え去らうとしてゐることです。さういふ意味で、今日、演題に掲げました「学問」といふ言葉は、謂はば、人生と直結した学問といふ意味を籠めてゐるのです。

かういつた、学問とは、科学的なものである、といふ風潮と真向から戦ひ、生きることの意味を問ふ学問の回復を説き続けた方に、此の合宿に何度も御出講頂いた、小林秀雄先生がいらつしやいます。先生の大著『本居宣長』の中の一節に、伊藤仁齋、荻生徂徠といつた当時の、官学の流れに抗して、「卓然独立」して、自分の学問を展開していつた近世の儒学者に触れた箇処があります。

「彼等が、所謂博士家或は師範家から、学問を解放し得たのは、彼等が古い学問の対象を変へたり、新しい学問の方法を思ひ附いたが為ではない。学問の伝統に、彼等が目覚め

たといふところが根本なのである。過去の学問的遺産は、官家の世襲の家業のうちに、あたかも財物の如く伝承されて、過去が現在に甦るといふ機会には、決して出会はなかつたと言つてよい。『古学』の運動によつて、決定的に行はれたのは、この過去の遺産の蘇生である。言はば物的遺産の精神的遺産への転換である。過去の遺産を物品なみに受け取る代りに、過去の人間から呼びかけられる聲を聞き、此に現在の自分が答へねばならぬと感じたところに、彼等の学問の新しい基盤が成立した。今日の歴史意識が、其の抽象性の故に失つて了つた、過去との具体的と呼んでいゝ親密な交りが、彼等の意識の根幹を成してゐた。」

語義の解釈や注釈に終始してあるうちに、古典は、一般人の生活とは、縁遠いものとなつて了つた。古典の中に、自分自身の顔を見いだす喜びが、わからなく成つて了つた時に、彼等が現れ、そして、書物の中に、「過去の人間から呼びかけられる聲を聞き」「過去との具体的と呼んでいゝ親密な交り」を結んでいつたのです。仁齋は、五十年の間、『論語』を読み続けたさうです。これも、小林先生のエッセイで知つたことですが、仁齋に

は、『論語古義』といふ著作があります。其の原稿が、現在、天理図書館に残されてゐるさうですが、その冒頭に、「最上至極宇宙第一書」と、書いては消し、消しては書いてゐる跡が残つてゐるさうです。五十年間読み続けて来た書物に対する評価を「最上至極宇宙第一書」とし、しかも、それを公言することに一種の躊躇ひを覚え、書いては消して、迷つてゐる。かういふ仁齋の姿を、小林先生は、惚れた女の事を語る男の様だと書いていらつしやいますが、將に、仁齋にとつて、古典を学ぶとは、作者と恋仲になる様なものだつたのでせう。もうひとつ、過去との親密な交はりについて、『本居宣長』の中から引いてみませう。宣長は、晩年の三十年を費やして『古事記』の注釈書である『古事記伝』を書き上げます。その『古事記伝』が完成した寛政十年に、宣長は、次の様な歌を詠んでゐます。

古事記伝を書き終へたる喜びの會をしける

ふるごとのふみをらよめばいにしへのてぶりこととひききみるごとし

宣長にとつても、『古事記』を読むことは、眼前に古人の姿を見るやうなものであつた

のです。私達は、かういふ読書を想像することが、大変困難になつて了つた世に生きてゐる。しかし、如何なる世であつても、生き方といふものが、先づ、学び、模倣するといふことからスタートするといふ、人生に関する基本的原理が、変はらない以上、仁齋等の学問が古くなることは、無いのです。先程の引用の後には、次の様な文章が続きます。「彼等にとつて、古書吟味の目的は、古書を出来るだけ上手に模倣しようとする実践的動機の実現にあつた。従つて、当然、模倣される手本と模倣する自己との対立。その間の緊張した関係そのものが、そのまま彼等の学問の姿だ。古書は、飽くまでも現在の生き方の手本だったのであり、現在の自己の問題を不問に附することが出来る認識や観察の対象では、決してなかつた。」

#### 人生に直結した学問のスタートを

最後に、此も、江戸時代の儒学者ですが、山鹿素行の『武教小学』の中の一節を読んでみます。

「大農、大工、大商を天下の三宝となす。士の農工商の業無くして、しかも、三民の長



たる由縁のものは、他なし、良く身を修め、心を正しくして、国を治め、天下を平らかにすればなり。」

余談になりますが、かういふ言葉も、此を、今に、蘇らせるには、私達の心の努力を必要とするのかもしれませんが。例へば、「士農工商」といふ言葉を聞いただけで、もう「身分制度」といふ概念が、私達の心を暗くしてしまふ。そして、此の言葉は、「封建時代」の陳腐な、自分とは縁遠いものになつてしまふのです。しかし、それでは、素行が、「士農工商」といふ制度に見いだした意味に、まっすぐ迫ることは出来ないでせう。

さて、素行の言葉に戻ります。農、工、商、何れも物を創る、動かすといふ行為を通して、世間に貢献する階級です。ところが、武士はどうだつたか。侍の本分は、戦闘です。戦国時代迄は、腰の大刀も、兵学も十分その存在意義をもつてゐた。しかし、徳川の世になり、少なくとも、戦国時代の様な、戦乱は、姿を消してしまひます。かういふ太平の時代に、しかも、何も創り出さない武士といふ階級が、何故、二百六十年もの間、社会の頂点に位置し続けたのか。彼等が強権を以つて、下層階級を抑へてゐたからでせうか。農工

商の民が、愚かで、脆弱だったからでせうか。私は研究者ではありませんので、此の事を、実証出来る様な、充分な検討をした訳ではありませんが、常識から考へて、それだけで、此の、武士の二百六十年に亙る地位の安定を説明出来るとは思へません。矢張、農工商の民にとつて、侍は、その存在に、畏敬の念を持つべき、何等かの意義を有してゐたと考へるはうが、余程自然なことに思へます。では、農工商の民をして武士の存在を納得させてゐたその意義とはなんだつたのか。その答が、此の素行の言葉だつたのではないでせうか。侍は何も創り出しはしないが、自分がどう生きるかをいつも考へてゐる。人生の大事に當つて、どう進むべきかを、身を以つて示すべく、毎日を生きてゐる。さういふ、侍の姿に対する共感があつたからこそ、武士達は、農工商の民の、尊敬を得、強權に依らざる統治を維持し得たのではないでせうか。

さて、此の素行の言葉を現在に置いて考へてみませう。今や、大学は、技術修得の専門学校だの、社会に出るまでの猶豫期間だの、更には、レジャーランドとさへ言はれてゐる様です。確かに、さうなのかもしれません。今や、大学に進むことは、寧ろ当然であり、昔の様に、事更、大学に学ぶことの意義を求めても仕方がないのかもしれませんが、しかし、

矢張、それは、風潮なのです、変はり易い流行なのです。世の中の流れがどうであれ、鋭敏に、そして、真剣に生きてゐるものにとつて如何に生くべきかといふ問ひは、昔も、今も、変わらず、いつも存在してゐるのです。諸君の友人の中には、中学、或は、高校を卒業して既に働いてゐる人がゐるでせう。彼等が、額に汗して働いてゐる間、諸君は、読書も出来る、一流の人の話を聞くことも出来る。しかし、侍がさうだつた様に、諸君も何かを創り出し、世に貢献するといふ訳ではない。さういふ四年間の意義を何に求めるのかを、よく考へて貰ひたいのです。「良く身を修め、心を正しくして、国を治め、天下を平らかにする」といつた、己の生き方を問ひ、実践して行く姿に、素行は、武士の存在意義を認められた訳ですが、現今の大学における、青年の学問に缺落してゐるものは、將に此の点ではないでせうか。仮初のものではない、人生の本質と直結する学問に、それも、偏頗なエリート意識ではなく、堂々たる使命感を持つて、進むほかはないと思ふのです。

## あとがき

——編集委員を代表して——

戸田建設(株)事業計画部主任技師 青山直幸

(昭和四十七年東大工卒)

本書の「前編」とも言ふべき前年度刊行の『戦後世代からの発言』の時に、私は編集委員の一人に加へて載いたが、無事刊行できたことは、委員一同にとって大変嬉しいことであつた。それに、大方の御好評を得て増刷となつたことも、この上ない喜びであつた。

そのためか、昨年に続いて今年も、その「続編」刊行の企画が本会の理事会で決定され、その編集が「前編」の委員に重ねて依頼されるに至つた。ただ理事会からは、「前編」とは異つた視点——本会が三十年にわたつて営んできた「合宿教室」での「青年体験発表」を中心にしてほしい——の提示があつたので、編集の目標として、戦後世代に属する我々の仲間が、「合宿教室」の場で全国から参集してくれた学生達に語りかけ、また、訴へた生の言葉を集録しようといふことになつた。我々は実社会に出てから各々の職場にお

いて、現実の諸問題にぶつかって自己を見失ひさうになったりしながらも、「合宿教室」といふ稀有な機縁で結ばれた友らに励まされ、そのつど新しい力が沸き上って来て、その事態に対処し得たこともしばしばであった。

ここに集録したのは、既往三十一年間にわたる「合宿教室」でなされた、さうした体験を中心とした「青年体験発表」と「青年講義」の中から選択したものである。

「青年体験発表」は、第十七回合宿教室（昭和四十七年）で初めて日程に加へられたもので、以後毎回二～三人の若い社会人会員が登壇してをり、今年の夏までで既に四十四人に達してゐる。一人あたり僅か二十分程の短い時間ではあるが、それぞれの社会生活の中で体験したことや、痛切に感じたことなどを卒直に語ってくれたものである。緊張や不安で一杯であった参加学生達も、年頃も近い先輩達のこれらの体験的告白は、直ちかに心に響いていったやうであった。ある参加学生は、この「青年体験発表」を聞いて、次のやうな短歌を創つてゐる。

と　　大久保民子さんの発表を聴きて（昭和五十三年八月）　　早大政経一年　松本浩之

あ　　なつかしき心で人に接すれば直ちかき心のよみがへるといふ

あたたかき心の通ひを願ひつつ歩まむといふ先輩のたのもし

\* 大久保民子（現・小原）さんは、当時鹿児島県小瀬田中学講師で学生時代の体験や初めての教員生活の体験等を発表された。（本書66頁所載）

登壇した人達の、社会人としては未熟ながらも、自らの職責を果たす為に全力を尽す一方で、一人の日本の若者としての気概を持ちつつ、祖国の行く方に思ひを致す姿は、学生達に新鮮な感動を与へ、「合宿教室」の中の重要な一コマとなったのである。

一方、「青年講義」の方は、第十六回（昭和四十六年）から日程に加へられ、以来既に十四人の登壇が算せられてゐる。「青年講義」が登壇するに到った理由は、次の通りであった。昭和三十一年、この「合宿教室」が創始された当時、今の国民文化研究会の諸先生方は、二十歳代、三十歳代であられたにもかかわらず、全国から集った大学生に向つて堂々と講義をされたのである。それを思ひ、我々も壇上に上るべく努力しよう、といふことになったのである。登壇した若い講師たちは、その職業が教師、医師、会社員、その他と異つてはゐても、いづれも忙しい職務や家庭生活の合間をぬつての平素の学生指導や、会員相互の研鑽に励みながらの寸暇を惜しんでの読書によって、その期待に応へたものであ

る。本編には、紙面の都合上わづか四篇しか集録することができなかつたが、他の講義もこれらに遜色のない内容のものであることを付記しておきたい。

なほ、編集に当っては、前半を「青年体験発表」に、後半は「青年講義」としたが、順序は「前編」と同じく、発表・講義が行はれた年次に従つた。

本編の仮名遣ひは、「前編」と同様全て「正仮名遣ひ」（歴史的仮名遣ひ）とした。また、本編に採録した発表・講義は全て「合宿教室」のレポートである『日本への回帰』シリーズから集録したものである。

本書の編集に当っては、国民文化研究会の諸先生・諸先輩をはじめ、多くの方々の御助言を戴き、また同信の友らのお力添へを賜はつたことから心から御礼申上げなければならぬ。また半年の間作業を共にし得た編集委員長・奥富修一氏（東急建設・工務部審査課長）、編集委員澤部壽孫氏（日商岩井・大阪エネルギー第一部長）・磯貝保博氏（講談社・広告局第二部長）、今林賢郁氏（新日本製鉄・事業開発部部長代理）、柴田悌輔氏（方栄産商・取締役）、藤井貢氏（講談社・校閲局社員）の諸兄と共に本書の上梓を喜び合ひたいと思ふ。





昭和六十二年十二月十五日 発行

頒価 七〇〇円

言 発 からの 代 世 後 戦 ・ 統

——真正なる日本人を目指して——

国文研叢書 No. 29

編 者

本書編集委員会代表

奥 富 修 一

発行所

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七―〇―一八

(柳瀬ビル)

電話(〇三)(五七二)一五二六、七  
振替 東京 七一六〇五〇七番

印刷所

奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一―四

落丁乱丁のものはお取り替へいたします。

(既刊) 国文研叢書 (新書判)

No. 1	夜久正雄著	古事記のいのち (改訂版) (原) 昭和41年・(改) 昭和48年	316頁
No. 2	高木尚一著	日本精神史鈔 親鸞と実朝の系譜 昭和41年	279頁
No. 3	小田村寅二郎編	弁証法批判の歴史 昭和42年	241頁
No. 4	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文獻資料集・上巻(古代・中世) 昭和42年	309頁
No. 5	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文獻資料集・中巻その1(近世I) 昭和43年	317頁
No. 6	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文獻資料集・中巻その2(近世II) 昭和43年	409頁
No. 7	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文獻資料集・下巻その1(近代I) 昭和44年	403頁
No. 8	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文獻資料集・下巻その2(近代II) 昭和44年	381頁
No. 9	川井修二治著	歴史と人生観 ヲルクス主義の超克 昭和43年	283頁
No. 10	小田村寅二郎著	改米名著邦訳(明治)集 文獻資料集 昭和45年	483頁
No. 11	桑原暁一著	日本精神史鈔 花山院とその系譜 昭和45年	310頁
No. 12	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のすずめ 創作と鑑賞 昭和46年	309頁
No. 13	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のすずめ (続) 短歌のすずめ) 昭和46年	316頁
No. 14	桑原暁一著	ヨーロッパにおける ヲルクス主義批判論集 昭和48年	338頁
No. 15	夜久正雄著	白村江の戦—7世紀・東アジアの動乱 昭和49年	324頁
No. 16	桑原暁一著	国史の地熱—聖徳太子と楠氏(の)精神 昭和49年	293頁
No. 17	戸田義雄著	日本における ヲルクス主義批判論集 昭和51年	320頁
No. 18	三井甲之著	明治天皇御葬研究(復刊) 昭和52年	354頁
No. 19	国民文化研究会編	いのち ささげて 戦中学徒・遺詠文抄 昭和53年	450頁
No. 20	国民文化研究会編	いのち ささげて 戦中学徒・遺詠文抄 昭和54年	421頁
No. 21	加納祐五・三浦貞蔵共編	続 社会主義理論との戦い(山本勝市博士論文選集) 昭和55年	420頁
No. 22	桑原暁一・遺稿から	"とつちやん"先生の国語教室 昭和56年	172頁
No. 23	小柳陽輝太郎著	戦後教育の中で 昭和56年	298頁
No. 24	山田輝彦著	明治の精神 昭和57年	335頁
No. 25	松田福松著	明治の精神 昭和58年	270頁
No. 26	夜久正雄著	米英思想研究抄 昭和60年	320頁
No. 27	編集委員會編	「ししまの道」研究 昭和61年	350頁
No. 28	編集委員會編	学問・人生・祖国—小田村寅二郎選集 昭和62年	357頁
		戦後世代からの発言 昭和62年	357頁







